

大会テーマ

磨き合い響き合う教育をめざして

—— バズ学習の実践から ——

第23回全国バズ学習研究大会

提 案 要 項

期日 昭和63年10月7日(金)・8日(土)

会場 愛知県春日井市立中部中学校

主催 全国バズ学習研究会

春日井市立中部中学校

共催 春日井市バズ学習研究会

後援 愛知県教育委員会

尾張教育事務所

春日井市教育委員会

《 23回全国バス学習研究大会

分科会・会場		内 容	区 別	司 会 者
第1分科会	(A) 3の1 教室 (本館2階)	教科指導	小学校 (A)	・江崎 延二(春日井市立松原小教頭) ・名倉 幹雄(春日井市立岩成台小教頭)
	(B) 3の2 教室 (本館2階)	教科指導	小学校 (B)	・牧野 耕三(春日井市立鳥居松小教頭) ・尾関 昭彦(春日井市立篠原小教頭)
第2分科会	体育館	教科指導	中高校	・井村 義雄(春日井市立藤山台中教頭) ・神戸 行弘(春日井市立南城中教頭)
第3分科会	3の6 教室 (本館2階)	特別活動	小学校	・山中 伸雄(春日井市立勝川小教頭) ・丸山 正克(豊川市立代田小教頭)
第4分科会	3の10 教室 (本館3階)	特別活動	中高校	・横手 茂(広島県豊田郡豊町立 豊中教頭) ・丹羽 一男(春日井市立高蔵寺中教頭)
第5分科会	3の12 教室 (本館3階)	学級経営 生徒指導	小学校	・江木 洋治(土岐市立泉西小教頭) ・岩田 鎮人(春日井市立高座小教頭)
第6分科会	家庭室 (本館3階)	学級経営 生徒指導	中高校	・堀田 孝夫(春日井市立鷹来中教頭) ・加藤 孝史(春日井市立西部中教頭)
全体会		記録者	⇨ 梅村 俊樹(春日井市立春日井小教頭) 深津 高	

助言者	提案者	記録者
<ul style="list-style-type: none"> 市川 千秋(三重大学助教授) 久保田 滋(東京目黒区教育研究所) 鶴岡 健治(春日井市立高座小校長) 	<ul style="list-style-type: none"> 今田 保博(姫路市立峯相小) 高橋 史樹(海部郡雲江町立雲江小) 堤 泰喜(春日井市立北城小) 	菅長 彰子 (姫路市立峯相小)
<ul style="list-style-type: none"> 杉江 修治(中京大学教授) 吉田 武男(姫路市立飾磨小校長) 水野 明(春日井市立石尾台小校長) 	<ul style="list-style-type: none"> 青木 節子(土岐市立泉西小) 梶田 哲也(春日井市立藤山台東小) 	永野 進 (春日井市立鳥居松小)
<ul style="list-style-type: none"> 梶田 正巳(名古屋大学教授) 小石 寛文(神戸大学助教授) 牛尾 照夫(前姫路市立高丘中校長) 望月和三郎(前東京清瀬第五中校長) 桜井 芳昭(愛知県教委 主査) 今尾 啓一(春日井市立西部中校長) 	<ul style="list-style-type: none"> 平位 隆昭(姫路市立高丘中) 佐々木 寿(青森市立横内中) 坂本 守生(青森市立横内中) 水谷 年孝(春日井市立高森台中) 林 薫(春日井市立中部中) 毛利 公(春日井市立中部中) 	田中 智也 (姫路市立高丘中) 渡辺 浩 (春日井市立南城中)
<ul style="list-style-type: none"> 遠水 敏彦(名古屋大学助教授) 石田勢津子(名古屋大学助手) 加藤 鈞(尾張教育事務所管理主事) 山田 節男(春日井市立神屋小校長) 右高 徳夫(春日井市立東野小校長) 	<ul style="list-style-type: none"> 堀江 哲(新潟市立太郎代小) 大島 郁雄(春日井市立松原小) 小林 三洋(春日井市立中央台小) 	梶田 憲正 (春日井市立八幡小)
<ul style="list-style-type: none"> 松原 敏浩(大同工業大学教授) 太田 信夫(筑波大学助教授) 新田 正彦(元広島県立豊高校校長) 舟越 和古(新潟市立中野小中校長) 山田 克巳(青森市立横内中校長) 岡田 脩(土岐市立泉中校長) 森田 利夫(春日井市教委学務課長) 西村 精爾(春日井市立南城中校長) 	<ul style="list-style-type: none"> 中丸 智公(広島県豊田郡豊浜町立豊浜中校長) 武田 広也(春日井市立南城中) 藤城 吉雄(春日井市立中部中) 石黒 照人(春日井市立中部中) 	富田 彪 (春日井市立柏原中)
<ul style="list-style-type: none"> 鹿内 信善(北海道教育大学助教授) 小森 孝彦(京都女子大学助教授) 小島 幸彦(土岐市立泉西小校長) 石部 清和(滋賀湖東町立湖東中校長) 後藤 昭廣(寝屋川市立楠根小校長) 坂 美雄(海部郡雲江町立雲江小校長) 稲山 幸博(春日井市立鳥居松小校長) 	<ul style="list-style-type: none"> 牛尾 英俊(姫路市立飾磨小) 田川 正樹(春日井市立玉川小) 杉山あさ子(春日井市立小野小) 	長縄 秀孝 (春日井市立篠木小)
<ul style="list-style-type: none"> 永井 辰夫(稻沢女子短期大学教授) 石田 裕久(南山大学助教授) 中野 靖彦(愛知教育大学助教授) 清水 快雄(瑞浪市立瑞浪小校長) 越智 昭孝(広島県立広高校教諭) 松本 隆雄(春日井市教委指導主事) 	<ul style="list-style-type: none"> 本多 弘尚(土岐市立泉中) 古賀 直人(春日井市立鷹来中) 武山 春雄(春日井市立中部中) 伊藤 富男(春日井市立中部中) 	可知 達也 (土岐市立泉中) 堀場 正美 (春日井市立鷹来中)

子(春日井市立高座小) 写真・記録 ⇨ 林 太郎(春日井市立玉川小教頭), 三輪 徳行

第1分科会

教科指導（小学校）

司 会 者	江崎 延二（春日井市立松原小学校教頭） 牧野 耕三（春日井市立鳥居松小学校教頭）
助 言 者	杉江 修治（中京大学教授） 市川 千秋（三重大学助教授） 久保田 滋（東京都目黒区教育研究所員） 鷗飼 健治（春日井市立高座小学校長） 吉田 武男（姫路市立飾磨小学校長）
提 案 者	今田 保博（姫路市立峯相小学校教諭） 青木 節子（土岐市立泉西小学校教諭） 高橋 史樹（愛知県海部郡蟹江町立蟹江小学校教諭） 堤 泰喜（春日井市立北城小学校教諭） 梶田 哲也（春日井市立藤山台東小学校教諭）
記 録 者	菅長 彰子（姫路市立峯相小学校教諭） 永野 進（春日井市立鳥居松小学校教諭）

「自立への基礎を養う生活科教育のあり方」

兵庫県姫路市立峰相小学校 今田保博

(1) 研究主題

自立への基礎を養う生活科教育のあり方

(2) 研究主題設定の理由

以下の3点の理由により上記主題を設定し、「自立への基礎を養う」ための方策をいろいろな角度から探ることとした。

- ① 現在の急速に変化する社会に、児童が対応していくためには、既往に安住することなく、よりよきものへ関心や興味をもち、不断に新たなものを学び取ることが要求されている。そのため、児童自らが主体となって自然や社会とかわりつつ、生活上必要な習慣や技能、生きて働く知識などを身に付ける必要があろう。
- ② 本校の低学年児童には次のような傾向がある。
 - ・ 基本的な生活習慣が身につけていない。
 - ・ 生活上必要な技能の習得が不十分である。
 - ・ 体験し、実感し、納得していることが非常に少ない。
- ③ 教育課程審議会の答申（昭和62年12月24日）の生活科「教科設定の主旨とねらい」に「生活科は具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養うことをねらいとする」とある。

(3) 研究方法

- ① 理論的研究
 - ・ 教科としての生活科
 - ・ 自己認識、社会認識、自然認識
 - ・ 領域、系統
 - ・ 授業の方法、形態
- ② 調査的研究
 - ・ 児童、社会環境、自然環境の実態把握
 - ・ 児童の社会や自然に対する関心度
 - ・ 適性性の発達
 - ・ 児童の生活経験
- ③ 開発的研究
 - ・ 年間指導計画、単元指導計画の作成
 - ・ 教材開発
- ④ 実践的研究
 - ・ 授業を通じた年間指導計画、単元指導計画の妥当性の検討
 - ・ ティーム・ティーチング、チューター制度、モジュール学習
 - ・ 評価の方法
 - ・ 特別活動における生活科の位置付け（例、○○集会）

(4) 研究内容

① 学校の環境を生かして

子どもが学習する上で、環境の果たす役割は非常に大きい。本校は、開校以来、合科的な指導を行い、とりわけ環境の整備には力を入れてきた。学校の持ち山で展望台のある岩峰山、その麓にある樽桶アスレチック（ターザンロープ、レインジャーロープ、トコトコ階段、ジャンプ台など）、子ども達がうさぎやにわとりと遊ぶことができるタッチンググラウンド、自由に土遊びができる造形広場、季節ごとにいろいろな虫が飼育されている昆虫館、四季それぞれの花や野菜が植えられている花壇や学習農圃、金魚や鯉が泳ぐ池や水槽、楽しい遊具が設置された運動場、その他、社会科資料室、ミニ美術館、ミニ科学館、など大変恵まれた環境、設備である。それらを有効に活用した生活科教育のあり方を探りたい。

② 校区の環境を生かして

本校は、姫路市の最北端（中心地から10Km）に位置し、山や田畑、川、社寺林、雑木林、河原などの自然環境に恵まれている。また、神社や寺院、商店や郵便局、公園や公民館などの公共施設と社会的な環境にも恵まれ、そこから多くのことを学ぶことができる。しかし、現実には学校も家庭もそれらの環境を十分に生かしてはいない。そこで、生活科の学習の場や素材としてそれらを見直し、活用を図っていききたい。

③ 人材の活用を図る

学校や地域の物的資源の活用だけでなく、人的素材の開発、活用も図りたい。公共機関で働く人、工場や商店の人、あるいは、家族や地域の古老などから話を聞いたり、働いておられる姿に触れることにより子ども達は多くのことを学ぶであろう。それらの人の専門的知識や技術、貴重な経験談は、子どものものの見方や考え方の変革、精神的な強さの育成に大きな役割を果たすものと思われる。そこで、できる限り学習の場や素材を児童の生活圏である家庭、校区、地域社会に求め、広げていきたい。その一例としてチューター制度が挙げられる。

④ 学習時間のモジュール化の可能性を探る

現行の学習指導要領では、1単位時間を45分としているが、児童の体験や具体的な活動を重視し、学習の場を地域社会に広げる生活科の教科としての性格上、45分という単位時間に制限された学習活動では十分な効果が期待できない。そこで、15分を1モジュールとし、週3時間を原則として授業を行うよう指導計画をたてることにしたい。勿論、1年間に1年=102時間、2年=105時間の枠は守る。

15分という時間を単位時間としたのは、下記の理由による。

- ・ 45分という学校全体の時間割にも支障をきたすことが少ない。
- ・ 指導計画に、15分が最も適しているように思われる。

15分、30分 = 学習計画をたてたり、観察や調査の記録、飼育や栽培の世話など

60分、75分、90分 = 学習の場や素材を校外に求めた場合（1年の「公園で遊ぶ」、2年「店ではたらく人たち」など）や、行事のような活動を行う場合（2年の「お祭りをしよう」など）

⑤ ティーム ティーチングを取り入れる

学習内容によりティーム ティーチングを行う。例えば、1年で「通学路の様子などについて調べ、安全な登下校ができるようにする」という内容では、

・ 白鳥台、毛野

・ グリーンハイツ、打越

・ 六角、刀出、栄立

のそれぞれの登下校グループに教師が1人ずつかわるといった学習集

団、学習空間の分担を行う。その他、学習効果を高めるため、授業の過程の分担を行ったり、個人差に応じた授業を行うため、授業のコースの分担を行うことにする。

⑥ その他、次のような内容についても研究を行いたい。

○ 教材開発

（例）学校や地域社会の物的素材、人的素材のリソース マップづくり

○ 評価の方法

○ 道徳・同和教育との関連

○ 3年以降の社会、理科への発展（系統、領域の二面から）

○ 中・高学年の特別活動との関連

○ 幼稚園教育との関連

○

1. 単元名 北公園で遊ぼう

2. 趣旨

- 子どもは、遊びを通して、身体的能力（敏捷性・平行感覚・持久力など）や知的能力（創造性・想像性・知的柔軟性など）が発達したり、情緒が豊かになったりする。また、集団遊びによって、協調性や思いやり、自己犠牲など、人間関係の持ちかたを学び、社会性も培われてくる。さらに、友達を重視することから、親から離れる時間が長くなったり、行動範囲が広がって、自立への基礎が養われる。このように、遊びは、教育的価値が高い。

本単元は、こうした遊びの良さを生かし、児童にとって最も身近な公共施設である公園を扱うことにより、次のようなねらいを達成しようとするものである。

- ・ 公園は、子どもたちにとって楽しい遊び場であるだけでなく、幼児やお年寄りなど、みんなのものであることに気付く。
- ・ 遊具だけでなく、いこいを目的とした施設や安全面を考慮した施設などが整えられていることがわかる。
- ・ 公園のきまりを守り、施設を大切に使う、楽しく遊ぶことができる。
- ・ 自然と触れ合う中で、探すおもしろさ、見つける喜び、つくる楽しさを味わう。

というようなことをねらいとしている。さらに、この単元を通して、あいさつや話し合いの大切さに気付く、自分にとって公園はどんなものであるのかを考えるようになるだろう。

そして、この単元は、2学期の「季節の変化と生活とのかかわり」や2年生の「乗り物や駅などの公共施設の利用のしかた」へとつながっていく。

- 本学級の児童は、幼稚園や保育所で集団生活を体験し、友達と仲良く遊んだり、協力して仕事ができるようになってきている。そして、学校探検をする中で、自分達の生活は、先生やいろいろな人々によって支えられている事がわかってきた。また、学校には、いろいろな施設が整えられていることに気付く、上手に使うことができるようになってきている。

このように、学校においては、施設の使い方や集団生活ができるようになってきた児童も、地域社会においては公共施設である公園の使い方や集団遊びができていないのが現状である。

本来、児童期の子どもは、友達とかかわりながら、けんかをしたり、仲間をつくったりし、特に上級生から、ルールづくり方、魚や虫のとり方、草花遊びなどを教えてもらったりするものである。また親から日常生活の基本的行動様式を学ぶものである。

しかし、本校では、昼やけいごとに行く児童が多く、同級生と遊ぶことはあっても、上級生と遊ぶことが少ない。また、核家族で共働きが多いためか、しつりの行き届いていない面も見受けられる。

このような環境下にある児童には、公園の使い方や、集団での遊び方を学ぶ機会は少ない。まして、公園はみんなのものであり、きまりを守って遊ばなければならないことに気付いたり、自分から自然に働きかけて遊ぶことはあまりない。

- そこで、子どもにとって最も自由で、楽しい活動である「遊び」を学習活動の中心に据え、また、学習の場（遊びの場）として公園を選び、楽しく学習をすすめていく中でねらいを達成していきたい。さらに、公園の行き帰りの道（約1km）でも、他単元の学習内容と関連づけて、安全な道端歩行や自然との触れ合い、身近な人々との接し方などの学習も行うことにする。

本単元では、1人ひとりにできる限り多くの活動や経験をさせることを重視し、それを通して活動上必要な知識や技能、心情を養いたい。そのため、公園を利用するときのきまりや、遊びのルール、遊びの方法、自然への触れ合い方などは、潜在的な知識や技能以上に多くを与えないようにする。

また、一連の学習過程の中に、話し合いや絵をかき活動を取り入れ、周囲とのかかわりで自己を見つめ直させながら学習を進めていくことにする。そして、遊びや生活に必要なきまりを守り、もっと良いきまりやルールを協力してつくろうとする態度を育てたい。

3. 目標

- ・ 公園はいろいろな遊具や施設が整えられ、多くの人々に利用されていることがわかるようにする。
- ・ 公園の遊具や施設を、みんなで正しく、大切に使うことができるようにする。
- ・ 身近な自然に触れることの楽しさを味わうことができるようにする。

(6) 単元一覧表 (第一学年)

月	単元名	時数	小単元名	月	単元名	時数	小単元名
4 ↓ 5	僕も私も蜂相っ子	18	・みんな友だち ・学校の行き帰り ・校庭に出よう ・学校めぐり ・学校案内図	10	北公園へ行こう	6	・北公園へ行こう
				10 ↓ 11	秋みつけた	13	・虫をさがそう ・葉っぱや木の実で遊ぼう ・お話をつくろう
4 ↓ 9	生命の不思議	17 ↓ 2 学期⑤	・ひとつぶの種から ・小さな生命	12	冬じたく	6	・冬じたく
				1	学校にもお正月	8	・お正月あそび ・たこたこ上げ
6	どろんこ遊びをしよう	3	・どろんこ遊びをしよう	2	真冬も大好き!	6	・真冬は不思議 ・寒さに負けずがんばろう!
7	夏がきた	3	・夏がきた	2 ↓ 3	大きくなった ぼく・わたし	10	・ぼく・わたしのこの一年 ・もうすぐ二年生
9 ↓ 10	わたしの家	12	・わたしの家族 ・家族の世話 ・わたしの手伝い				

(7) 四月からの研究経過

*具体的な実践記録は別紙プリントにて

実践

(第一学年)

北公園で遊ぼう
どろんこ遊びをしよう
私の家

(第二学年)

お店で働く人々
小川で遊ぼう
土や砂で遊ぼう

研究内容

第一学年年間指導計画、単元指導計画
幼稚園教育との関係
道徳教育との関係
評価、調査の方法 など

まだ、研究を進めている過程に過ぎず、課題にまで至っていない。

「一人一人の表現力をのばすための朗読指導のあり方」

岐阜県土岐市立泉西小学校 青木 節子

話す力、読む力、そして綴る力は、物事に対する認識の正しさと深さが基になっている。しかし、認識があってもうまく言い表す力かなければ、表現力は高まっていかない。よって、認識を深めることと表現力を高めることを同時に行なっていく事が必要となってくる。

特に、低学年においては、生活、学習のあらゆる面で、深め高めることが大事であるため、次のような面で、実践してみた。

1. 生き生きとした生活を表現する。(詩を綴る)
2. 言葉や文に即して読みとり、音声表現をする。(朗読)
3. ありのままに綴り、自分の内面を素直に表現する。(作文)

今回は、その朗読について、個人×グループとして深めてきた事を、まとめてみようと思う。

(1) 声をきちんと出すために ----- 群読への取り組み

群読というのは、字のように、群れになって朗読をすることであるが、私は、全員で、男女別で、グループで、というように多様な方法で取り組んでみた。特に、作品として扱ったのは、次のものである。

- | | |
|--------------------|-----------------|
| ・「五十音」 | ・「たいこ」 (谷川 俊太郎) |
| ・「てんやん会」 | ・「王さまでかけましよう」 |
| ・「きりなしうた」 (谷川 俊太郎) | (寺村 輝夫) |
| ・「おならのうた」 (") | |

やっていくうえで、次のような評価の態を作ってみた。(読みに対する願
い)

- 1学期の願い
- ・大きな声で
- ・声をそろえて

声をきちんと出すとハウニヒが ねらいであるニ
とかり、"どならないで、言葉をはっきりと読むこと
ができるようにとした。

二つ目は、全員で、グループで、声がそろうこと
である。自分だけ大きな声をださないで、読むこと
ができるようにとした。

- 2学期の願い
- ・はやくさつよ
さを工夫して

文を読解したり、どう読んだらいいのか、自分なりに
工夫する事を中心とした。ここでは、朗読ノート
作りの、ポイントとなる。

- 3学期の願い
- ・みんなと共に
気持ちをこめて

"はやくのグループは、こう朗読する"というグル
ープの願いをもち、群読する。

教師の評価

低学年にとって、その時の活動や事などは、とても大事なことで
ある。"うまい。○○グループ、声がそろっていたよ。"とか、"
声が大きかった。一番はっきりしてた。"など、即座に声をかける事
をしてきた。すると、子供たちは、"よし、今度は、私たちのグル
ープが、一番になるよ。"と、グループみんなの心がそろう。

② 読みを深めるために -----朗読ノート作り

登場人物の気持ちの分かる文を見つけ、それを どう表現するのかという
事を中心にして、朗読ノート作りを行なった。

子供たちの発案で、"朗読マーク"を作り、ノートに書き込んでいくことも

やっている。(ノート作りについては、これはどう方法がないため、いろいろやらせているところである。)

③ 表現するために

-----朗読会の取り組み

学期に一度ずつ、成果の発表ということで、朗読会を行なっている。文学作品が中心であり、その節度、朗読会の方法については、工夫してきた。例えば、「スイミー」という作品では、絵本づくりしながら読みを深めたり、「王様でかけましよう」という作品では、グループで紙しばいづくりをしたり、「ふきのとう」という作品では、表現の美しさから、暗誦させた。更に、一人一人、個人もちのカセットテープをつくり、朗読会ごと吹きこみ、後から自分で自分を評価することをさせてみた。自分を客観的にみるとどう面で、少しずつ成果も出てきている。又、家に持ち帰り、家族で聞くという事もあり、喜ぶ場面も所収になっている。(先生、おばあちゃんおね、こんなにも上手になっちゃって、泣いて喜んでくれたに。ほく、次も頑張るよ。)

-----「王様でかけましよう」の取り組みから-----

- (1) 6場面に分け、グループで、各々自分の場面を決める。
- (2) 朗読ノート作りをする。(文を見つける)
- (3) 紙しばい作りをする。(自分の場面ののみ)
- (4) 6場面は、グループの群読として取り組む。
- (5) 読みの工夫をする。(グループ練習の工夫)
- (6) 朗読会 (カセットテープ吹きこむ)

各グループに練習の仕方について、工夫させてみたところ、あるグループは、10分位はなれて読み合うことをはじめた。又、あるグル

ープは、読み終えたと、感想を言ったり、自分なり、こつ読みなどと話したり、子供同士の相互評価が見られるようになってきた。

群読については、グループの読みの願いに近いものがみられた。例えば、残念だという王様の気持ちを出そうよ。とか、つばめが、たまごをもってきてくれるのを楽しみにしている王様でしょうよ。など、表現する力はまだまだだが、それなりの願いがみられはじめたことは、嬉しいかぎりである。

評価の窓については、次のようにしている。

誰もが、分かって取り組める事。更に、励みになっていく事か大事だと考え、設定してみた。

評価の窓

- | | |
|---------------|-------|
| (1) 大きな声で | (5 級) |
| (2) ゆっくりと | (4 級) |
| (3) 点や丸に気をつけて | (3 級) |
| (4) まちがえないで | (2 級) |
| (5) 気持ちをこめて | (1 級) |
| (6) 暗誦する | (特級) |

朗読会については

- (1) テープに吹きこむ
- (2) 一人一人が、評価する。
左の6項目で、○△×で評価する。
- (3) 全員の中から、良かった子を一人選び、賞状を作りわたす。何が良かったのか、明確にし、工夫する。

今まで取り組んできて、今、もっと充実させたい面は、やはり朗読ノート作りである。どう読むのかというのを、一人一人の子の中に明確にしたいと、やはり深まっていかない。認識力があって、はじめて表現力も深まっていく。多様な面から、もっともっと、一人一人の感性を豊かにしなければと切実に思っている今日の境である。

分科会名 第1分科会

提案主題 作文指導とバス学習

愛知県海部郡蟹江町立蟹江小学校

高橋 央樹

研究内容

1. 作文トレーニングタイムについて

(1) ねらい

本校は、昭和54年度以来9年間継続して作文指導に取り組んでおり、今年度は「小さな試み」を合言葉として作文指導を行っている。作文指導の中心となっているのは、「作文トレーニングタイム」であり、児童の書く時間の確保と教師による指導を目的として設定されている。この「作文トレーニングタイム」によって各学年に応じた継続的な指導が展開されている。

(2) 方法

ア. 時間帯

作文トレーニングタイムは、集会活動がある月曜日と木曜日を除いて毎朝8時30分から8時55分までの25分間に設定されている。児童は、この時間になると自ら進んで文章を書き出すようになっている。

イ. 指導

(ア) 時間

土曜日の作文トレーニングタイムを記述指導・研究授業に当て、内容の深化や敷衍・整理に生かしている。25分間と言う限られた時間の中でより効果的な指導を行うため、後に述べる6×6×6法などを用いて指導にあたっている。

(イ) 指導方法

指導の形態は、個々の児童に対する個別指導・一斉指導・小集団利用(バス)を中心としており 全体-小集団-各自 を効果的に組み合わせ密度の濃い指導を行うようになっている。

(ウ) 指導計画

学年	6		5		4		3		2		1		特全
	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	
指導計画	自由作文(本の文を参考)												
指導計画	自由作文(本の文を参考)												

○年間指導計画

各学年ごとに作文トレーニング用の独自のカリキュラムを設定している。

○6年一学期の指導計画

7	6	5	4	3	2	1
活字と紙本	書き直し	メモ・しおり りの整理	（実地見聞） 取材記録で調べた ことがあったこと、知りた かったことを実際に 確かめる。	取材記録で調べた ことがあったこと、知りた かったことを実際に 確かめる。	取材記録で調べた ことがあったこと、知りた かったことを実際に 確かめる。	取材記録で調べた ことがあったこと、知りた かったことを実際に 確かめる。
活字と紙本 する。	活字と紙本 する。	活字と紙本 する。	活字と紙本 する。	活字と紙本 する。	活字と紙本 する。	活字と紙本 する。

- 一、本年度のテーマ・文種
創作的な各校の紀行文
- 二、指導形態とわらう
生徒のかたが、担任あふれる紀行文をいろいろな文種・文体で書く。
- 三、主な授業形態
個人・小集団・全体
- 四、指導の流れ

修学旅行
（京都・奈良）

100枚
紀行文

昭和三十三年九月

作文指導部 計自 編 著（前 半）

十八 年

2. 作文指導とバス学習

作文トレーニングタイムは、僅か25分である。このきわめて短い時間に効果的な作文指導を展開している。バス学習（蟹江小では小集団学習と呼んでいる。）がその有力な方法になっているので紹介したい。

- 作文指導の取材・構想、記述、批評・鑑賞などを総括して実施したい。
- 短時間で効果を上げたい。
- 人間関係を高めながら効果を上げ、クラスの雰囲気をよくしたい。
- 経験の深浅に関係無く、どんな先生にでも容易に出来るようにしたい。

こんな願いから開発された作文指導法であり、工夫され、実践されてきたのである。

(1) 授業法

「6・6・6」法

バス学習の「6・6」法は、6人の小グループで、6分間話し合うという意味であるが、この作文指導法では、6はすべて主な時間配分のことである。

- 情報収集 6分 （小集団利用）
- 記述 6分
- 発表批評 6分 （小集団利用）

※ 残りの7分を課題の提示やまとめあるいは上記のどこかに加算して授業構成を考える。

(2) 情報収集(6分)と小集団

ブレインストーミングの方法による。思い付くままに何でも発表させるのであるが、次の点に留意している。

ア. 内容に関するもののほか、表現方法に関するものも発表させる。
板書に際しては、内容に関するものは単語や語句で表現し、表現方法に関するものは文で表現する。

イ. 小集団の利用について

- いきなり話し合いに入らないで、・個人で考えてから ・対話をしてから 試みている。集団の成長も大切だが、個の充実も肝要であるため、まず個に用意をさせるのである。
- 話し合いの時間は、規定の時間が経過したら、途中でも延長しないで打ち切ることが望ましい。小集団で話し合うのは、もともと1グループに万全を求めるのではなく、いくつかのグループによってより多くの情報を集めたり、より確かに確認したりするのである。
- 発表を板書する場合は、前述の通りキーワードで試みる。

ウ. 発表と批評(6分)と小集団

記述した作文を発表し、教師が批評したり、子ども相互が話し合ったりする。

- 話し合ってから発表する場合…………… 誤評等の修正が必要である。
- 批評後の話し合いの場合…………… 各自の批評を理解し、確認する。

3. 作文指導の指導例

(1) 授業案 ・ 板書記録

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
時間	10分									
内容	導入	発表								
板書										

作文指導の指導例

① 発表の順序

② 発表の形式

③ 発表の時間

④ 発表の場所

⑤ 発表の相手

⑥ 発表の目的

⑦ 発表の準備

⑧ 発表の振り返り

作トレ授業案 (発表・板書記録) 活用資料

4月15日(月) 6年 国語 指導者

1. 作文の発表

2. 発表の順序

3. 発表の形式

4. 発表の時間

5. 発表の場所

6. 発表の相手

7. 発表の目的

8. 発表の準備

9. 発表の振り返り

・平清盛 ・政治 ・戦さ
 ・白拍子 ・刀自 ・佛御前
 ・見捨てられる ・念佛三昧
 ・闇の中の暮らし ・月の光
 ・カエデの森 ・春夏秋冬
 ・四季の美しさ ・吉野窓
 ・嵯峨野の風物
 ・祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり……
 ・萌えいずるも 枯るるも同じ野辺の草
 いずれか秋に あはではつべき

(2) 指導途中の児童の文

△ブレインストーミング▽
「ぎおんしようじやのかねのこえ、しようむじょうのひびきあり、しやらそうじゆの花の色、じようしやひつすいのことわりを表す。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとき、たけきものもついにほろびぬ、ひとえに風の前はほろびぬ、ひとえに平家物語の有名な言葉がうかんできます。」
「祇園しようじやの鐘のしよ行無常のひびきありしやらそうじゆの花の色、じよう者必ずのことわりを表す。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとき、たけきものもついにほろびぬ、ひとえに平家物語の有名な言葉を思い出しながら祇王寺の竹やぶの中を歩いてみると、何かがある。そこにはあまさんが三人、なみだですみぞめのそでをぬらしていたのです。」
「わたしは祇王という白拍子でした。平清盛さまのちよう愛をうけ、のんびりくらしておりました。」
(後略)

(3) 児童の完成文例

祇園精舎の鐘が開こえて――
「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきあり。しやらそうじゆの花の色、じよう者必ずのことわりをあらわす。おごれる者も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。」
平家物語の有名な詩を思い出しながら祇王寺の竹やぶの中を歩いてみると、急にもやがかり、空気は冷え、まぼろしの世界に踏み込んだようでした。
と、びっくりするではありませんか。しっとりぬれたじゆうたんのような苔の上には、尼さんが三人、すみぞめのそでを涙でぬらしているではありませんか。
：私は祇王と言う白拍子でした。平清盛様のちようあいをうけ何不自由のない生活を送っておりました。けれども、この幸せも長くは続きませんでした。
(中略)
「白滝さん、どうしたの――。」という声がありました。あら、わたしはどうしたのかしら。夢からさめた心地です。
あわてて庭から祇王寺の中にはいりましと。光の差し込み具合によって七色に変わると言う吉野窓からほんの少し、光が差し込んでいた。祇王たちの像の玉眼が、弱々しく光ってました。
(後略)

ま と め

今まで述べてきたことは、長年の作文指導と一学期の試行錯誤の実践の結果から産み出されてきた。しかしながら、また研究途中であり、今後より充実した作文指導における小集団利用を目指してさらに努力を重ねていきたい。

また、本校の6年生は、二学期は6年間の作文指導の集大成として、随筆・小説・物語に挑戦しているが、その中でも同じテーマを持つ児童による小集団指導を行っていきたく考えている。

1. はじめに - 「バズ学習」の効果上げる要件とは-

学級という大きな集団での一斉学習では、一人ひとりの子供を生かしきれずに、集団の中に個を埋没させてしまうおそれがある。これに対して、小集団による相互学習（バズ学習）は、構成員が互いに学び合うことによって、一人ひとりの学習が成立していくものであり、“個を生かす”学習形態といえよう。ここでは、言うまでもなく話し合いが命である。そして、その話し合いを活性化させるためには、少なくとも一人ひとりの子どもに、課題に対して強い問題意識と追究意欲を持たせることが肝要であり、それには、やはり子どもの興味や関心を引き起こすための豊かな場面設定や教材の工夫が大切になってくる。これらのことは、バズ学習導入のいわば大前提というべきであろう。しかし、日常ではともすると、「少しだけ気味な授業になってきたので小集団での活動を」といった程度の思いつきの授業に陥りやすいというのも現実である。そこで、本実践では、子どもが主体的に取り組む社会科学習を目指し、話し合いの活性化を促す具体的な手立て、言い換えればバズ学習の効果上げる要件を模索しながら授業を進めた。

2. 研究の内容

(1) 単元のねらいと指導計画

バズ学習を効果的にする第一の要件は、これから実施する授業について単元のねらいや、ねらいを達成するための教材、学習の流れを明確にした指導計画をじっくり吟味することである。

ア) 単元のねらい～今なぜ「伝統工業学習」か～

労働認識に関する子どもの実態

「働く＝金儲け」と簡単に決めつける子どもが多く、収入や仕事の華やかさだけにとらわれる傾向が強い。言い換えれば、労働を表面的にしかとらえることができず、多面的に追究しようとする姿勢も弱い。また、自ら社会の一員であるという認識が稀薄であり、労働に対する見方も第三者的である。

教師の願い

この実態から、私は、大企業優先・利潤第一の社会的風潮の中で今なお古くからの技術を生かして黙々と生産に携わっている人々、すなわち伝統的な工業に携わっている人々の仕事ぶりに触れさせる機会を、子ども達に是非与えてあげたいと思った。それは、伝統的工芸品をつくる人々が、「やりがい」や「誇り」を持って仕事に打ち込んでいるからである。また、長い年月と絶ゆまぬ修練によって培った手作りの技術は、誰もまねることのできないものである。すなわち伝統工業学習は、「人間理解の学習」であり、収入や外見だけにとらわれがちな子ども達に働くことの意義を再確認させる場を提供してくれると考えた。また、伝統的な工業に内在する「使い手の願い」と「作り手の喜び」との関係、すなわち生産と消費の根本的な在り方を学習させることにより、「使い捨ての時代」という言葉に代表される大量生産・大量消費の近代工業のシステムに鋭く迫る目を育てることができるとは思えないかと考えた。つまり、伝統の良さ・美しさを知らせることだけを目的とするのではなく、伝統工業の学習を通して、社会を見る目を育てるのである。

イ) 素材の発掘と教材化 ～美濃和紙を選択した理由～

実は、教科書にも伝統工業学習の教材はある。言わずと知れた”瀬戸焼”である。しかし、教科書では、主として機械化・分業化のすすんだ生産形態に力点を置いており、機械慣れした子ども達が興味や関心を抱くほどの魅力を感じさせるものは、残念ながら見受けられない。そこで、次の4つの理由から美濃和紙を教材化することにした。

- 和紙は、子ども達にとって比較的身近な伝統工芸品であり、子ども自身が、手にとって製品の良さを感じることができる。また、製品の工程も理解しやすい。
- 国から「伝統工芸品」の指定を受けている美濃和紙は、品質が良く、その製品は、子ども達に驚きと感動を与え、伝統的技術への興味・関心を引き起こしやすい。
- 美濃和紙職人・古田行三氏の仕事を追究させることにより、後継者の不足・材料の入手難・収入の問題など、伝統工業全体が抱えている問題をとらえさせることができる。
- 美濃和紙職人・古田行三氏の仕事に対する考え方・生き方を学ぶことにより、労働に対する子どもの認識に広がりをもたせることができる。

ウ) 授業計画

		授 業 の 流 れ	資 料 e t c .
課題把握	1	和紙と洋紙を、様々な角度から比較実験させ、それぞれの特徴を班ごとにまとめさせる。(発表) 和紙の長所について話し合い、この単元で学習する課題をつくる。	和紙・洋紙の実物 (班に1枚ずつ)
	2		
課題	3	王子製紙春日井工場について調べさせ、洋紙が機械によって大量生産されていることに気づかせる。 ビデオの視聴により、和紙が手づくりで生産されていることを理解させる。生産工程をまとめさせる。	パンフレット(2種) VTR「紙開発最前線」 自作ビデオ プリント・スライド
	4		
追	5	古田さんの工夫を調べさせる。 紙すきが大変高度な技術であることに気づかせるとともに、その技術の習得には、長く苦しい修業が必要とされることを理解させる。	自作ビデオ テープ「和紙づくりで 何が一番難しいか」
	6		
究	7	紙すきを模擬体験させ、古田さんの仕事のすばらしさを五感でつかませる。 古田さんの生きがいや、仕事に対する誇りについて考えさせる。 これからの和紙づくりはどうあるべきかを、伝統工業全体の問題として考えさせる。	紙すきの道具 テープ「仕事に対する 古田さんの考え」 テープ「後継者の問題 について」
	8		
概念	9	これまでの学習をもとに、和紙に対する自分の考えをもちこんだパンフレット「美濃和紙」をつくらせ、班ごとで読み合わせをさせる。	
	10		
化	11	伝統工芸カルタ大会	伝統工芸カルタ
	12		
	13	作文「古田さんの仕事を学んで」	

(2) 具体的指導の手だてと実践の経過

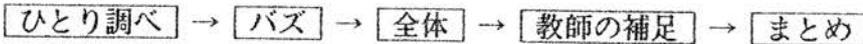
子どもが意欲をもって主体的に取り組む学習は、社会科では、地域学習に委ねられる場合が多い。それは、子どもにとって身近である素材を教材化するため、子どもが自らの目や足で調べたり考えたりすることができるからである。では、今回のように春日井市にない素材を教材化する時、一体どのようにして、地域の現場学習ができないというハンディーを乗り越え、子どもが主体的に活動する授業を創造するか。そして、話し合いを活性化させるためにはどんな手立てが必要か。この課題を克服するため、三本の柱を打ち立てて実践した。

視聴覚的資料の充実
視聴覚的資料を充実させこれを有効に使えば、地域の現場学習に肉迫する効果が得られるのではないかと考え、ビデオ（自作）「伝統工芸本美濃紙～古田行三さんを訪ねて～」・スライド（自作）カセットテープ（古田さんの生の声）などの整備に努めた。

体験学習の導入
「紙をすく」という模擬体験を、課題追究の段階に導入すれば、子どもは五感を働かせて、広い見地から問題を追究していくようになるのではないかと考え、材料と用具を揃えて、紙すきをひとり1回ずつ体験させ、自分達の和紙を作らせた。

構成活動の重視
学習してきた事柄を、子ども一人ひとりに、消化された自らの言葉でまとめさせることは、子どもの思考力を伸ばし、調べる力を養い、さらに学習の充実感をもたらすのではないかと考え、まとめの段階に「パンフレット作り」という構成活動を取り入れた。

1時間の授業の基本的な流れは次の通りである。

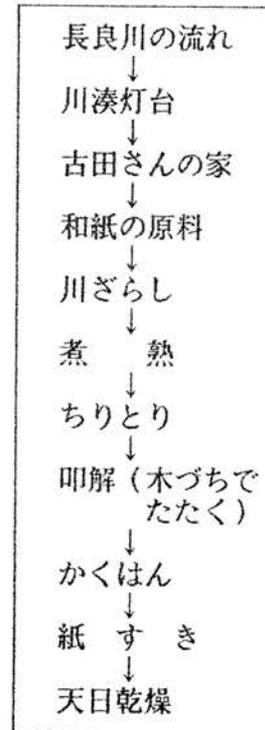


ア) 視聴覚的資料の活用について

ビデオ「伝統工芸本美濃紙～古田行三さんを訪ねて～」は、3回にわたって美濃市に足を運び、長良川上流の様子、和紙の材料、製造工程などを15分にまとめて収録した。まず第4時では、和紙づくりについて子ども達が調べてきたことを有機的に結び付けて板書した後、自作プリントで補足説明を行った。そして、ここまでの段階で疑問点をノートに書きあげさせた。ビデオの視聴を目的をもってさせるためである。ビデオを視聴させた後、どの疑問点が解決されたかチェックさせ、班のなかで「何がわかったか、まだイメージ化できない事柄は何か」を意見交換させた。

第5時では、古田さんの工夫努力について考えさせるため、前時で見せた自作ビデオをもう一度視聴させた。「工夫」をチェックさせるためである。これによって、子ども達を同じ土俵の上に立たせることができ、それに続くバズの話し合いや全体討議は非常に活発なものとなった。第6時で用いた「和紙づくりで一番難しいことは何か」という古田さんの生の声を録音したテープもまた子どもの追究力を高め、伝統の重みを知らせるのに有効であった。

VTRの流れ



イ) 体験活動の導入について

本単元では、まず単元の導入に操作活動を取り入れた。各班に和紙と洋紙をそれぞれ一枚ずつ配りその違いを、「どんな方法でもいいから調べてごらん。」と指示を与えて比較実験させた。子ども達は、ちぎったり引っぱったり様々な角度から実験を行った。次に、長所・短所を表にまとめて発表させた後、「どちらが生活に役立つか。」という発問でバズをかけた。



第7・8時の体験学習は、実際に紙をすくという体験をさせることにより、いかに古田さんの技術が素晴らしいものであるかを体で感じ取らせようとするものである。子ども達は、班ごとで積極果敢に古田さんの技にチャレンジしたが、できた紙はみな粗末なものばかりであった。この活動によって、次時の「古田さんの生きがいや仕事に対する誇りについて考えよう。」という話し合いの内容が深まったと思う。

ウ) 構成活動について

グループで協力して絵地図や新聞を作らせるといった実践をよく見かけるが、高学年の社会科では、まとめの活動は、必ず個にかえしてさせるべきであると思う。



第11・12時では、美濃和紙を宣伝するパンフレット作りを一人ひとりにさせた。これは、ただ知識の定着化を促すだけでなく、独自の発想と創意工夫をこらせて取り組ませることにより、「自分で作るんだ。」というクリエイティブな姿勢を育成するのに有効であった。また、できた作品を班で読み合わせ、子ども達に相互評価をさせた。多くの子どもが、班内の友達の考え方やまとめ方に刺激を受けていたようである。

3. 研究の成果と今後の課題

美濃和紙職人・古田行三氏の生きかたにスポットをあてた本教材は、子どもの心をゆさぶり、学習意欲を高めた。重要無形文化財に指定されながらも、おごることなくひたすら「使ってくれる人が喜んでくれる紙」をつくり続ける古田氏の姿勢、1300年の歴史の重みを肩に背負いながら、美濃和紙の伝統を守り続ける古田氏の心意気に触れ、子ども達は、「働く」ということの意味をこれまでとは違った側面から考えるようになったのではないかと思う。また、本研究によって、視聴覚的資料の有効な活用・体験学習・構成活動を有機的に結合させれば、たとえ地域の現場学習が不可能であっても、子どもが主体的に取り組む授業が創造できるということはある程度実証することができたのではないかと思う。

しかし、視聴覚的資料の視聴や体験学習・構成活動をどのような場面でどのように導入するかという点については、バズ学習の活性化とからめて、まだまだ再考の余地がある。子どもの実態に基づいた効果的な導入方法の検討が今後の課題であると言える。

第一分科会 教科指導

主題 「主体的に学習する子を育てる」

～バズ・単元見直し学習を通して～

愛知県春日井市算数サークル研究推進委員会

藤山台東小学校 梶田哲也 13名

1. はじめに

算数は、1時間ごとの指導内容が分かりやすいためか、教師主導型の授業になりやすいという側面を持っている。しかしながら、学習は本来受身ではなく能動的、主体的であるべきもので、「主体的に学習できる子、自己学習のできる子」の育成を算数科においても目指さなければならない。

そのためには、①学習開始時点で、児童自身が学習事項を明確に把握すること、②児童の相互活動を活用すること、③授業の展開を児童の主体的学習を保証する流れにすること、④児童が学習を自己評価することの4点が重要であると考えられる。

この4点を備えた学習指導理論に「バズ・単元見直し学習」理論（資料参照）がある。これを理論原理として主体的に学習する子の育成を目指したい。

2. 研究の仮説

以下の4点を指導すれば、主体的に学習する子が育つ。

① 児童に学習事項を把握させ、学習の見直しを持たせる《単元の見直し》

単元の初めに、学習事項（課題）の系列と相互関連性を知らせ学習事項を明確にすることによって児童に単元における学習内容と、学習の道筋を習得させる。これにより、児童一人一人が学習の具体的な見直しを持ち、1時間単位ではなく、1単元単位での主体的学習が可能となる。

② 相互活動を活用し、児童の思考・活動時間を多くする。

個人思考の後に、すぐに学級全体の発表・討議に移るのではなく、小集団による話し合い・教え合い等の活動（バズ）を入れる。これは教師対児童という授業ではなく、児童の相互影響力・相互教育力を活用した授業を目指したものである。

③ 主体的学習を保証する授業の流れにする。

単元見直しによって学習事項を把握させ相互活動によって児童の思考・活動時間を多くしただけでは、まだ主体的学習を十分保証したとは言いきれない。なぜならば1時間1時間の授業を主体的学習にふさわしい流れとなるように工夫することなくしては主体的に学習できる子・自己学習のできる子を育成できるとはいえないからである。

④ 自己評価によって、自分の学習を見つめさせる。

自ら学習できる子とは、自分で自分の学習を振り返って評価できる子であると言ひ換えることができる。つまり自己評価ができる子を育ててはじめて主体的学習のできる子・自己学習のできる子を育てたと言えよう。

③ 研究の方法

下記の内容を次のように実践する。

- ① 3年, 5年, 6年など複数の学年で行う。
- ② 数と計算, 数量関係など複数の領域で行う。
- ③ 研究の検証は、事前・事後テスト, 児童の自己評価等で行う。

(1) 単元見通し (学習の見通し)

- ・ 単元見通しの方法を何通りも考え、どの方法がどの領域・単元に有効か追究する。
- ・ 毎時間の授業に生きる単元の見通しのもたせ方を追究する。
- ・ 単元・領域によって見通しを持たせる時間はいつが適切かを追究する。

(2) 相互活動の活用

- ・ どのような相互活動を何年生から指導して言ったらよいかを追求する。
- ・ 相互活動のねらいに応じた話し合いの仕方にはどのようなものがあるかを追究する。
- ・ 1時間単位ではなく、1単元単位で、どこでどのような相互活動をさせたらよいかを追究する。

(3) 主体的学習を保証する授業の流れ

- ・ 課題提示から教師のまとめまでの授業の流れの基本パターンにはどのようなものがあるかを追究する。
- ・ 主体的学習を保証する授業展開の工夫にはどのようなものがあるかを追究する。

(4) 自己評価

- ・ 何について、いつ、どのような表現で自己評価させるとよいか追究する。
- ・ 自己評価をどう生かして指導するとよいかを追究する。
- ・ 的確に自己評価する能力をつける方法を追究する。

(5) 事前テスト (実態把握)

- ・ 単元・領域によってどのような形式がよいか追究する。
- ・ 事前テストの結果の授業計画や指導への生かし方を追究する。

4. 実践例

a. 対象学年 3年生30人

b. クラスの実態。

本校では、「参加度を高める指導法の工夫」という面から、バズ学習に取り組んで来ており、児童は班で話し合うことについて好感を持っている。昨年度のアンケートの結果では、学年のほぼ65%がバズの話合いを取り入れた学習を続けたいと答え、やめたいという児童は10%であった。また、4月ではクラスの60% (18人) が続けたい、6% (2人) が続けたくないという結果をえた。

そこで4月当初に「一人一人が積極的に学習に参加できるようになってほしい。仲良く力を合わせて学習できるようになってほしい」と言う教師の意図することを、児童に説明して取り組んで来た。またそのために児童との話し合いにより「友だちが、ずれたことを言っても笑わない」「勇気を持って話してみよう」「自分の言葉で最後まで言おう」の3つの約束を決めている。

c. 実践単元 3年「かけ算2」

(1) 目標 2, 3位数に1位数をかける計算を筆算でできるようにする。

(2) 児童の学習状況

かけ算について児童は2年生で九九を、3年生の1学期で九九の表、0, 10, 100をかける計算、2位数かける1位数の計算について学習している。しかしそれらは暗算のみでかけ算の筆算は本単元で初めて学習する。また加減の筆算は5桁まで学習している。

(3) 指導計画 (7時間完了)

第1時 単元の見通しを持たせる

(2位数) × (1位数) の筆算の仕方を理解させる。

第2時 (2位数) × (1位数) の筆算になれる。

第3時 (3位数) × (1位数) の筆算の仕方を理解させる。

第4時 (3位数) × (1位数) で部分積が繰り上がる場合の筆算ができるようにする。

第5時 (3位数) × (1位数) で0のかけ算を含む場合の筆算ができるようにする。

第6, 7時 習熟問題

(4) 単元の見通し

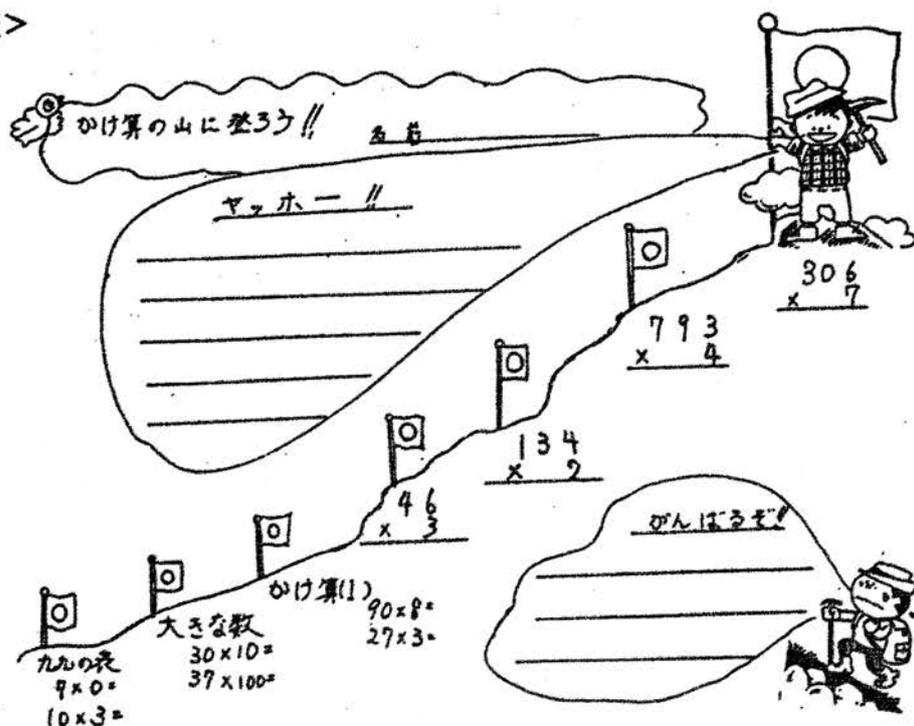
本単元は、かけ算の領域の1部分であり系統性が強い。既習事項に、1つ難しい要素を加えて学習する単元である。そのため児童は課題を見ることで学習イメージを持つことができる。児童に単元の見通しを持たせるには、一単元分の中心課題に取り組ませた後教師が、説明する方法が有効だと考えた。

そこで次のような方法とった。これから学習する内容についての事前テストを実施し学習状況の把握をすると共に、学習の到達状況が分かるような課題図を作成した。第1時の最初に事前テストを返却し、課題図・事前テストを使い、学習計画・課題の相互関連について説明した。

課題図を単元終了まで掲示し毎時間の初めに学習の位置を確かめるようにした。

また途中でつまづいている児童に対し「課題図の○○○へもどって考えると良い」等の助言に利用した。

<課題図・進度表>



(5)自己評価

課題図と同じものを進度カードとして与え、できるようになったところまで色をぬらせ、自分の学習の進み具合が分かるようにさせた。

また、毎時間自分の理解度、学習態度について次のような項目を与え自己評価させた。

- ・ (□×△) の筆算の仕方が分かりましたか。
- ・ (□×△) の筆算の仕方を友だちに説明できるようになりましたか。
- ・ 友だちの説明をしっかりと聞くことができましたか。
- ・ 自分から進んで話し合いに参加できましたか。

自己評価の結果は、次時の学習計画を組むうえの参考資料とすると共に、個別指導に活用した。

5. これからの研究の方向

バズ・単元見通し学習の理論を元に、領域によって指導法をどのようにすべきかを検討しながら実践を繰り返している。主体的学習を保証するために4つの視点を設け、3, 5, 6年生及び中学校で実践し一応の成果を得ている。(資料参照)

今後も以下の点に留意して

- ・ 単元の見通しを第2時以降の学習にどう生かすか。
- ・ 毎時間の自分の学習の位置づけをはっきりつかませる方法。
- ・ 教え合い・話し合いをよりいっそう効果的にする工夫。
- ・ 効果的な自己評価のあり方。
- ・ 児童の変容を的確につかむ工夫。

研究を続けて行きたい。

第2分科会

教科指導（中学校）

司 会 者	井村 義雄（春日井市立藤山台中学校教頭） 神戸 行弘（春日井市立南城中学校教頭）
助 言 者	梶田 正巳（名古屋大学教授） 小石 寛文（神戸大学助教授） 牛尾 照夫（前姫路市立高丘中学校長） 望月和三郎（前清瀬市立清瀬第五中学校長） 今尾 啓一（春日井市立西部中学校長） 桜井 芳昭（愛知県教育委員会指導主事）
提 案 者	平位 隆昭（姫路市立高丘中学校教諭） 佐々木 寿（青森市立横内中学校教諭） 坂本 守生（青森市立横内中学校教諭） 水谷 年孝（春日井市立高森台中学校教諭） 林 薫（春日井市立中部中学校教諭） 毛利 公（春日井市立中部中学校教諭）
記 録 者	田中 智也（姫路市立高丘中学校教諭） 渡辺 浩（春日井市立南城中学校教諭）

第2分科会 教科指導
提案主題 これからの数学科の授業のあり方を探る

兵庫県 姫路市立高丘中学校 平位隆昭

研究内容

1 数学教育の方向

(1) 教育課程審議会の答申

今回の審議会の答申のなかで教育課程の基準の改善のねらいとしてあげられている内容では、特に第1章1節の2項 自学の意欲・社会の変化の対応が数学教育に関係があると考えられる。

それは、1980年に出されたNCTMのAN AGENDA FOR ACTIONにも符合して問題解決能力の向上を意図するものである。

臨教審の答申にもあるように、現在及びこれからの情報化社会において、いろいろなメディアが多様化するおり、自己教育力(self-educability)の育成がメインテーマとして要求され、数学教育に於ても発展性があり応用力のある転移度の高い能力の養成をめざしていると考えられる。また3項の基礎基本と個性も、従来の計算知識の詰め込みでなく基礎的・基本的事項を踏まえて、それを問題解決に役立てよう意欲及び執着心を培うねらいがあると捉えられる。

このような数学教育の方向に即して指導方法、指導内容の改善を試みているが、ここではその実践の一端を紹介する。

(2) 問題解決能力について

先に述べた問題解決に必要な基礎基本に加えて、問題解決に必要な考え方が問題解決能力としてあげられる。その考え方の基盤として、数学的な考え方を育てることは、昭和33年以来学習指導要領の数学科の目標として掲げられてきている。

数学的な考え方は、数学をつくる過程に於て生まれるものであるが、いろいろな立場とか観点があって内容を外延的に、しかも構造的に捉えることは困難である。しかし、教科書に出てくる考え方については、具体例をもとに類別し指導の根幹としてきた。

問題解決能力は、問題解決に必要なストラテジーと数学的な考え方が身について、それを統合して生かすことのできる能力であると考えられる。

2 問題解決能力の育成をめざすには

(1) 問題設定

身近な問題を例に、問題を見つけ意欲的に解決したいという欲求が出てくるような問題を、生徒自身が設定する方向で指導したい。

しかし、実際的には教科書の内容に基づき指導することから、教師の援助が多くなることは否めない。

学習活動が喚起され、個々にわかる喜びの起こる「よい課題」を与える工夫が必要となる。

(2) 問題解決の学習過程の定着

G、ポリアは、40年も前に「いかにして問題をとくか」(HOW TO SOLVE IT)のなかで、第1に問題を理解すること、第2に計画を立てること、第3に計画を実行すること、第4に振り返ってみることの4つの過程を考えおのおのの段階で着眼点や方策を示している。以後、いろいろな人によって提案されたり改善されたりしてきているが、バズ学習を進める上で、このストラテジーを参考にしている。

(3) ストラテジーの指導

ストラテジーといっても多様な考え方があるが、ポリアの4段階等も一つのストラテジーであるし、帰納、類比、特殊化等、或いは、数量化、集合等の数学的な考え方、及び表、グラフ、図などの考え方を補助するもの等、をいかにうまく駆使するかというストラテジーもある。これらは中学生向けに指導内容を修正、考慮しなければならない。

このようなストラテジーは、問題を解かせて、その結果から解決の過程を振り返らせるときに、つくり出させるのが良い。

(4) 個人差に応じる指導

個々の能力に応じ、問題を解決する喜びを与えたい。既習事項の段階、現在学習している内容で、また補充深化の内容について、個別に1時間の授業で対応できるよう配慮をするための教材研究を行い、個々に自力解決できる「わかる喜び」のある授業を目指している。

(指導案参照)

(5) バズ学習の効果

個人差を考え個々に時間を充分とることは、理想ではあるが現実的ではない。また多様な考えを個々に問題解決に結び付けるには、かなりの時間を必要とする。そうした考え方を点検させ問題解決のストラテジーを身につけさせるためには、バズ学習が必要で、お互いの力によってよりよい解法をつくり上げさせ、そうした喜びをもたせることが可能となる。特に、生徒たちが集団で考える自学自習のしかたの育成が重要である。

(1) 連立方程式の導入

課題 鶴と亀は、あわせて12匹います。鶴と亀の足の合計は40本です。鶴と亀は、それぞれ何匹いますか。

〈問題を理解する〉

(班での話し合い)

※分かっていることは何ですか、尋ねてあることは何ですか。

例 (分かっていることは○○○○○○○○○○です。)

(尋ねてあることは ○○○○○○○○○です。)

※どうすればわかりやすくまとめられますか、まとめて下さい。

例 (つる+かめ=12)

(つるの足+かめの足=40)

〈計画を立てる 「よい考えを探す」〉

(個人思考)

※今までに習った解き方で、どのような方法がありますか。

どの方法がよいか考え、よりよい方法で解いて下さい。

〈計画を実行する〉

(個人思考)

例 A-全部が亀だとしたら

$$4 \times 12 = 48$$

つるが1匹増えて足が2本減るから

8本減らすには4匹がつる。

B-表を作ってみる

つる	かめ	足のかず
1	11	46
2	10	44
3	9	42
4	8	40

C—一次方程式を使って
 つるを x 匹とすると
 $2x + 4(12 - x) = 40$
 $-2x = -8$
 $x = 4$

D—つるが x 匹, かめが y 匹いるとすると
 $x + y = 12$
 $2x + 4y = 40$

〈あとを振りかえる〉

※どの解き方がよいか, それぞれの解き方の長所と短所を考え話し合ってください。

(班での話し合い)

- 例 Aの考えは, 特別な場合から考えるから難しいです。
 Bの考えは, 作業がたいへんです。
 Cの考えは, かめのかず x を求め, それからつるをもとめます。
 Dの考えは, はじめてです。

(2) 連立方程式の解き方

※では, Dの連立方程式の解き方を考えて下さい。

(個人思考)

- 例 E—表を使う F—代入法 G—加減法 H—等置法
 ※まず表を使って解く方法を考えましょう。

(班での話し合い)から一斉授業

(3) 連立方程式の利用

〈ストラテジーの指導, あとを振りかえる〉

※応用問題を解く順序を考えましょう。

(班での話し合い)

- 例 ① 図とか絵, 表などで問題をわかりやすくする。
 ② 等しい数量の関係に目をつけ, 何を x , y とするか考える。
 ③ 等しい数量の関係を見つけ2つの式で表す。
 ④ 以下略

(4) どのような数学的な考え方が使われたか。

〈あとを振りかえる〉

(班での話し合い)

- 例 一元一次方程式にすれば解ける ----- 基本への帰着
 加減法でそれぞれの式に何倍かできる --- 根拠を明らかにする
 2つの式が必要になる ----- 条件を分離する

提案主題 「本校における学校課題解決のための方策について」

～KJ法・小集団学習の活用を通して～

青森県 青森市立横内中学校 佐々木 亮

<はじめに>

学校課題解決への方策については、それぞれの学校の実態に依り創意、工夫されているが、ここでは、本校の学校課題へのアプローチについてKJ法（発想法）の活用を主にした教育課程編成に係わる内容と小集団学習への取り組みに係わる内容とに大別し、提案したい。

1. KJ法（発想法）を活用した学校課題のほりおこし。

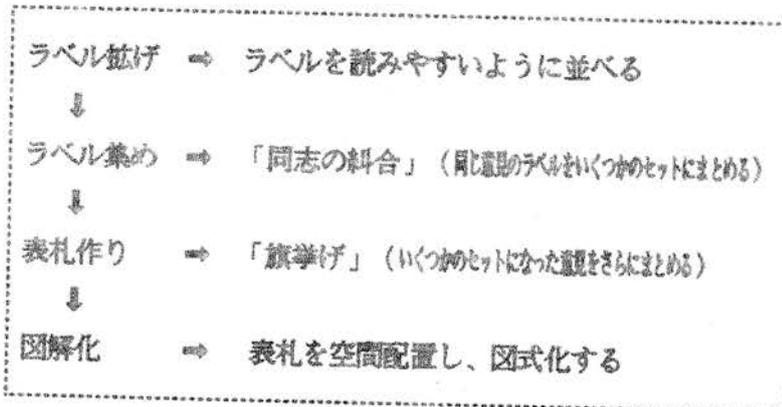
(1). 生徒・地域の実態把握とKJ法。

全職員が学校経営に参加するという立場から、全体の意見を集約する手だてとしてのKJ法。

ア. 生徒・地域の実態についての学年ごとのラベル作り（4年6組）。

標準学力検査、知能検査、校内テスト、研究授業、PST検査、日常の学習・生活行動などの観察等をもとに。

イ. 学年ごとのラベルのまとめ。（冊1）



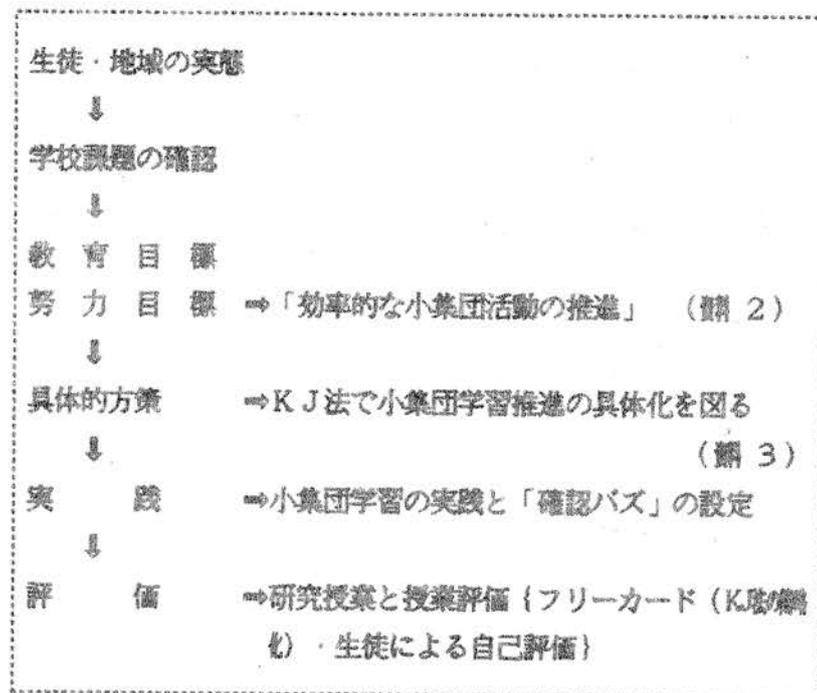
②. K J法で得られた生徒・地域の実態の要約。

- ア. 明るく素直で挨拶がよく、部活動・行事に熱心に参加する長所。
- イ. 授業に消極的で、基礎学力が不足する生徒が多く、上位との格差が大きい学習面。
- ウ. 基本的な生活習慣が身につけていず、校内外生活の約束が守れない生徒が見られる行動面。
- エ. 家庭での躾が十分なされず、学校に依存する傾向がある地域性。

③. 学校課題として全職員で取り組む教育活動の中核。

- ア. 授業へ積極的に参加でき、学力が向上する生徒。
- イ. 校内外生活の約束が守れ、情緒的に安定した生徒。

④. 学校課題解決のための教育課程編成。

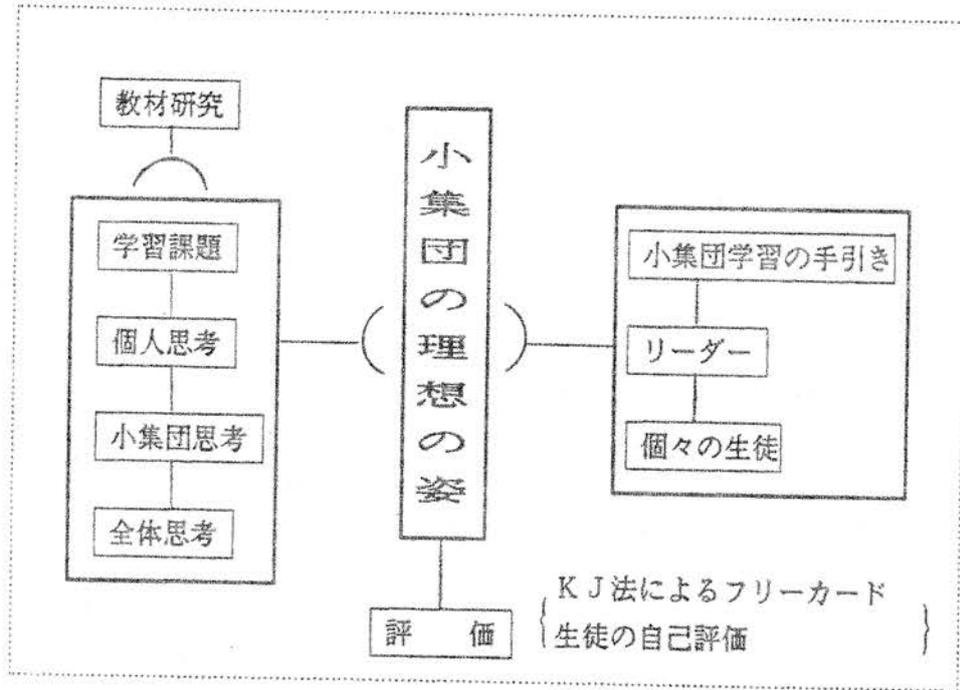


2 学校課題解決の中核としての小集団活動の活用

(1) 小集団の理想の姿

- ア それぞれが自分の考え・意見を他に説得する。
- イ グループの全員が他の人の考え・意見がわかる。

(2) 小集団活動を支える条件



(3) 小集団活動の指導の重点

ア 学習課題

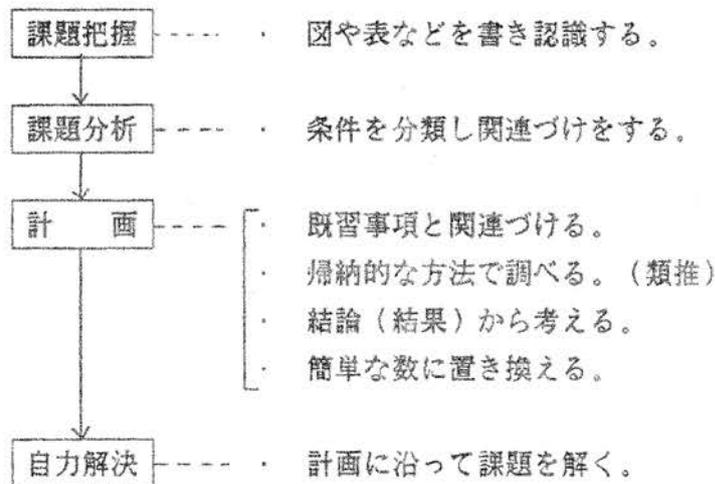
教材研究で次のことに配慮する。

- ・ 本時の指導のねらいが達成できるもの。
- ・ 系統性を考え、本次の学習の位置づけを明確にする。
- ・ 多様な考え方がみられるようにする。
- ・ 生徒の解決の意欲を喚起するもの。

イ 個人思考

小集団学習の理想の姿を求めるためには、まず話し合い活動の充実を図る必要がある。そのためには個人思考の深まりが必要不可欠であり、現在各教科で課題追求の手順や思考方法を模索している。

[数学科の例]



ウ 深まり・広がりのある話し合いの活動

[数学科の例]

- ・ 自力解決の過程を発表する。(根拠を示す)
- ・ 解決過程を比較検討する。
 - なぜそれが正しい答えを保証できるのか。
 - 他の方法ではなぜ誤りなのか。
 - 他にもっと良い方法はないのか。
- ・ 話し合いの姿勢。
 - 説得のために様々なアナロジーを用いる。
 - 簡単(安易)にわかったと言わない。

分科会名 第2分科会 教科指導（中高校）

提案主題 自然の事物・現象を主体的に追求する理科学習
—— 中3『大地の変化』の学習を通して——

愛知県春日井市立高森台中学校 水谷年孝

研究内容

1 はじめに

理科学習では、主体的に事物・現象を追求する能力・態度を育てていくこと、また自然を愛し保護する心を養うことを重視している。しかし、現実には生徒の自然離れが進み、自然から目が徐々に離れていっている。

また、地学教材では、扱う時間的・空間的スケールは、非常に大きく理解しにくい。そのため、生徒たちの知らない土地の資料で授業を進めるだけでは、経験が間接的になるため、学習は受け身になり、興味を半減させるほか、自然に親しませることもできないと考えられる。

そこで、地域の自然の中から、生徒の実態に応じた素材を選び出し教材化を進めた。また、ただ教材化するだけでなく、生徒の実態をふまえて系統的に組み立て、地域の自然を利用して自然の法則が学びやすいようなカリキュラムを作成した。そして、このカリキュラムをもとにして、フィールドワークを中心とした小集団を活かした授業を進め、これをもとに自然に働きかけ主体的に探求する理科学習はどうあるべきか研究・実践を進めた。

2 研究の目標

- (1) 高森台中学校周辺の地質を教材化し、「大地の変化」のカリキュラムを生徒の実態に応じて作成する。
- (2) 作成したカリキュラムをもとに、フィールドワークを中心にして小集団を活かした授業を行い、自然に働きかけ主体的に追求する能力を高める。また、時間的・空間的概念を養う。

3 研究の内容

- (1) 高森台中学校周辺の地質調査
- (2) 生徒の事前実態調査
- (3) 教材化とカリキュラムの作成

地質調査と生徒の実態調査の結果から、地域の地質の教材化を進めた。加えて、教材の系統性や発展性を十分に検討した。さらに、フィールドワークを中心にして、身近にあるものを観察し視野を広げることができ、また意欲を高めることができるようなカリキュラムを作成した。

作成したカリキュラムのねらいは、次の4点である。

- カリキュラムの流れを自然界の物質の移動のほうこうと同じようにすることにより、生徒の思考が中断されことなくスムーズにできるようにする。
- 自分たちの地域にあるものと、他地域のものとを対比させ考察させることから、一般化を図る。
- 火山灰の観察をすることからマグマをとらえさせ、火成岩のつくりを理解

させる。

エ フィールドワーク・観察などの直接体験を通して、科学的思考力や探究心を高める。

(4) 授業実践

作成したカリキュラムに基づき検証授業を進めた。主題にどのように迫っていたかを生徒の反応、分析、考察をつけ加え次のようにまとめた。

時	学習内容	生徒の反応	分析と考察
火山の活動について調べよう			
3/4	○火山灰の観察をする。 ・採集場所（潮見坂）の様子の説明を聞く。（ビデオ） ・潮見坂の火山灰（白色）の観察をする。どんな鉱物が含まれているのか調べる。	「春日井にも火山灰があるの。どこの火山の噴火のものなの。」 「ずいぶん厚く積もっているなあ。」 「ずいぶん白い層だな。」 「今度、採りに行こう。」 「いろいろな形物が見えるぞ。きれいだよ。」 「ほとんど透明な粒だぞ。形は不規則だなあ。」 「火山灰もくわしく調べると、いろいろな物からできているんだね。」 「あのマグマからこんな物ができると不思議だね。」	・思いもよらない所から火山灰ができることが、生徒の興味を引きつけることになった。 ・実際に調べてみたいという意欲の高まりがみられた。 ・火山灰がいろいろな鉱物からできていることは、多くの生徒にとって大きな驚きであった。 ・マグマとの関係を考えるようになってきた。
4/4	・阿蘇・御岳の火山灰（黒色）の観察をする。 ・白い火山灰と黒い火山灰の違いを話し合う。	「こっちの火山灰のほうが、いろいろな種類の鉱物があるよ。」 「透明なものもあるけど、色がついているものが多いね。」 「形もそんなに不規則じゃないね。」 「磁石につくものが入っているぞ。なになあ。」 「まず、入っていた鉱物の色が違っていたね。」 「黒っぽいのが多かったね。」 「白いのにも、黒いのにも入っていた鉱物もあったね。」 「形も黒い方が規則的な感じだね。」 「黒い火山灰の方が、色のついているものがたくさん入っていたね。」	・潮見坂の白い火山灰とのちがいをよくとらえることができた。 ・有色鉱物の割合が大きいほど、黒っぽくなることをとらえることができた。 ・マグマの違いに気がつくようになってきた。
マグマからできる岩石について調べよう。			
1/5	◎フィールドワーク No.1 ○築水池付近のカコウ岩の露頭を観察する。 ・新鮮な部分を採集する。 ・風化の様子も観察する。	「なんだこれ、変なかたちしている。」 「どうしてこうなったのかなあ。」 「石垣の岩と同じだよ。」 「足元の砂ももとは同じ岩だったの。」 「いろいろな粒でできているよ。」 「白や黒の粒からできているね。この前の火山灰に入っていたのと同じのがあるかな。」	・カコウ岩の風化した特異な地形に驚きを示した。 ・造岩鉱物に目が向いている。 ・前に観察した火山灰中の鉱物と比べて考える生徒ができた。

地層をつくる岩石、地層の広がりなどについて調べよう。

<p>3/9 4/9</p> <p>○フィールドワーク No.3</p> <p>○高森山周辺を歩きながら古生層を見つけて、地層の広がりを調べる。 断層、しゅう曲、不整合の様子も観察。</p> <p>・高森山西斜面の観察 (古生層)</p> <p>・石尾台公園のがけの観察 (古生層+第三紀層)</p> <p>・高森山のまわりで同じような層を見つける。</p>	<p>「層がたてになっているぞ。なぜだろうか。」</p> <p>「高森山東の層とまったくちがうね。岩ばかりでこれでも地層なの。」</p> <p>「一見かたそうだけど、手でさわるとバラバラになる部分が多いね。築水池のカコウ岩と同じように風化されているんだね。」</p> <p>「この岩、築水池のリュウモン岩に接していたのと同じだよ。」</p> <p>「この段になっている所、どうしてできたの。」</p> <p>「ずれたみたいだね。」</p> <p>「上の層と下の層と違うよ。」</p> <p>「下のは高森山西のと同じだよ。」</p> <p>「層が曲がっているね。どうして。」</p> <p>「上の層は水平でレキが多いね。高森山東のと似ているぞ。」</p> <p>「他の所にも同じ岩のような所はないかさがしてみよう。」</p> <p>「ここにも同じような層が顔を出しているぞ。」</p> <p>「みんな同じ層でつながっているのかな。すごい広さだね。」</p>	<p>・層がたてになっていることは、多くの生徒にとって大きな疑問となった。</p> <p>・今までのフィールドワークで調べたことをもとにして考えることができるようになってきた。</p> <p>・他の場所の地層と対比させて考えることができるようになってきた。</p> <p>・断層についても気付いて、成因を考えようとしている。</p> <p>・地層の不連続に気が付いている。</p> <p>・激しい大地の変動に驚いている生徒が多い。</p> <p>・今までの体験を生かしながら、自ら進んで調べようとする態度が見られるようになった。</p> <p>・数ヶ所の観察を通して、地層の広がり全体像をとらえることができた。</p>
---	---	---

<p>5/9</p> <p>○フィールドワークの結果をまとめ、地層の広がりをとらえる。</p> <p>・地図上で地層の横の広がりをとらえる。</p>	<p>「石尾台公園と高森山西斜面の間にも同じのがあったぞ。」</p> <p>「だんだん広がりがよくわかってきたぞ。」</p> <p>「グランドの下にもあるのかな。」</p>	<p>・フィールドワークの成果から、図にプロットすることによっても地層の広がりをとらえることができた。</p>
--	--	---

<p>8/9</p> <p>○化石の観察をする。</p> <p>・化石とは何か。</p> <p>・化石から何がわかるか。</p> <p>・どんな化石があるのか。</p> <p>・チャート中の放散虫化石の観察</p>	<p>「生物のからだのかたい部分が残るのかな。」</p> <p>「植物なら葉、くき、種子それから花粉も化石として出るんじゃない。」</p> <p>「小さな生物の化石があってもいいよね。」</p> <p>「小さな化石をさがしてみよう。どんなのがあるのかな。」</p> <p>「チャートの表面にボツボツと何か丸いものがあるぞ。」</p> <p>「おもしろい形をしているな。星のような形をしている物もあるよ。」</p> <p>「この放散虫は昔どこにいたのかな。」</p> <p>「他の化石はないか調べてみようよ。」</p>	<p>・化石というと貝や骨などばかりだと考えがちである。大部分の生徒は、小さな生物の化石までは考えていない。</p> <p>・身近な所からも化石がでること、また小さな化石があることは、生徒にとって大きな驚きであった。</p> <p>・化石について発展的に探究していこうとする態度が高まってきた。</p>
---	--	---

4 研究のまとめ

「春日井にも火山灰があるの」という驚きに始まり、現在も活動中の阿蘇や御岳の火山灰との比較学習では、マグマに大きな興味をいだかせることができた。そこから、さらにマグマからできる火成岩を調べる意欲が高まり、カコウ岩とリュウモン岩の観察、火成岩の成因の追求、地層・たいせき岩の学習へとつながっていった。そして、フィールドワークでの直接体験を通して、生徒たちは大きな変容を遂げた。また、フィールドワークなどでの班活動を重視したことにより、いろいろな疑問点や考えが多く出され、授業をより深めることができた。

以上のように、作成したカリキュラムに基づいてのフィールドワークや身近な素材と他の地域との対比などの実践は、生徒の興味・関心を高め、自分たちで自然に働きかけ、主体的に追求する能力を高めることに大きな効果があったと考えられる。また、その中で生徒の時間的・空間的概念を広げていくことができたとも考えられる。これは、下記に掲げる生徒の感想文からも読みとることができる。

(1) 自然に働きかけ、主体的に追求する態度の育成

- ・ どうして同じマグマからできたものなのに色が違っていたりするんだろうあんな小さな粒が規則正しい形をしているので感動した。あと、それぞれの粒がどういう性質をもっているのか調べたい。
- ・ どうして上の層の方がレキが大きいのだろうか。山の一部にあんなに細かく層があるのだから、もっといろいろ調べると何層でてくるかな。よく調べたい。
- ・ 今まで、恐竜の骨やアンモナイトみたいなものだけしか化石にならないと思っていたけれど、こんなにも小さな生物が化石になるとは驚いた。今まで珍しくてしょうがなかった化石がこんな身近にあるなんてすごいな。もっと探してみよう。

(2) 時間的・空間的概念の拡大

- ・ こんな身近に、ずっと昔にできた地層や岩があるなんてすごい。ともかくすごい年月をかけて積もったりいろいろしてできていくんですね。とにかく自然はすごい。それから、地球にとって、1億年やそこらはほんの短い時間なんだなと思った。
- ・ 高森山西の層と同じのが石尾台公園にも、それに築水池のまわりにもあった。かなりの大きさをもっているんだなと思った。もっと離れた所にもあるのではないかな。

(3) 地域の自然に対する興味・関心の高まり

- ・ 前からここにあることは知っていたけれど、実際に手でさわったり、くだいて粒を調べたり、ルーペで見たり本格的に観察するのははじめてだ。今まで岩はみんな同じで、同じようにできると思っていた。このフィールドワークで驚いたことがたくさんあった。
- ・ 岩石の様子や地層のできかた、どんなところにどんな地層があるのかなど自分たちの住んでいる地域の地質が少しずつわかっていくのがうれしかった

5 今後の課題

地域の自然を活かしたカリキュラムを作成して実践をしてきた。これにより、広い視野で自然を見つめとらえていく能力の育成が図れた。今後、こうした研究を他の单元でも実践し、小集団を活かし、広い視野から自然の事物・現象を主体的に追求する理科学習はどうあるべきかを研究・実践していきたい。

相互作用を生かし、参加度を高める学習指導
—— 課題と評価の研究を通して ——

愛知県春日井市立中部中学校 林 薫
毛利 公

1. 目標を持ち、積極的に参加する学習指導

「生徒一人ひとりが生き生きと活動する授業」が、本当の授業であろう。そのためには、「自律学習ができれば、学力が向上する」、「友だち同士が励ましあって目標を達成すれば、人間関係は、より親密になる」と仮説を立て、授業の中で積極的に相互活動を取り入れ実践を深めてきた。

(1) 指導過程の工夫

まず、一時間の授業を準備過程、中心過程、確認過程の三つに区分した。さらに、個から集団へ、集団から個へという原則にしたがい、それぞれの過程で

課題提示→個人思考→バズ→発表→教師の補足修正とまとめを組み、進めている。

しかし、このパターンは原則であり、教科や指導内容により個々の比重には、柔軟性を持たせている。

(2) 学習ルールの確立

バズ学習を効果的にするためには、学習ルールの確立することが大切である。そのために、

○チャイムと同時に予備課題に取り組む

○表示板を使った認知目標・態度目標の明示

○ハンドサイン・反応器の活用

○「生活の手引き」を活用した話し合いのルールの徹底
のような点にポイントをしばって指導してきた。

さらに、時々、項目別にチェックし診断するために「バズ強調週間」を設定した。帰りの短学活時にチェックし、「バズ学習チェックカード」に記入させている。

2. 学習課題と評価の研究

(1) 学習課題の作成

生徒の相互活動をいかに活性化させるかは、学習課題のねうちにかかり、その適・不適が学習効果を左右する重要な条件となる。
 「学習課題が存在しないところでは、学習が成立しない」ことを十分認識し、次のような手順で、適切な学習課題づくりを進めている。

単元・題材の目標→教材研究→指導内容の系統化と精選→指導目標の設定→学習課題の構造化→学習課題の決定

(2) 学習課題構成図

話し合いをより効果的にさせるためには、学習課題が適切であることが大切である。

その一助として学習課題構成図を作成し、単元や題材の導入時に生徒に示している。

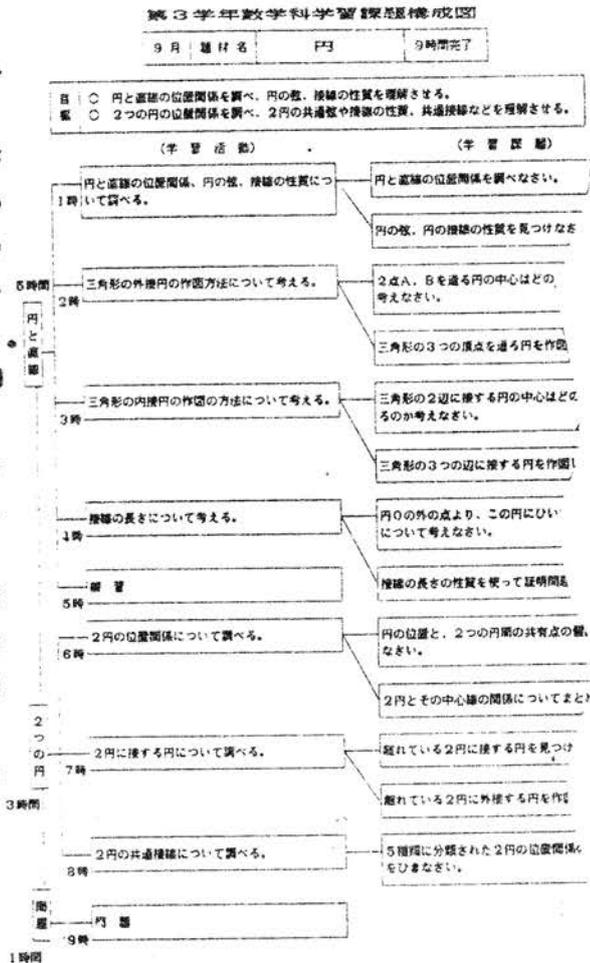
しかし、日が浅く全教科を網羅しているわけではない。

学習課題構成図は、教師が指導内容の構造化をはかるのに有効な側面と生徒に学習の見通しを知らせ、学習意欲を喚起するねらいを持っている。

単元や題材のまとめ（10時間くらい）を単位として、指導目標・生徒の学習活動の概要・主たる学習課題を示している。

また、並行して自己評価表・進度表等も添付し、学習結果をチェックさせ学習の意識化を図っている。

私たちにとっては、指導過程を今まで以上に練り上げるようになり、教材研究も深まった。



(3) 学習の評価

授業で大切なことは、指導した内容が生徒に理解され、定着したかどうかである。

そこで、学習課題を提示し、生徒の理解や定着を意識的に確かめながら指導を繰り返していく必要がある。

学習課題を提示し、確かめていくこの営みが評価活動であり、その積み重ねが形成的評価である。したがって、評価活動の出発は即時評価であり、それが授業の中で組織化されていなければならない。

一時間の学習過程では、三つの過程で学習課題が設定されるが、その学習課題ごとに生徒の理解を確かめながら指導を継続していく。

そこで、意図的な即時評価がなされなければ、学習効果は期待できないと考え、次のような取り組みをしている。

- 小テスト
- ハンドサイン
- 反応器
- 机間巡視
- 自己評価表
- 進度表

項目	技	Cランク	Bランク	Aランク
1. 上がり	足の上から	足の上から	足の上から	美しく上がる
	手を反らぬ	手を反らぬ	手を反らぬ	美しく歩く
2. 踏み	足かかぬ	足かかぬ	足かかぬ	踏切開始
	1/2踏み	足を反らぬ	手をつけて踏む	美しく踏む
3. おり	踏みおろし	足かかぬ	足かかぬ	下向きおろす
	両脚踏み	後方に手を付けて踏みおろす	ひざを伸ばす	手を動かさず踏みおろす
4. 踏切後	二足線上を歩かぬ	二足線上を歩かぬ	足を踏みおろす	踏みおろす
	踏切後	・	・	・
5. 踏切前	ふらふらの歩み	ふらふらの歩み	ふらふらの歩み	ふらふらの歩み
	足を伸ばす	足を伸ばす	足を伸ばす	二足線上を踏む

両足で歩いた項目は、ぬりつぶしている。

〈自己評価表や評価カードや進度表〉

学習の真の喜びとは、自分のものにした課題に挑戦し、それを克服した時の満足感・成就感にある。そのためには、生徒に自分の目標を設定し、積極的に立ち向かっていくような態度を身につけさせなければならない。

自己評価表や評価カード等は、まさにこの願いをこめた試みである。

各教科で様式や方法は異なるが、自己評価表や評価カードや進度表を用いて、自分の学習を振り返らせる資料にしたり、相互活動を活性化させる媒体として活用している。

書写評価カード1

大海

一年 平田 守

一年土曜日の書写 先生 山本 裕二

① 正しい姿勢
② きれいな字

項目	①	②	③	④	⑤
姿勢のポイント	○	○	○	○	○
きれいな字	○	○	○	○	○

◎ 少しでもいいから出された
△ まるであらう出された
○ しっかりできた

3. 学習指導法改善への取り組み

「わかる授業・充実した授業」を推し進めるために、生徒の参観を中心にした授業分析を行い、指導法改善のための資料づくりに取り組んでいる。

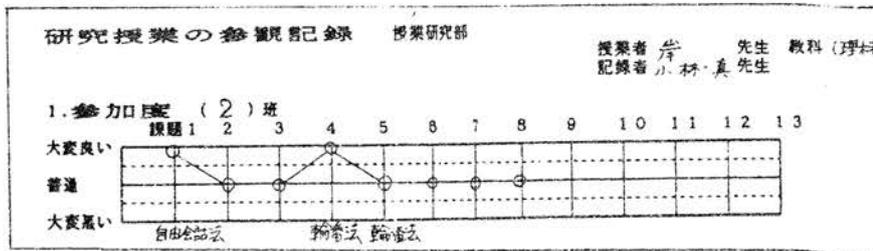
(1) 授業分析の実際

参加度の調査は、その基準が不明瞭で、とらえにくい部分が多いが、次の視点をもとに授業参観者による観察と生徒へのアンケートを実施した。

観察とアンケート調査の視点	
〈観察〉	〈アンケート〉
○話し合いの内容・回数	○授業に対する満足度
○教え合い	○授業の理解度
○班の雰囲気	○班内の協力

(2) 授業参観者（教師）による参加度の調査

参観者が分担して各班の参加度を学習課題ごとにチェックし



(3) 生徒へのアンケートによる参加度の調査

教師の観察だけでなく、生徒自身が授業に対してどの程度参観たと考えているのかをアンケートで把握を試みた。

(4) 学習指導技術に関する調査

参加度以外に、教師の学習指導技術について、参観者の感想を表にして学習指導法の改善の一助とした。

2. 参観者の学習指導法アンケート () 参観者(学) 1名

チェック項目	大変良い	普通	改善の必要
1 参観日程の設定	→	→	→
2 課題の内容	→	→	→
3 質問の内容	→	→	→
4 資料の内容	→	→	→
5 教材使用の工夫	→	→	→
6 パズの扱い方	→	→	→
7 反省の仕方	→	→	→
8 参観への配慮	→	→	→
9 参観全体の流れ	→	→	→

10 その他 不明
参観結果のアンケート結果を、教師の参観が、参観者の参観に役立つ。

4. 今後の課題

学習課題・評価の研究を通して、自律学習できる態度の育成を目指してきた。まだまだ、目をみはるような成果は見えないが、自己・相互評価や教師の評価活動の方法を工夫し、参加度の基準の確立と授業分析の積み上げをし、指導技量を高めていきたい。

第3分科会

特別活動（小学校）

司 会 者	山中 伸雄（春日井市立勝川小学校教頭） 丸山 正克（豊川市立代田小学校教諭）
助 言 者	速水 敏彦（名古屋大学助教授） 石田勢津子（名古屋大学助手） 右高 徳夫（春日井市立東野小学校長） 山田 節男（春日井市立神屋小学校長） 加藤 鈞（愛知県尾張教育事務所管理主事）
提 案 者	堀江 哲（新潟市立太郎代小学校教諭） 大島 郁雄（春日井市立松原小学校教諭） 小林 三洋（春日井市立中央台小学校教諭）
記 録 者	梶田 憲正（春日井市立八幡小学校教諭）

第3分科会

小規模校少人数学級における学級会の効果

新潟県新潟市立太郎代小学校 堀江 哲

研究内容

1. 学校の取り組み

(1) 研究主題

助け合い励まし合いながら主的に学習していく子供の育成
～小集団学習を通して意欲を起こさせる指導の工夫～

ア. 学校教育目標

自ら学び 深く考える子供
仲良く遊び 助け合う子供
進んで 体をきたえる子供

イ. 学習指導の方針・重点

〈模倣・暗記的学習傾向 ⇨ 発見・創造へ〉

- ・個々の考えを高め合う小集団での話し合いの在り方を求める。
- ・学級の向上的な雰囲気醸成に努め、学習意欲を高める。

ウ. 生徒指導の方針・重点

〈させられる行動から ⇨ する行動へ〉

- ・希望を持たせ、自覚した行動がとれるよう、援助する。
- ・「すべての教師がすべての子供に」の構えで指導に努める。

(2) 主題設定の理由

ア. 実態

- ・太郎代校区の地域社会の狭さ
- ・小規模校のため経験拡充の困難さ
- ・少人数学級のための児童同士の見方、考え方の固定化

イ. これまでの経過から

- ・昭和56～61年度までの4年間、「考える筋道を大切に
した指導」を研究主題とし、算数科を研究教科として
「見通しを持ち考える筋道をはっきりさせて問題を解
決していく子供の育成」を目指してきた。

ウ. 主題のねらい

- ・児童に「自主性」「協調性」を培い、児童相互
の人間関係を豊かにしていくことを目指す。

エ. 副題のねらい

- ・小集団学習の活動を多く取り入れることで相互援助の
雰囲気醸成をねらう。

2. 5年生の取り組み

バツをつけていく表でみんなが仲良くなれるのか
きびしさってなんだ

教師の宣言 (担任となった昨年度のこと)

- いじめは絶対許さない。
- 学級の中で競争はいらぬ。だから、点数を書いたり表を作ったりはしない。
- 学校は競争するところではなく、みんなで助け合って一人ひとりが成長するところだ。

(1)学級の実態

ア. 少人数学級での班編成

- 男子5名、女子7名、計12名。男子2人女子2人の班が2班、男子1人女子3人の班が1班、計3班である。
- 約2か月に1回は班がえをしている。メンバーは教師が決め、班長・席順・班日記の順番・班の目標等を子供たちで決めている。

イ. 問題点

- 子供たちの人間関係の中に上下関係ができあがっており、弱者に対してきつい言動を取る傾向にある。
- 男女の意識の差が大きい。

(2)学級会活動 「もっといいクラスを作ろう」

ア. 指導目標

- 学級生活に目を向けさせ、学級の問題点を見付け問題に取り組み、よりよい方策を考え実践していくことによって①互いに認め合おうとする態度を育てる。②生活を向上させようという態度を育てる。③学級としての志気を高めようとする態度を育てる。

イ. 活動の経過

- 子供から考えられた学級の方向
 - ①もっとなかのいいクラスがいい
悪口をいったりけんかをしたりする人自分勝手な人がいる。
 - ②もっと協力したほうがいい
そうじや給食当番の時にまじめにしない人がいる。
 - もっと仲良くするために考えられた方法が5つあり、その中で、議論の焦点となったものが
 - ①表を作って悪口を言ったりけんかをした人に×をつけていく。
 - ②悪口を言った人けんかした人にはきびしくする。
である。
 - 子供たちの意見は
「×をつけることで本当によくなるのか。」「きびしくするってどういう意味なんだ。」 に集中した。
- ◎ 5つの考えに順番を付け、これがだめならこれというようにとにかくやってみることに決定。最初の方法は、表を作り×を付けていくこととなる。

第3分科会（特別活動）

研究主題

豊かな心と自己教育力のある児童の育成をめざして
～縦割り活動を通して～

愛知県春日井市立松原小学校
大島 郁雄
田中 重幸

1、はじめに

本校は、春日井市のほぼ中央部に位置し、春日井市の中でも大規模校の部類に入る小学校である。学区には商店街を抱えているものの教育的環境には大変恵まれた地区である。また地域の保護者の教育に対する関心は高く、子供会活動等も盛んである。

本校の児童の実態についてみると、

- ・人なつっこく、活発な児童が多い。
- ・快活で、物おじしない。

等の長所が上げられる反面

- ・他人に対する思いやりが足りない。
- ・自分の考えがしっかりせず、他に押し流されやすい。

等の短所が毎年の反省としてあげられている。そこで、本校では、「よく考え進んで学ぶ子・心豊かで、思いやりのある子・健康でたくましい子・力を合わせ、がんばりぬく子」の教育目標を掲げ、教科指導はもちろんの事、特別活動（縦割り活動）を通して、豊かな情操を養い、自らを育む自己教育力を養おうと取り組んでいる。

2、縦割り活動のねらい

本校教育目標具現化の為の重要な教育活動ととらえ、あくまでも実践的・体験的活動を通して、心身の調和的発達や個性的伸張、集団の一員としての自覚、協力してよりよい生活を築こうとする自立的・実践的な態度を育てる。

（1）具体的なねらい

- ・異なる年齢集団を通して、新しい仲間意識を育てる。
- ・よりよい縦の人間関係を再構成すると共に、郷土に伝わる文化や芸術を大切に継承しようとする態度を育てる。
- ・各種の活動を通して、思いやりのある子・公共物を大切にする子・自立心のある子の育成を図る。

（2）縦割り活動の基本的な考え方

本校の縦割り活動は、学校の実態に即した教育課題に立ち、「豊かな心と自己教育力を養うと共に、潤いのある学校を築こうとする実践力を養おう」ところろみたものである。

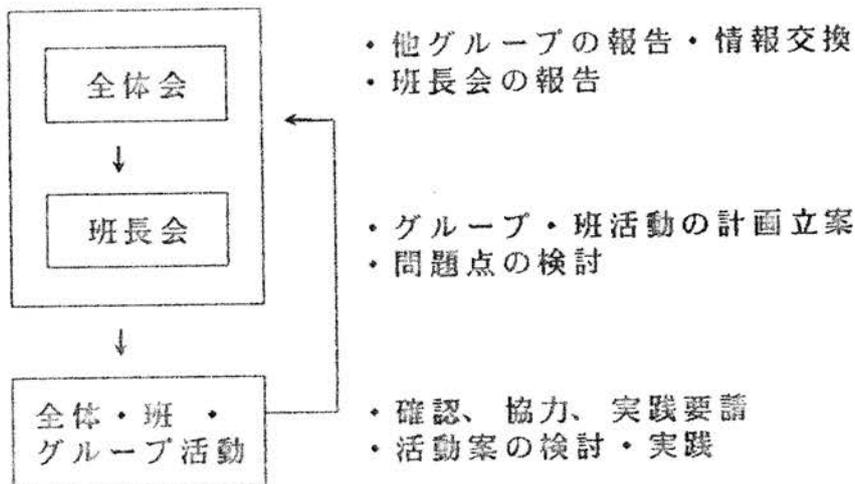
具体的には

- ・本校の実態を生かし、教育目標の具現化を図る全校集団活動とする。
- ・児童の自主性や創造性を生かすとともに、グループ及び班活動を基本とし、個と集団との協力や助け合いを大切にす活動を行う。
- ・活動の推進に当たっては、長期的展望に立って、活動を行う。
- ・活動に当たっては、リーダー会→全体・グループ・班活動の指導の流れを設け、指導の徹底を図る。
- ・グループは、各クラスを7グループに分ける。(全校で28グループ)。班は全校で176班で、この班を28グループに編成する(1グループ6～7班)
- ・班の男女の比率は等分とし、原則として、1年～6年までの児童各1名ずつで構成する。
- ・6年生全員を班長ととし、班長の内からグループ長を選出する。
- ・活動時間は、毎週土曜日の4時限とし、その週の火曜日の業前にリーダー会を行う。

(3) リーダー会の位置づけ

前述の目標にかなない、豊かな心と自己教育力のある人間として成長しようとする意欲を班長が持って欲しいと期待し、またそうした班長育成の場の一つとして、リーダー会を設定し、指導してきた。

リーダー会



このようにリーダー会を位置づけ、諸活動実践の推進力として、グループ活動を高めている。またリーダー会のねらいを次のようにしている。

ア、リーダーとしてどう考え、行動すべきかを指導する場

- グループ長・班長としての自覚を持たせる。
- イ、お互いの班の情報を交換し合う。→よい班にしようとする意欲を持たせ、班長相互の連携を強める。
- ウ、グループ・班の現状を見つめながら、楽しく活動できる方向を見つける。→グループ・班の問題点に対する意識を全体に広げる。

3、実際の取り組み

(1) リーダー会

4月以来、リーダー会を中心に活動を行ってきた。その結果、多くの成果を得ることができた。その一部をここで紹介する。

ア、グループ・班活動へ積極的に参加しようとしなない児童を、班長会で、どう活動に取り組ませるか熱心に話し合った。その結果、活動内容も1年生から6年生までが興味を持てるもの、また全員が参加しないとできないもの等の活動内容が考えられ、「たいへんたのしい」「次の縦割りが待ち遠しい」という声も聞かれるようになってきた。

イ、班長自身も1学期を終わった時点の感想として、「班長と呼ばれるのは嬉しい」「班長として楽しいことをいっぱい計画したい」等と、みんなの先頭に立って、積極的に取り組もうとする姿勢が見られるようになってきた。

(2) 縦割り活動(グループ・班での活動)

4月から年間計画に従って、各種の縦割り活動を実施してきた。その実施した活動名を上げ、その中の一部を紹介する。

月	活動名	備考
5	グループの顔合わせ	自己紹介・グループ長選出
5 ・ 6	グループの名前を決めよう グループの旗を作ろう ゲームを楽しもう	グループで作製
6	グループ対抗ゲーム大会	グループ対抗形式で全校で実施
7	びゅんびゅんごまを作ろう	グループごとで実施

ア、活動名

○グループの名前を考え、グループ旗を作ろう

イ、グループでの活動の流れ

(ア) 活動の内容の説明(グループ長より)→内容についての計画及び計画の検討(グループ・班)→活動(班・個人)→反省

(イ)、指導にあたって

異なる年齢集団である為に、一つの活動を行うのでも、しっかりした計画のもとに、活動を実施しなければ目的が達成できない。ましてや、普段一緒に遊んだこともない異年齢集団の場合なおさらのことである。活動にあたっては、班長会で活動の計画、活動にあつたての問題点などを十分検討させ、グループに提案させた。また低学年の意見を班活動に反映させるため、グループ・班での話し合いの時間も十分に確保した。

一人一人の児童になすべき課題があり、また高学年が低学年の面倒をみながら活動を進めた為に、児童の反応も「縦割り活動はおもしろい」「班のみんなと楽しく活動できた」という声が多く聞かれた。

4、終わりに

本校の現状を鑑み、豊かな心と自己教育力のある児童の育成をめざして、長期的展望にたつて、縦割り活動に取り組んできた。当初は、900名余の異年齢の児童をどう指導していけばいいのか不安もあったが、リーダー会を軸に活動を実施してきた結果、児童も前向きに、喜びを感じながら取り組んでくれるようになった。

特に、6年生のグループ長・班長は、低学年の児童をどう指導していけばいいのか戸惑いや不安感で一杯だったようであったが、1学期の終わり頃になると、図書室でゲームの本などを授け、遊び方等を勉強する姿も見られるようになった。

今後の課題として

- ・活動のマナー化をどう防ぎ、活動内容を広げていくか。
- ・集団活動になじめない児童をどう縦割り活動に参加させていくか。
- ・5年生を次代のリーダーとして、どう育成していくか。
- ・長期的展望に立った活動の内容をどうとらえ、計画していくか。
- ・活動の時間をどう確保していくか。

第3分科会 特別活動(小学校)

主題 「豊かな人間関係を育てる全校集会の創造」

いちょうっ子まつりの実践を通して

愛知県春日井市立中央台小学校 小林 三 洋

1. はじめに

中央台は、13年前からつくられた新興住宅地である。歴史が浅いことと、住民は全国各地からの転居者が多いということから、地域の連帯意識の低さや教育力の弱さが感じられる。また、地域には子供達が主体となって取り組む行事も少ない。そこで昭和60年11月9日に、児童会が中心となって十周年記念パレードを行い、地域の住民とともに開校10周年を祝った。これが本校の「いちょうっ子まつり」のはじまりである。

学級のみinnで1つの大きなみこしや屋台を作りパレードをしたこの集会を、児童は非常に印象深くとらえ、「是非、来年もやりたい」という声が多数を占めた。その声を受け、児童会では「いちょうっ子まつり」を毎年計画し、取り組んでいる。今回は、この「いちょうっ子まつり」の実践のようすについて報告したい。

2 「まつり」でめざすもの

(1) 自分達で創意工夫し、自分達の力を発揮する場とする。

各学級にまかされたみこしの製作や発表方法・パレードの方法・仕事の分担など、児童の創意工夫を期待する活動はいくつもある。

(2) みんなの力を合わせ、分担して活動をする場とする。

まつりを成功させるためには、一部の児童の力だけでは不十分である。全員の知恵と力を集めて、児童1人ひとりが役割をもち、計画的に集会をつくりあげていくことが、児童の大きな喜びにつながる。

(3) よりよい人間関係を築く場とする。

各学級での話し合い・作業・練習・発表を仲間と励まし合い、認め合いながら進めていく過程を通して、全校でまつりを成功させる喜びの体験を通して、学級・学校の一員としての自覚をもたせ、連帯感を深めることができる。その力が、以後の学校生活の向上のために生きていくはずである。

(4) 地域と学校との交流を深める場とする。

児童が地域に対してまつり参観のよびかけをしたり、地域の方々がパレードをしている児童に対して心から応援をしてくださったりしていくことを通して、地域に根ざした学校づくりを進めていくことができる。

3. 実践のようす(62年度の取り組みから)

(1) 事前の活動

ア 代表委員会での話し合い

児童がまつりを自分達のものであることを強くとらえるためには、学級会・代表委員会での話し合いを大切にしなければならない。そこで、次のような内容を計画的に代表委員会で話し合い、各学級での話し合いが深まるようにした。

回	月・日	まつりに関して、代表委員会で話し合った内容
1	5・6	児童会活動年間計画の承認(11月にまつり)
7	9・18	まつりのめあて・形体について希望集約
8	10・7	スローガン・全体粗案の承認
9	10・21	全体プログラム・パレード方法の承認
10	11・4	クラス発表の方法・全校合唱曲承認、成功への誓い
11	11・18	まつりの反省

イ 執行委員・実行委員の取り組み

まつりを盛り上げるために、次の活動をした。

- ポスター70枚を校区内に掲示し、地域住民への参観のよびかけ
- 父母への招待状を配布し、まつり応援のよびかけ
- 各学級の取り組み状況を、放送や掲示物を使って紹介
- 全校児童のまつりに対する意識高揚を図り、事前に小集会の実施

ウ 各学級の取り組み

まつりが児童にとって印象深い集会となるのは、当日の発表めざして、学級構成員全員で話し合ったり、準備したり、練習したりする活動がたくさんあるからである。それらの活動をする場が児童に保障されなくてはならない。そこで各学年の発達段階に応じて、児童に任せる面・教師

の援助を必要とする面を明確に示し、次の表のように準備・練習をした。

【教師と児童の準備分担表】

項目 \ 学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
みこしの台を製作	/	●	●	△	△	○
マスコット製作の計画を立案	●	●	△	△	△	○
マスコットを製作	△	△	△	△	○	○
小道具・衣装の計画を立案	●	△	△	△	△	○
小道具・衣装を製作	△	△	△	○	○	○
発表の計画立案と準備	●	△	△	△	△	△
発表の表現方法を工夫	△	△	△	○	○	○
発表の練習	△	△	△	△	○	○

※ ほとんど教師⇒●，教師が援助⇒△，ほとんど児童⇒○

その結果、児童は自分達の力でまつりを成功させることができたという成就感を味わうことができた。

(2) いちようっ子まつり……………次ページに記述

4 おわりに

「いちようっ子まつり」は昨年度が3回目。児童はもちろんのこと、地域にもすっかり定着してきたようである。児童が全身で自信と喜びを表して校区を元気よくパレードするようすに、地域の方々もすがすがしさを感じ、心から応援をしていただけるようである。

また、児童の事後アンケートの結果からは、今回のまつりも自分達でふさわしいテーマを選び、主体的に取り組み、成功させることができた満足感を伺うことができる。こうしたまつりができるのは、本校が全校体制で集会の創造に取り組み、児童がこれまでいろいろな発表を経験したり、見たりしてきたことの積み上げの結果である。そして児童からは、現状で満足することなく、より高い理想を掲げるどん欲な姿勢も伺える。今後も、児童にとって新鮮で魅力あるまつりを創造し、本校の伝統行事として続けていきたい。

なお、今年度の「いちようっ子まつり」は、11月19日に予定している。

◆ 昭和62年度「いちょうっ子まつり」の概要（11月4日実施）

【ねらい】：1. 元気のよい、楽しいまつりを体験させ、まつりを毎年楽しみに待つような意欲を高めさせる。

2. クラスの仲間の心を1つにして、まつりをつくりあげることによる喜びを感じとらせ、もっと仲よくしていこうという気持ちをもたせる。

【スローガン】 元気 なかよし いちょうっ子まつり

【プログラム】

1. はじめの会

- (1) はじめの言葉（1分）
- (2) スローガンの確認（1分）
- (3) クラス発表（26分）
- (4) 全校合唱「まつりだホイ」（2分）

2. パレード（75分）

3. おわりの会

- (1) パレードの感想（1分）
- (2) ファイヤーストーム
 - ・点火（2分）
 - ・全校合唱「大きな夢のマーチ」（3分）
 - ・フォークダンス「マイムマイム」（5分）
- (3) 先生の言葉（2分）
- (4) おわりの言葉（1分）

4. みこしとお別れ会

（後日、学年ごとに20分）

↓【お別れ会】

マスコットを学年ごとに燃やし、お別れ会をしました。自分達で作ったマスコットが燃える様子をすぐ近くで見たことが、感動的でした。

【クラスの世界】

各クラスで表現したい「世界」を決めました。その「世界」に合わせて、クラス発表の内容・マスコットの形・衣装などを計画し、練習・製作をしました。

【クラス発表】

パレード中はクラス単位で行動するため、他のクラスの発表がわかりません。そこで、各クラスが1分に短縮して発表内容の紹介をしました。

【パレード】

- ・ 3つのコースに分かれて、校区内をクラスごとにねり歩きました。
- ・ マスコットをかつぎ、かけ声を出しながら歩き、途中の数か所の路上で3～5分のクラス発表をしました。

【ファイヤーストーム】

小道具・衣装・段ボールのきれはし等のゴミを運動場の中央に集めました。実行委員が点火し、炎をかこんで全校で歌ったり踊ったりしました。

第4分科会

特別活動（中学校）

司 会 者	横手 茂（広島県豊田郡豊町立豊中学校教頭） 丹羽 一男（春日井市立高蔵寺中学校教頭）
助 言 者	松原 敏浩（大同工業大学教授） 太田 信夫（筑波大学助教授） 新田 正彦（元広島県立豊高等学校長） 舟越 和吉（新潟市立中野小屋中学校長） 山田 克巳（青森市立横内中学校長） 岡田 脩（土岐市立泉中学校長） 西村 精爾（春日井市立南城中学校長） 森田 利夫（春日井市教育委員会学校教育課長）
提 案 者	中丸 智公（広島県豊田郡豊浜町立豊浜中学校長） 武田 広也（春日井市立南城中学校教諭） 藤城 吉雄（春日井市立中部中学校教諭） 石黒 照人（春日井市立中部中学校教諭）
記 録 者	富田 彪（春日井市立柏原中学校教諭）

第4分科会

提案主題 互いに人間として尊重しあい児童生徒の相互作用によって人間関係を高める教育の創造

広島県豊田郡豊浜町立豊浜中学校 中丸智公

発表内容

1、地域の実態

呉線仁方から約1時間、愛媛県境沿いに点在する瀬戸内海の一島、周囲12kmの豊島と海上2.5km離れた斎島、及び大崎下島の一部を含む6地区の共同体が豊浜町である。

本校生徒は、豊島小学校、大浜小学校、斎小学校から入学する。斎島には分校があったが、昭和41年に統合され生徒は寄宿舎か、学寮に入舎して登校していた。夜間学級もあったが昭和50年廃止された。

主な産業は小型漁船による一本釣り、はえなわ漁法の水産業と柑橘栽培の農業である。農家では柑橘類の価格安からくる収入減により、農業だけでは生活が成り立たず、島外に働きに出るものも多い。子ども達の約半数は漁業家産で、両親がそろって3カ月以上に及んで長期不在となることが多く、幼稚園、小学校、中学校の子ども達の中には両親のもとを離れて豊浜学寮で生活している者や、兄弟姉妹や祖母、親戚のもとで生活しているものがあり、正月、盆、秋祭りなどに両親の帰ってくるのを楽しみにしながら通学している。

生徒はいたって素直で明朗な面もあるが、幼児期の船上生活などによる対話の不足から起こる人間関係の諸問題、基本的な生活習慣の不足、自我意識が強くて集団になじみにくい面、そのために相手の立場を理解する意識が育っていない面などが見受けられる。

2、主題設定の理由

先の地域生徒の実態の中であげられるように、本校生徒は対人関係における諸問題を抱えている。

これから社会に出ていく生徒達、特に本島より出ていく生徒が多い中で彼らが島外でも通用する人間になるために人間尊重の精神、高い社会性を身につけさせることは、極めて大切なことである。これらの生徒実態に立って、小・中学校が協力して家庭や地域との連携をはかり、基本的な生活習慣を身につけさせるとともに深く道徳性を養い、次にあげるような生徒を育てたいという願いから本主題を設定した。

(1) 生命・人権を尊重し合う生徒を育てる。

人間としての願い

- ① 自分を大切に作る人間
- ② 人をきずつけない人間
- ③ 人の悲しみのわかる人間
- ④ 人の悲しみをなくすために努力する人間

(2) 能力・特性を見だし、自ら考える生徒を育てる。

(3) 健康明朗で互いに協力しあえる生徒を育てる。

3. 研究のねらい

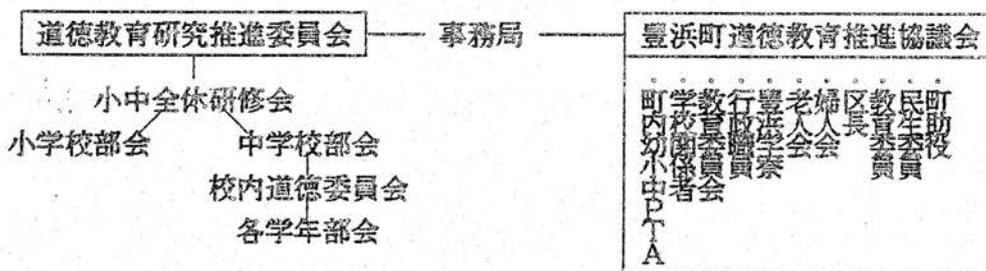
当初、道徳教育研究推進にあたって研究計画の中に次のような項目をあげた。

- ① 校内研究推進体制の確立
- ② 全体計画、年間指導計画の検討
- ③ 校内研修の方法と充実
- ④ 楽しい道徳授業の創造
- ⑤ 地域との連携作り
- ⑥ 評価方法

これらの項目を内容あるものとするために、本校のこれまでの実践を生かし、さらに整理・方向づけを行っていきたい。

4. 研究組織

豊浜町は、3000人余りの小さな町である。したがって、閉鎖的であり望ましい道徳性が育ちにくい環境にある。こうした実態の中で、地域ぐるみの取り組みの必要性を痛切に感じ、道徳教育推進協議会を設置、地域との連携を重視した組織作りを進めてきた。



- ・ 事務局 ----- 小中地域との連絡・大会運営のための窓口
- ・ 道徳教育研究推進委員会 ----- 研究推進に関わる企画立案、道徳的実践活動の推進。
- ・ 豊浜町道徳教育推進協議会 ----- 学校・町住民との意見交換、実践事業の協力態勢の確立。

- 小中全体研修会 ----- 小中連携のもとに研究・研修を進める。
- ・ 中学校部会 ----- 授業研究、道徳的実践の推進。

5. 実践内容

(1) バズ学習

→ 生徒相互の協方しあえる人間関係をつくって基礎学力の充実を図ることを究極のねらいとしてバズ学習の実践を重ねている。

人間関係の好転なしには生徒の学力の定着はありえないといわれるほど生徒の生活背景は地域の僻地性や生育区からくる多くの課題を背負い込んでいる。中でも漁業者の多くは県外出漁であり、そのため中学生の40%近くが両親不在の留守家庭を守りながら生活している。そういう状況の中で生徒自身の人格形成に及ぼす影響だけでなく学校教育における仲間作りや学習集団作りにも深刻な影響を与えてきたのは生徒の人間関係に対するひずみであった。この深刻な対人関係のひずみを克服するためにバズ学習方式を導入、現在にいたっている。

→ また、基本的生活習慣の確立ということも生徒の実態として重視されてきたことであるが、クラブ活動や清掃活動、給食指導、生徒会活動や全校朝会の中でも発表の機会を多くしたり集団訓練やバズ場面の設定などによって家庭におけるしつけ面の補完的役割も果たしている。

(2) 町内バズ実施計画

	7月 12日	9月	10月	11月	1月	2月	3月
大浜 檀正	海浜清掃	お母の清掃 雨天カラオケ大会	クリーン作戦	かたりべを聞く	もちつき	クリーン作戦	三年生を送る会 反省
立花 石本	"	玉入れ、ドッチボール 雨天活動作り	"	ゲートボール	昔の遊び(お手玉) ぞうり作り	"	"
内浦 芝田、沖本	"	ワラジ作り	"	人生の究極の 一語を聞く会	ゲートボール	"	"
開発センター 菊園、水岡	"	ゲートボール	"	昔の料理	もちつき	"	"
漁業組合 森井、山口	"	昔の遊び	"	ゲートボール	もちつき	"	"
宝蔵神社 小谷、唐金	"	昔の食べ物	"	昔の遊び おもちゃづくり	ゲートボール	"	"
(公)タタミ 鹿押	"	老人への手紙	"	老人の話を聞く	ゲートボール	"	"
(公)講堂 小原、黒田	"	ゲートボール	"	老人の話を聞く	老人の話を聞く	"	"
山崎 割石	"	老人と語る会	"	ゲートボール	文化継承 (ぞうり作り)	"	"

(3) 勤労体験学習

(1) みかん作り

豊浜町の基幹産業は小型漁船による漁業、柑橘類栽培の農業である。この地域の実態から、生徒たちが身近に感じているみかん作りを勤労体験学習として来年度より本格的に取り組んでいく。

生徒の半数は、みかん作りの農業家庭で育ち、幼い頃からそれを間近に見、手伝ってきている。また、漁業家庭の生徒もみかん収穫時期には手伝いをしている。そのみかん作りの作業を生徒たちの手で行うことにより、先人たちの作り上げた歴史の重さを知り、友人と汗を流して働くことにより、働くことの尊さや粘り強く努力することの大切さ、仲間相互の人間関係の大切さ等の基本的な生活習慣や行動様式を体験的に身につけさせ、さらに継続したみかんの成育観察を通して自然に関心をもたせたい。

今年度は10月に7アールのみかん畑を借用し除草作業、収穫作業を行った。また、11月の文化祭では収穫したみかんの試食コーナーを設けて文化祭を盛り上げることに一役かった。

○目標

- ・みかん作りの学習を通して栽培技術や豊浜町の歴史にも目を向けさせ理解を深めさせる。
- ・土に汗して働き、勤労の尊さを学ぶ。
- ・基本的な生活習慣、行動様式を養う。
- ・人間関係の大切さを理解させ、仲間意識を育てる。
- ・自然に接することにより、人間と自然との調和を理解させる。

(2) 花いっぱい運動

学校内を見ると、いたるところに樹木の緑がある。赤、黄、青の色。大自然に向かって育っていく色、心の色としての草花の育成を合言葉に生徒たちは頑張りを続けている。花の色の種々の美しさを求めること、そこに子供たちの感性が育つ一助となると教職員は考え、生徒たちと話し合った。そこで、まず今年度は一年生を中心に校内の適地にスイセン・クロッカスの球根、アジサイの苗木等を植える。畑を耕し、肥料、水をやり、種をまく。勤労の喜び、草花のもつ色を求めて、個々が汗を流しがんぼった。

今後の計画は、春に咲く花を一年生、夏に咲く花を二・三年生というように生徒会を中心にとりくみ実践している。

(4) 課題

分科会名 第4分科会・特別活動

提案主題 国際性豊かな生徒育成の基盤を小集団学習に求めて

愛知県春日井市立南城中学校

武田 広也

1. 南城のめざす国際性豊かな生徒

ユネスコ憲章の3つの重点目標をふまえ、本校のめざす国際性豊かな生徒を次に示す(1)～(3)であると考えた。

- (1) 常に世界の国々とのかかわり合いをもつ日本人として、物事を考えられる生徒
 - (2) 自国・他国の文化や風習を理解し尊重する生徒
 - (3) 自ら進んで学習や諸活動に取り組み、正しい自己主張ができ創造性豊かな生徒
- さらに、この本校のめざす国際性豊かな生徒像を、より具体化し次のようにまとめ、本校の教育重点目標とした。
- (1) 友と仲良くできる生徒 (自他の尊重)
 - (2) 自ら進んで学ぶことができる生徒 (自学力)
 - (3) 自分の言葉でしっかり発言できる生徒 (自己表現力)

2. 基本的な考え方

国際性豊かな生徒の育成には、教科、道徳、特別活動と学校教育全般を通しての指導が必要となろう。それぞれの活動の根底には何が不可欠であろうか。それは人間理解、人間尊重の心の育成であると考え。では、その人間理解、人間尊重の心の育成をどのようにして求めていけばよいのだろうか。

小集団学習では、学級という集団の場の中で、意図的に、生徒相互の働きかけや協力によって、個々の生徒の学力や、学級成員全員の学力を高めていこうとする。だから、その基盤は学級成員の人間関係であり、協力体制であり、教え合い、確かめあう相互交流活動であるといえる。

この小集団学習を通して、生徒相互が触れ合い、相互作用の中で他人を理解し、自分を見つめる態度も培われ、これが人間理解、人間尊重の心につながると考える。

3. 南城のめざす小集団学習

(1) 目標

- ① 小集団による学習の、相互交流活動によるよりよい人間関係・協力体制の育成を基盤にして、教え合い、確かめあうことのできる学級をめざし、よりよい学級集団・よりよい個の育成をはかる。
- ② 目的によって編成されたそれぞれの集団において、個人として尊重され、生かされ、集団としてまとめられ成長し、しかも個人として高められ、一人ひとり何事にも参加できる指導をはかる。

(2) 具体的なたて

- ① 短学活の中に小集団を利用した復習を取り入れる。
アンケートの結果からも教え合うことが十分にできていないという状況がみられた。この活動により、話し合いの基礎ともいえる教え合いを、学校体制で実施することにより、教え合うことのできる学級集団をめざす。
- ② 短学活の中に小集団を利用した生活の反省を取り入れる。
学校生活に密着した具体的な内容を反省・確認・話し合いをさせることにより、話し合いの方法を定着させる。
- ③ 学級の時間・学裁の時間に小集団を利用した活動を取り入れる。
設定された目標に対して、個人・班・学級・学年で、それぞれの機能を十分に発揮させることのできるような指導に心がける。
各行事においては班の利用を考慮して計画し、学級においては班編成の時期などを配慮しつつ行なう。

- ④ 授業においては教材の研究を十分に行ない、課題の設定に十分留意する。
小集団学習の中心はこの内容であり、前述の①～③の取り組みは、すべてこのことがよりよい方向に進展するように配慮する。
- ⑤ 班編成は、4人・10班を基準とする。
効率の面から4人編成、等質、4週間程度による編成がえが適当と思われる。男女各2名で一つの班を構成し、座席は男女交互を原則とするが、学級の状況によりある程度柔軟に考えたい。形式よりも取り組みや内容が問題である。必要に応じて班の形にすることを原則とする。学校体制として、班の形に素早く静かにする練習を実施し、その定着をはかる。
また、班を組んだ状態で前を向かせるときは、椅子ごと、体だけ、くびだけの3つの方法を状況により指示して、不適切な姿勢がないように配慮する。
- ⑥ 給食当番・清掃当番なども、編成した班が利用できる場所は活用する。
3(1)②で示したように目標は、目的によって編成した班においてであるので、必ずしもそうでなければならぬとは考えない。形式よりも取り組みや内容が問題である。

4. 研究内容

(1) 62年度の取り組み

① 小集団学習の理論の研究

- | | |
|------------------|-----------------|
| ア 小集団学習に関する資料の輪読 | イ なぜ小集団学習に取り組むか |
| ウ 小集団学習の基礎的な理論 | エ 小集団学習の原理 |
| オ 授業をどのように進めるか | カ 講師による講演 |
| キ 先進校の視察 | ク 研究会への参加 |

② 研究主題とのかかわりについての検討

③ アンケート調査

④ 実践に向けての討議と実践

- | | | | |
|---------|-------|--------|-----------|
| ア 座席の配置 | イ 班編成 | ウ 班の利用 | エ 取り組みの内容 |
|---------|-------|--------|-----------|

⑤ 南城のめざす小集団学習の目標の設定

⑥ 具体的なてだての確認

- | | | |
|---------|--------|---------------|
| ⑦ 資料の作成 | 教師用 …… | バズ学習の理論と実際の抜粋 |
| | 生徒用 …… | 手引き |

⑧ 実践

⑨ アンケート調査

(2) 63年度の取り組み

① アンケート調査

② アンケートのまとめと考察

③ 年間計画の作成

④ 資料の作成 教師用 ……

- | | |
|---|--------------|
| [| 国際理解教育とのかかわり |
| | 本校の小集団学習の目標 |
| | 具体的なてだて |

生徒用 …… 小集団学習の手引き (小集団学習を進めるにあたって)

⑤ 小集団学習を進めるにあたってを促すの指導 (学指2時間)

⑥ 実践

⑦ 実践のまとめ 教師 …… 反省と重点指導内容の検討

生徒 …… 反省と今後の課題 (学活1時間)

⑧ 重点指導内容についての指導 (学指1時間)

⑨ 重点指導内容をふまえての実践

(3) アンケート結果と生徒の変容

① アンケート調査の目的

ア 学習、友人関係についての状況の把握

イ 小集団学習の実施による生徒の変容の把握

② 実施方法

ア 実施年月

第1次 昭和62年6月

第2次 昭和63年3月

第3次 昭和63年6月

イ 対象

第1次、第2次は同一学級、各学年2学級抽出、合計237名

第3次、各学年2学級抽出、合計238名

ウ 回答方法

各調査項目について、はい、どちらともいえない、いいえ、からの選択とした。

③ 調査項目 —— 別紙参照

④ 結果と考察

ア 結果

別紙学習友人関係についてのアンケート結果第1次・第2次・第3次参照。

イ 考察

(ア) 学習、友人関係についての状況 —— 別紙参照

(イ) 生徒の変容

第1次の結果と第2次の結果を比較するなかで、以下のような変容がみられた。

- 聞いたり、聞かれたりしてよかったという経験が増加している。わからないことを友人に聞くという態度は身につけてきている。反面、聞かれたとき親切に教えることができるとの回答が増えていない。教えることの、自分にとっての大切さを知らせることが必要であろう。
 - 発言に対する意欲が不足している。発言の方法について理解させ、発言しやすい雰囲気をつくるのが大切であろう。
 - 依頼心が強い傾向は変わっておらず、自主的、積極的な態度の育成をはかる活動の計画、運営を考える必要がある。
 - 自分の考えをじゃまされたとの経験は少なくなっており、また友人のよい意見を素直に認める態度も身につけており、よい傾向といえる。
 - 聞きもらった内容を友人に聞くという態度は、(ア)にもふれたように形成されつつある。しかし、先生に聞きなおすという、重要なことが十分にできていない。指導する側として考えていく必要がある。
 - 授業は楽しく、積極的に、よく理解できたかについては、全般的によりよい傾向といえる。
 - こまったとき相談したり、相談されたりという友人関係は、よりよい方向に改善されている。
 - 友人の世話については、積極的に取り組もうとする者が増え、よい傾向といえる。
 - 学級で好きでない友人とでも一緒にやろうという傾向はみられる。しかし、どんな人とも、また、男女で気楽に話せるかについての回答から、まだ不十分といえる。
- アンケート調査の対象が異なるが、第1次の結果と第3次の結果を比較するなかで、小集団学習の効果、生徒の変容をさぐってみた。まとめると以下ようになる。
- わからないことを友人に気楽に聞けるようになる。
 - 気楽に発言できるようになる。
 - 友人と一緒にいて、勉強したり遊んだりしたいという傾向が強くなる。
 - 好きでない人とも一緒にやろうという傾向が強くなる。
 - 男子(女子)と気楽に話し合えるようになる。

(5) 実践のまとめと今後の課題

- ① 短学活に、教え合いと生活の反省を取り入れたプログラムを、各学年ごと、その状況に応じてまとめることができた。その結果、分からないところを友人に聞くという態度や、1日の生活を意識する態度は身につけてきている。教え合いの活動はかなり活発になってきている。しかし、親切に教えることができる場所までは至っておらず、教えることの自分にとっての大切さを知らせ、積み上げていく必要がある。
- ② 学級の時間や学裁の時間に小集団を利用した活動を取り入れることができた。特に各行事においては、学級で編成した班（授業と同一）を利用して積極的に取り組むことができた。それぞれの活動において、よい結果につなげることができた。ただ、それぞれの行事への取り組みだけで効果があがるのかという考え方には問題があることを感じた。それぞれの行事への取り組みにおいて現出した問題、その問題解決の活動を通して初めて、個人・班・学級・学年として高められることを実感した。
- ③ 教科・道徳の指導においては、課題の設定に留意して進めてきた。その結果、1時間ごとのポイントをしぼることができ、また小集団の活動を含めることにより、生徒の生き生きとした活動を導き出すことができた。このことから、いわゆる1時間中じっと耐えている生徒を減少させることができ、参加度を高めることができた。
道徳の授業においては、いろいろな活動における話し合いの方法の指導の結果、うまく意見を出し合い深めることができ、取り組む以前に比べ、説教的な道徳からぬけだしつつある。
ただ発言に対する意欲は不十分で、発言の方法を定着させるとともに、一人ひとりがまず自分の考えをまとめ、その意見を出したくなるような状況に生徒を追い込む方法、てだての検討が必要であろう。また、小集団学習にとって最も大切なことではないかと実践の中で考えられるようになった。このことが解決の方向にむかえば依頼心の強い本校の生徒の状況も改善されるものと考えられる。
- ④ 班編成については、男女各2名で4人の10班を原則に、意図的に編成を進めてきた。安易なくじによる編成はなくなり、教師の意図が班の編成に生かされ、集団を育てる意味においてよい方向と考える。ただ、男女の人数にかなりの差がある学年もあり、やむをえず男子班を編成しているところもある。このことがどのような方向に進むかは今後の実践で検討できよう。
学級で編成した班（授業と同一）をすべての活動に利用したほうがという点については、本校は3の(1)②で示したように、目的によって編成された班において、その班を高める指導を進めている訳で、同一の班に固執する必要はないとの結論に達した。例えば、国際理解推進のための研究班の活動や指導がそのよい例といえよう。
- ⑤ 給食当番・清掃当番の活動においては、学級で編成した班（授業と同一）を利用して学級や、していない学級それぞれで、特に問題はなく、各担任の意図が重要であり、固執する必要はないと考える。
- ⑥ 63年度の取り組みとして、小集団学習の手引きを利用して、学指2時間の指導を実施した。このことは、学校全体としての取り組みの内容を全生徒に意識づけることができたという点で効果があった。ただ、実践するうえで、その場その場での指導が必要なことはいうまでもなく、手引きをもとに積み上げ定着させていくことが大切である。
また学期ごとに、反省と重点指導内容の検討（教師）、反省と今後の課題（生徒）を実施したことは、効果的であった。今後も継続していきたい。
- ⑦ (3)④(イ)の生徒の変容のところでも示したように、良いと考えられる方向へ変容をしている。国際性豊かな生徒の育成には、人間理解、人間尊重の心の育成が必要でありその基盤としての小集団学習は効果的であったと考える。ただ、本校の取り組みはまだ不十分であり、いくつかの問題点も現出している。その中で課題と即時評価の問題は重要で、この点を含め、現出した問題点を解決の方向へ進めるべく、今後より以上に努力していきたい。

第4分科会

提案主題 自主的な生徒会活動の工夫

愛知県春日井市立中部中学校 藤城 吉雄

研究内容

1. 生徒会活動のねらいと指導方針

次に述べるねらいと指導方針をもとに自主的な生徒会活動を作り出したい研究にのぞんだ。

(1) ねらい

生徒会活動を通して、集団生活の意義を学ばせ、集団における協調と自己実現を図りながら、成就感を味わわせる。

(2) 指導方針

ア. 生徒の主体的活動を通して、お互いの立場を尊重しながら、連帯感や個々の能力の向上を図り、望ましい人間関係の育成に努める。

イ. あらゆる場面において、生徒の話し合いの場を設定し、話し合いによってでたことを吸い上げ実現化することにより、自ら生徒会活動を支えているという意識の高揚を図る。

ウ. 委員会活動・学級会活動を活発にし、自主的・積極的な責任ある活動の伸長を図るとともに、所属集団の中における存在感の育成を通して、学校生活の充実を図る。

エ. 楽しく、規律正しい学校生活の確立に努める。

2. 自主性を育てる工夫

ねらいの達成のためには、人間関係が重要な要素となる。人間関係を密にし、生徒の生徒会への参加意識・所属意識を高めるため、学級や各種委員会等での話し合いにおいてバズを活用する。これを基盤とし、次のような工夫のもと、「自主性」を育てるべく研究を進めることにした。

(1) 年間計画において

生徒会の年間行事は、学校から出されている「学校暦」とてらし、生徒会執行部に立案させ、生徒総会にかけた後実行に移すようにする。これにより、生徒会執行部は行事等の実現化、成功に向けて生徒の協力が得られたと自信を持つであろうし、責任感を持つようになると思う。また、生徒たちにも自分たちが通した案であることから、協力しようという姿勢が生まれることを期待する。

さらにやや詳しく述べれば、「球技大会」「映画会」は総会時の年間計画には打ち込まないようにし、常に生徒会に生徒の声を吸い上げさせ、

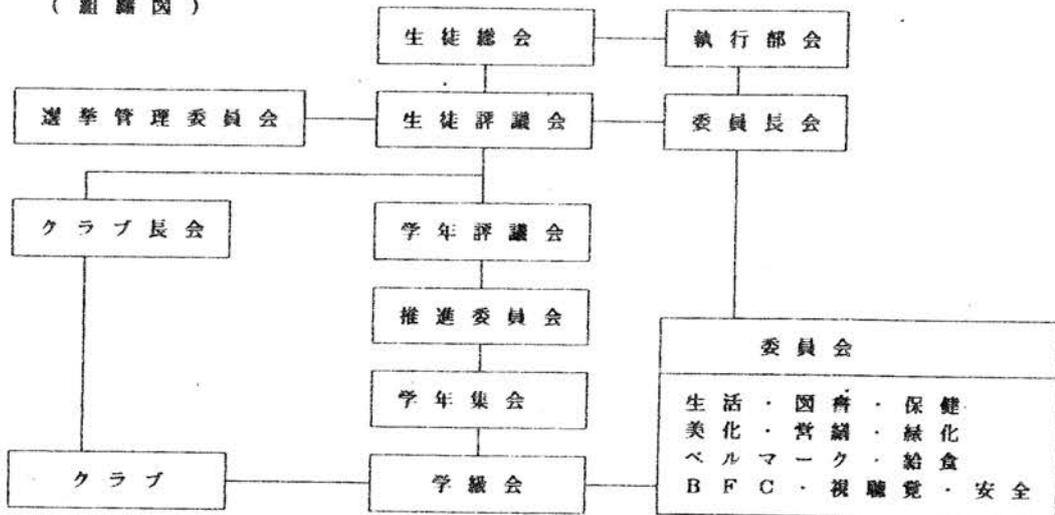
実行する意志があるかどうかを確認し、教師と打ち合せながら行うようする。

この他に執行部が実行したいと企画や学級会・評議会等で出された生徒の意見をできる限り取り上げ、実現化するようにする。

この他にも、「クラブ紹介」「クリーンキャンペーン」（地域美化活動）等のクラブ・委員会と協力した活動や「選手激励会」「卒業生を送る会」のように生徒の様々な工夫を生かした行事を幅広く行う。

(2) 組織構成において

(組織図)



ア. 推進委員会

生徒会の取り組む球技大会・選手激励会・卒業生を送る会等の行事の企画運営を、執行部・評議員とともに協力しながら推し進める推進委員会をつくる。各学級より1～2名、必要に応じて選出し構成する。この方法により、個々の生徒の生徒会活動に対する意識を高め、積極的に参加しようとする姿勢を作るとともに、一人ひとりの生徒の工夫や意見を反映させ、自己実現の機会を増やすようにする。

イ. サポートクラス

組織図には表れてはいないが、収集活動・あいさつキャンペーン等、委員会が中心になって行ってきた活動を、希望学級が受け持ち、学級の独自性や創意を生かしてその活動の推進を行うサポートクラス制度をつくる。これにより、委員会活動を活性化させるとともに、多くの生徒を生徒会活動に積極的に参加させるようにする。

3. 活動の実際

(1) 各種行事

ア. 球技大会

球技大会は、学年単位で推進委員を中心に、男子用・女子用・混合用の三つの種目の選定や人数の割り振りが考えられ、6月に行われた。本年度は1～3年まで共通の種目を一つ取り入れることになり、最近人気のある綱引きを行った。

イ. 選手激励会

7月に行われた選手激励会は、執行部を中心に推進委員が案を練り、「聖火ランナーを登場させること」「2年生で応援団を組織すること」「選手に、はちまきと必勝うちわを贈ること」が決められた。はちまきやうちわは、1・2年の学級に分担がなされた。今年度は、あいにく当日雨となってしまう体育館で行うこととなったが、会は盛りあがりを見せた。

ウ. 水泳大会

水泳大会は体育的行事であり体育科の教師を中心に行われるが、推進委員が選手決め、レクリエーション種目の選定、当日の運営等幅広く活動する。「フライングマン」(選手がフライングなのに泳ぎ続けようとするのをやめさせる役目)は推進委員が考え出したユニークなアイデアの一つである。

(2) 収集活動

地域の美化・生徒会資金の確保・生徒会や学級への所属意識の高揚のため、年度毎に総会で行うか否かを採決し、評議会で目標量や収集方法を決め、アルミ缶・古新聞・ベルマークの収集活動に取り組んでいる。

今年度の活動の様子を簡単に報告する。

ア. アルミ缶収集

ドラム缶に美化委員がペンキで着色した「アルミ缶ボックス」を各昇降口に設置し、いつでも気軽にアルミ缶が収集できるようにした。夏場には、5日ほどで4本のアルミ缶ボックスがいっぱいとなり執行部とサポートクラスの力で回収された。

イ. 新聞収集

月に1回1週間の期間行う。1学期には「全校で100メートルの高さ分の量を今学期中に集める」という目標を立てたが、地域の子供会の廃品回収と重なり、目標の4割弱の達成率に留まった。昨年までは、一人6センチの量などと目標を決め、クラス単位、班単位で取り組んだ。全員が達成できたところには生徒会が感謝状を出すことにした。

ウ. バルマーク収集

バルマーク収集は、バルマーク委員を中心に目標が決められ、評議会で審議された上で学級におろされ、キャンペーン活動が展開されている。現在は、総会で意見として出された合唱コンクールで使用するラジカセの購入を目標に取り組んでいる。

4. 考察

これらの取り組みを通して、多くの場面で生徒自身が活躍するようになった。それにともない責任感・連帯感が生まれ、生徒の生き生きとした表情がより一層多く見られるようになってきて、「自主性の育成」に関してそれなりの成果をあげたように思われる。

しかし、生徒会活動が身近なものとなってきたにもかかわらず、生徒自らが進んで生徒会活動をつくっていかうとする面はまだまだ弱いと感じられる。この点をいかに改善していくかが今後の大きな課題である。。

第4分科会

提案主題 自主的に取り組む旅行的行事の工夫

愛知県春日井市立中部中学校 石黒 照人

研究内容

1. 「集団の自主性」を育てるために

「自主性」という言葉は、本来個人について用いられることが多いが、私たちは「集団の自主性」というものをより尊重したいと考えた。

これは、「自主性」が「社会性」とともに語られなければならないのに、「自主性」だけが独り歩きし、「自分勝手に許す」というような結果になり易かったという反省に基づいている。ある集団が何か一つの目標に向かって自ら動き出すとき「社会性」が必要となり、その中で、個人の「自主性」も育てられやすいと考えたのである。また、そこに「集団で行う教育」や「旅行的行事」を行う一つの意義があると思ったのである。指導にあたっては、「集団の自主性」を育てるため、次の八つの点に留意することにした。

- ① 集団は最初「寄せ集め」的であることを心に止め、教師も含め「人間関づくり」「雰囲気づくり」を大切にする。こと。（バズの活用）
- ② 「寄せ集め」の集団に「協力せよ」といっても急には協力できない。「協力せよ」と言うのではなく、具体的な課題を与え、それを解決しようとする行動の中で協力性を育てていくこと。
- ③ 課題に向かって集団員が最初はほぼ同じ方向を向いていても、だんだんと方向がずれてきてしまうことがある。そのため、意見のまとめ役・調整役・牽引役としてのリーダーが必要でありかつ重要である。このことを集団員全員が意識し、自分たちのリーダーをもり立てていこうとするよう「雰囲気づくり」をすること。
- ④ 根幹となる目標に「人間性向上」を置く。各行事における課題は、最終目標ではなく、一つの通過点・ステップととらえること。
- ⑤ 根幹となる目標を中心に、1年間を1サイクルととらえ、各行事において目標（課題）を明確に打ち出すとともに、3年間をその積み重ねととらえた系統だった螺旋構造的な指導を行うこと。
- ⑥ 集団の所属意識を高めるため、行事等の実行に当たっては、内容に工夫をこらし、特色を出し、プライドをもたせるようにすること。

- ⑦ 1年生は3年間の基礎となる時期である。この時期に「何が大切か」を教えるとともに、自らも感じ取らせ、教師との価値観の共有を目指すこと。
- ⑧ 教師の意図が生徒に伝わるように、生徒との温かい信頼関係を大切にすること。また、生徒集団と教師集団が協力して学級・学年・学校を築いているととらえさせるため、教師も生徒と一緒に生きて生きと行事に取り組むこと。

2. 指導の実際

次に述べる行事は、各学級から選出された1～2名で構成する実行委員会を中心に活動している。

また、宿泊を伴う旅行的行事では、意義・目的・スローガンを打ち込んだ「しおり」を作り、その徹底に努めている。

(1) 宿泊学習

1年生のはじめに、市内の「少年自然の家」を使い、1泊2日の日程でA班B班に分かれて行く。一切の行動は、班長が持つ時計としおりの日程表により行い、館内放送は使用しない。

「宿泊学習」とあるように、「学習」であることを前面に出し、集団行動・レクリエーション指導・合唱指導を行い、中部中学校の1年間の大まかな流れを知らせ、本校の生徒としての自覚をうながしている。

集団行動においては、指導者（リーダー）の指示に従うことや規律を守ることに重点を置き指導している。

レクリエーション指導については、雰囲気の大切さや物事に一生懸命打ち込むことの重要さに力点を置き、雰囲気をもり上げるといふことはどういふことかとらえさせることに努めている。

1年生の段階では、リーダー・班長に対して、教師からの指示と連絡事項の徹底といった伝達の役割をあえて強く持たせている。

(2) 野外学習

2年生の6月ごろ、「愛知県民の森」において2泊3日の野外テント生活を行う。

主なプログラムは、飯盒炊さん・キャンプファイヤー・ハイキング・学級レクリエーションであり、生徒自らが積極的に行事に参加できるように様々な工夫をしている。当然ながら最も重要なのが事前の取り組みである。

飯盒炊さんは夕食時に行われ、自由献立となっている。そのため班ごとに、献立やその作り方を調べることに、材料を買いに行くこと等、様々な取り組みが行われる。

ハイキングは従来のコースも含め、「釣りコース」「温泉コース」等バラエティーに富んだコースを設定し、各個人に選択させている。

キャンプファイヤーでも工夫がされている。自分たちの「野外学習」であるという意識を高めるため、エールマスター・サブマスターを生徒で編成し、上級生が自発的に部活終了後その指導にあっている。

このような取り組みを通して、「行事は自らもり立てていくのだ」という気持ちを育てている。

(3) 修学旅行

3年生で行う修学旅行の最大の目玉は、「東京都内班別行動」である。約半日、東京都内を班ごとに、自分たちの設定した見学地をまわり、旅館にもどってくるというものである。途中、5箇所程設けられた「チェックポイント」のうち1箇所を通過することになっている。

見学時間や行きたい所の個人的思惑が絡み合い、事前の話し合いが活発に行われる。また、旅行社の方と班員で計画の検討をしているが、当日その通りにいかなくなったり、ハプニングに出あったりといったことが起こり、その度に解決のための努力がなされる。この様に修学旅行は、各個人の葛藤や各自に切迫した課題があるとともに、人間関係の大切さを学ぶ要素も多くあり、人間的成長を図る貴重な機会である。

(4) 遠足

1学期に行われた宿泊を伴う旅行のでき、2学期の生徒の状態により、補正的、フィードバック的な要素をもたせている行事である。また、宿泊を伴う行事にくらべ、学年の特色がよく出せる行事である。

1年生は大嵐で有名な静岡県の「中田島砂丘」に行っている。大嵐の揚がる様子を見学したり、班ごとに制作した凧を揚げたりする等の企画を立てて取り組んでいる。昨年は砂丘に注目し、「砂の芸術」に取り組んだ。

2年生は岐阜県関市や愛知県知多郡南知多町にあるフィールドアスレチックに行っている。「とにかく動け、迷っても動け、やったら喜べ」などといったスローガンのもと、中だるみの学年と言われることを吹き飛ばすべく、巨大迷路・カラオケ大会・縄跳び大会・座禅等、年度毎に工夫されたイベントが行われている。今年は修学旅行の準備も兼ね、「岐阜市内班別行動」が企画されている。

3年生は旧中仙道の「妻籠・馬籠」へ行っている。歴史に親しむ意味を含め、わらじを履いて行ったり、班ごとに「水戸黄門衆」「白虎隊」等とテーマを決め、時代的衣裳を作り、それを着て歩く等の試みがされている。

3. 考察

今まで述べてきた行事においては、バズを活用し、実行委員・学級の班を中心に行ってきた。

これらの行事活動は、生徒たちに通常の生活では体験しにくいことを経験する機会を与え、生徒と生徒、生徒と教師の間の人間関係に深まりを与え、とともに、「自主性」「社会性」を培うよい機会となっている。

現在抱えている一番大きな問題は、「行事が成功し、生徒が成就感を得ても、そこで学んだことが日常生活に反映されにくい」ということである。この点に関する改善策・対策が大きな課題である。

第5分科会

学級経営・生徒指導（小学校）

司 会 者	江木 洋治（土岐市立泉西小学校教頭） 岩田 鎮人（春日井市立高座小学校教頭）
助 言 者	鹿内 信善（北海道教育大学助教授） 小森 孝彦（京都女子大学助教授） 小島 幸彦（土岐市立泉西小学校長） 石部 清和（滋賀県湖東町立湖東第三小学校長） 後藤 昭廣（寝屋川市立楠根小学校長） 坂 美雄（愛知県海部郡蟹江町立蟹江小学校長） 水野 明（春日井市立石尾台小学校長） 稲山 幸博（春日井市立鳥居松小学校長）
提 案 者	牛尾 英俊（姫路市立飾磨小学校教諭） 田川 正樹（春日井市立玉川小学校教諭） 杉山あさ子（春日井市立小野小学校教諭）
記 録 者	長縄 秀孝（春日井市立篠木小学校教諭）

第5分科会

提案主題 報・連・相を密にした生徒指導

— 1枚岩をいさして—

兵庫県姫路市立飾磨小学校 牛尾 英 俊

研究内容

1. 現状

①校区の様子

播磨工業地域の一部を校区に持つ本校は、姫路市との合併前は、飾磨市の商工業の中心となっていた。江戸時代より港町としても栄え、最近ではマンション・新築住宅も増えて地域の人々には、都会意識が強い。しかし、漁業や海上交通など港を中心に栄えた地域、農業を中心として栄えた地域、そして、商業を中心として栄えた地域と大きく分かれるため、校区の一大行事の祭りも3つに分かれ、自治会・住民の意思統一が十分と言えない面もある。

②児童の様子

校区内に、30余りの学習塾があり、4年生以上になると学習塾・家庭教師についている者がかなりいる。(6年59.6%、5年48.5%、4年19.3%)

しかし、親の教育熱が高い割に、子どもの学習熱は高いとは言えない。「友達がいるから」「親が行けと言うから」と割り切っている。

このような現状の中で、昨年1年間における問題行動は、次の通り。

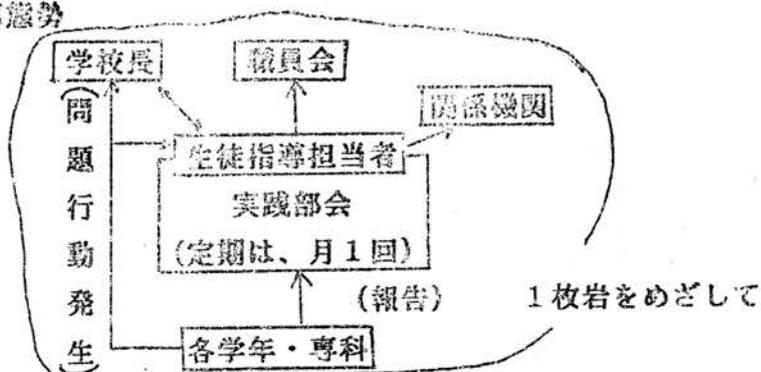
	昨年度	本年度1学期
万引	男18 女3	男3
登校拒否	女1	0
喫煙	0	男6
窃盗	男4	0
持ち出し	男3	0
いじめ	男1	0

※登校拒否傾向にある児童は、他に4名いる。

校内における児童は、異前体育の指導を通して、集合時の私語が減少しつつある。また、チャイムの合図での入室が早くなったが着席できない児童もあり、指導中である。

紙飛行機等による紙屑散乱や、数人での宿談の増加は、児童の様子が悪くなっている現われであるが、今のところ見られない。

2. 指導態勢



○各学年内の情報交換と意思統一

○実践部会
 ・定期は、月1回第3金曜日
 ・その他必要に応じて随時に部会

○問題行動発生時

・各学年内
 ・生指担
 ・学校長

報告・相談 → 親へ
 → 児童の指導

○職員会へ報告

・全職員が現状を理解
 ・全校で再指導が必要な時は、一斉学級会・臨時児童会

○その他

・校区内補導
 ・家庭訪問

* 月目標励行の様子

* 情報交換

* 町行事の補導について

* 担当者会の報告

3. 働きかけ

① 飾磨地区の意思統一

姫路市の小学校生徒指導担当者会は、5つの地区に分かれており、飾磨地区10校の1つが、本校である。隣接した10校ではあるが、校区の人々の考え方に違いを見せている。しかし、反面塾通い等を通して児童間の交流が盛んであることは、見逃せない事実である。そこで、学期に一度実施されている地区別担当者会において、次のことを話し合う。

1. 理事会からの連絡事項

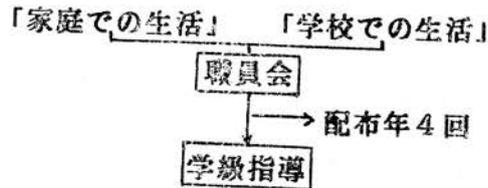
2. 情報の交換

3. 統一指導内容

・帰宅時間、禁止事項、奨励・啓蒙事項など

②児童に対して

校区の実状と、担当者会の話し合いを元にプリントを作成。



また、道徳教育を充実するため、次のことを職員間で意思統一。

- 作成した年間指導計画を実施するために
 - * 週1回の道徳の時間の確保
 - * 長短の学級指導時間の利用の充実
- 指導内容（全体or個人）の記録

さらに、月目標を各教室に掲示するとともに、朝・給食時に放送。

③保護者に対して

学校行事として

日曜参観を利用して講演会を開く

プリントにて

- ・親の育児態度と形成される子どもの人格及び起こりうる行動についてプリントし配布した。
- ・エアガン・ガス銃について、「買わない、貸さない、使わない」の3無運動を実施。学級指導と家庭へプリント配布を実施し、一掃することができた。
- ・チョコシールについては、万引・窃盗・交換によるトラブル等が発生したので、学級指導と並行して新聞記事と本校においても同様の事件があることをプリントし、保護者として子どもの行動や、持ち物の把握を呼び掛ける。
- ・その他に、登校拒否・万引等の防止にかかわる新聞記事や講演で研修した事などをプリントし配布する。

問題行動を学級担任より受けた時は、必要に応じて親へのカウンセリングを実施する。

④中学校との連携

本校の卒業生は、約1/5が錦磨東中へ、約4/5が錦磨中部中へ、約10名が他の中学校へ進学する。



上図の通り、飾磨中部中学校へは、本校の卒業生しか進学していない（転入生）。小中で指導内容が異ならないよう、話し合いの中で、小中共通の指導努力事項を決定。

（昭和61・62年度）

- ・私語をなくす。
- ・チャイムの合図を守る。
- ・持ち物に名前を書く。
- ・礼儀正しくする（挨拶含む）
- ・持ち物に名前を書く。

（昭和63年度）

- ・忘れ物をしない、チャイムの合図を守る。
- ・ヘルメットを着用する。
- ・集団訓練を利用し規律を正す。
- ・元気よく挨拶をする。
- ・持ち物に記名する。

生徒指導担当者間の連絡を取り合っている。その他、小中職員間の交流会や、懇談会・授業参観を計画中。

⑤その他

- ・市教育委員会の指導を適時受ける。
- ・医師との相談。
- ・警察との連絡・相談。

4、今後の課題

小学校内の職員が、1枚岩となるだけでなく、中学校・地域の人々との連携つまり、生徒指導に関しては、中学校々区全体が強固な1枚岩にならないといけない。地方の都市化が進むにつれ、より要求されることだと思う。中学校と連絡を取り合い、今後、次の点を充実したい。

- ・小中職員間の交流
- ・親への啓蒙活動
- ・万引があっても学校・家へ連絡が来ない店→どう啓蒙するか

班長のいない学級へ

——楽しく知的なゲーム・イベントをとりいれて——

愛知県春日井市立玉川小学校 田川正樹

実践の要旨

一部の限られた子どもだけが活躍するのではなく、様々な子どもが入れかわり、立ちかわり活躍する学級（班活動でいえば、固定された班長のいない、場面に応じてだれかがリーダーになる）をめざして、楽しい知的なゲーム・イベントをとりいれて、その中で「全員参加を、一人ひとりを生かそう。」とした試みです。

1、研究・実践のあゆみ

(1) おしゃべり学習に終始

新任～S40年代

班で勉強すると、みんな知らない話をしたり、ふざけたりするそれに、遊びの話をしたりして、注意しても黙らないで、注意した人もあそんでしまう。……

ぼくは班で勉強することがきらいだ。 (班ノートより)

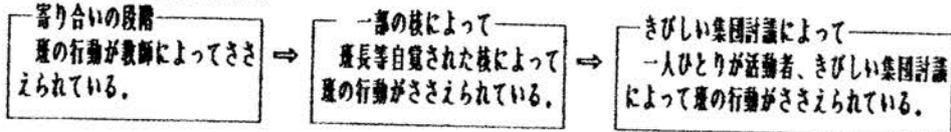
- 小集団にすれば、何か意見が出るだろう。自然と協力するようになるだろうという安易な考え。

(2) 点検・班競争・追求をしくんで

S50年代前半

バズがいっこうに前進しない、まとまらない現実におつかり、全生研スタイルをとりいれる。

① バズの発展段階



(班が次の班をそだてる)

② 班づくりは班長で

班長立候補制にし、自分をPRさせた後で選挙で班長決定。各班長が、一人ひとり理由を述べながら自分の班のメンバーを選んでいく。後に残るほど困った人ということになる。それでも力のあると自負している班長は、一番にそうした子どもを選ぶ場合もある。教師によって、そうした子どもを選んでいくことを指導され評価されているからである。

いずれの場合もほぼこうした手順で班を決めた。

③ 点検、班競争、追求をしくんで

(例1) 係を班にうばいあわせる。

「○班は、A子さんをのけものにしたり協力できていません。
△係をやる資格がありません。わたしの班にやらせてください。
い。」

(例2) 級友に乱暴するF君を学級会で追求する。

A雄：「私をどうしてけるのですか」

B子：「みんなに迷惑をかけていると思わないのですか」

.....

「先生の学級経営は、クラスのまとまりは確かによくなっているが、
中の子どもたちは、強いられていて生き生きしていないのでは？」
と、助言してくださる先生もみえたが、残念ながら聞く耳を持たず、
ずっと後になって気付いていくのだが・・

このスタイルの指導は、（私の指導力不足かも）

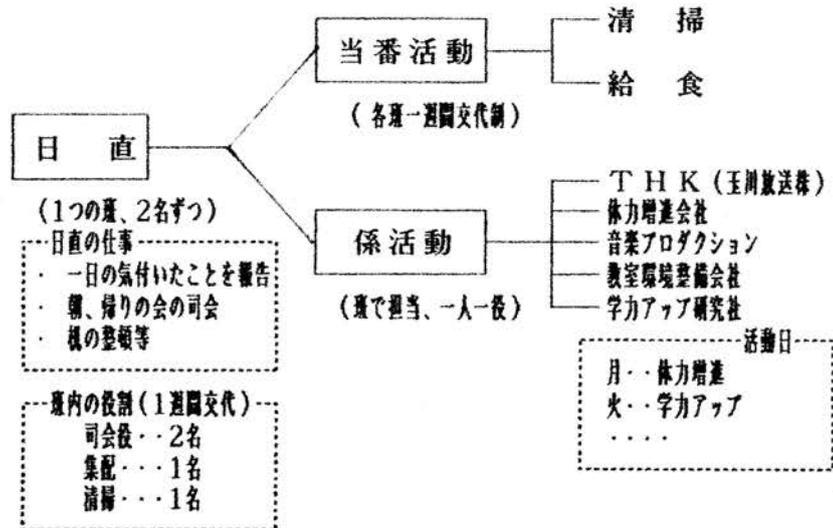
- 班相互の協力よりも、「やっつけた」「やっつけられた」という敵対的な関係を育てていた。
- 友達の欠点に目をむける、自分に甘く、他人に厳しい子どもを育てていた。

2、一人ひとりを生かす学級へ

S50年代後半～

小集団を編成し学級づくりをすすめていく点では、従来の実践とかわりないが、班競争のゆさぶりによって、小集団の活発化をはかったり、子どもたちを管理することに利用するのでなく、「一人ひとりを生かす」手だてとして編成する。

(1) 学級組織図（5年 20人、5班編成）



② 楽しいゲーム・イベントをとりいれて

本校は、全校児童141人という小規模校である。幼稚園に入学した5才児から卒業するまでの8年間、クラス替えすることなく、同じ学級で過ごす。仲が実にいい。目が行き届く。

しかし、足の速い子はK君、絵のうまい子はYさん・・・と序列が固定されてしまって、やる気が感じられない。

本年度は、上記学級組織をベースにして、子どもが熱中するゲーム・イベントを計画的にもちこみ、その中で、「やる気を育て、一人ひとりを生かす学級づくり」を試みている。

① ゲーム・イベント活動の年間の見通し

学期	1 学 期	2 学 期	3 学 期
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 仲間意識を育てる。 ◎ やる気をおこさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 一人ひとりの意外な面をひきだす。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 集団でつくりあげる。
活 動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校横断クイズ ・ 「県」ジグソーパズル ・ 百人一首大会 ・ 飛び箱(4段)を全員跳べるようになる。 ・ みんなでボン(長縄) ・ 遠足さがし 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 物知りゲーム ・ 得意物大会 ・ いもまつり ・ 百人一首大会 ・ 玉野横断クイズ ・ 水泳(25m)全員泳げるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ソーラーバルーン製作 ・ 風雲「玉野城」 ・ 百人一首大会
学級ギネス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 紙ちぎり ・ 落語「寿限無」 ・ 「県」ジグソーパズル ・ 缶積み 	<ul style="list-style-type: none"> ・ なわとび ・ 一輪車乗り ・ りんごの皮むき ・ 腕ずもう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地名あて
学校行事	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小運動会 ・ たてわり遠足 ・ 野外学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ たてわり飯ごう炊飯 ・ たてわり水泳大会 ・ 運動会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級紹介 ・ マラソン大会

- 一部の限られた子どもだけでなく、たくさんの子どもが活躍できるもの。
- そのためには、知的な裏文化を多くとり入れる。

<学校横断クイズ>

学校に関することは何でもネタにして楽しもうというクイズである。

第1回目（教師問題作成）

問1 玉川小学校は、今年開校何年目ですか。

ア 30年、イ 40年、ウ 50年

問2 校舎内には、階段は何段ありますか。

ア 104段、イ 124段、ウ 144段

など5問（略）

勘に頼るしかないような問題もあり、授業では活躍できない子どもまでもが生き生きとして、「この次ほくに問題つくらせて」と。

子どもが作った問題

○ 開校以来校長先生は何人かわったですか。

○ 校内に消火器は何本ありますか。

...

このクイズは、2学期には「玉野横断クイズ」として視野を広げたい。

（紙面の関係で他のイベントは当日説明）

3、まとめと今後の課題

「人と協力できる」「一人ひとりを生かす」というバズ学習の理念を創りだすべく、「楽しい知的なゲーム・イベントをとりいれて」の側面から追求してみた。

以前実践していた減点主義に比べれば、生き生きと目を輝かせている子どもはまちがいなく多い。授業では陽のあたらなかつた子どもがリードしていることもしばしばみられた。特に「一輪車乗り」などの裏文化においては、その傾向はいちだんと強い。

「班長によりかかって学級経営を展開」「民主主義は班長を育てるところから」と思いこんでいたことからすると、ずいぶん私もかわったものと思う。こんな私の意識変化はあっても、「一人ひとりが何らかの場面でリーダーになって活躍する」ところまで、実際に子どもを育てあげるのは難しい。

今の段階では、すこしでも授業をささえる学級づくりになっているなら良しとしたい。

生活をひらく学級経営
小集団(班・係)を核とする学び方の指導
——話し合い活動を基盤として——

愛知県春日井市立小野小学校 杉山 あさ子

1. はじめに

私は、子どもたちに学校が楽しいと思ってほしい。自分たちの生活を自分たちの手でできひらき、互いに認め合い助け合いながら、全力でぶつかっていくことのできる子、そして、そんな毎日に喜びを感じる「生きる力のある子」を育てたいと願っている。

「生きる力のある子」とは、目標を持って生活する子であり、自分たちの生活を自分たちで形成し、改善していける子でもあると思う。

子どもたちの、生活をひらいていく力、日々の生活をたがやしていこうとする意欲とそのため力——学ぶ力を育てていきたい。

2. 基本的な考え

学級経営における指導とは、生活と授業を統合する学び方の指導であると考えている。

子どもたちは、学級に存在する様々な人間関係を通じ、それらを基盤として、多くのものを学んでいる。学級における学習は、教師と児童、児童と児童との間の多様な相互作用を含む全体的な過程であり、その指導は、より効果的な相互作用を生み出すものとして、意図的、系統的に組織される必要がある。

学習することの目的を持ち、興味・関心を持って、自ら学習することの喜びを味わわせる。そのためには、児童が、能動的に動くことができる学習活動を生み出すこと、自ら生き生きと活動する生活や授業を児童と教師が創造していくことが必要である。児童理解に基づく指導システムの確立が急がれるべきであり、目的を明確にして学習活動を組織すること、どのような学習活動を何のためにさせるのかを明確にし、できる限り、能動的に活動する機会を多く与えることが大切だと考える。

個と学級集団をつなぐステップとしての小集団——班・係の活動に着目したい。そして、学力を培う土壌としてのバス活動を重視したい。

3. 研究の内容

(1) 指導計画

ア. 導入段階 ……

教師が先導して、班・係活動のあり方を知らせる。

* 班・係活動の魅力(楽しさ・おもしろさ)を味わわせ、集団活動の重要性

に気づかせる。

- ・ 活動内容を生活に密着したものにさせ、活動のねらいが自らの生活の向上にあることを知らせる。実態に基づき、基本的生活（学習）習慣の指導・徹底を図る。
- ・ 教師が活動計画の立案から、積極的に参加・成功させる。
- ・ 点検活動は、良い面を認め、それを全体に伝える形で継続して行わせる。

イ. 形成段階 ……

教師の助言を受けながら、学級生活の経営を児童自身の手で行い、本来の活動に近づける。

- * 班・係活動の厳しさを学ばせることにより、集団活動の意義を理解させる。
 - ・ 学級内組織を明確にし、話し合い活動を充実させることによって、学級執行部を中心に、相互の点検・援助のできる学級集団の育成に努める
 - ・ 活動過程を中心とする評価を通して、活動の意義を理解させ、生活を改善・向上させようとする意欲を育てる。

ウ. 発展段階 ……

自分たちの活動及び学校生活全般をふり返らせ、問題点を見つけ、自ら解決する方法を見出し、活動させ、本来の班係活動にする。

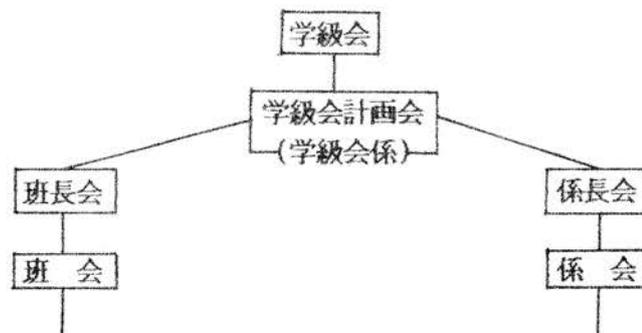
- * 班・係活動を、自主的な集団活動として、児童らの手で発展・充実させる。
 - ・ 直接的な指導助言は、できるだけ控え、活動が独善的・排他的にならないように見守る。

(2) 手だて

ア. 学級内組織を生かす。

イ. 話し合いの場を効果的に設定し、計画・評価を中心とするカード（プリント）によって活性化を図る。

学級組織



希望優先

班（4人編成1人2役）……話し合いで……係（学級構成員各1人1役）
決定

生活	学習
生活	国語
連絡	社会
給食	算数
学習	理科

生活	学習
学級会	国語
新聞	社会
給食	算数
保健	理科
掲示	音楽
美化	体育
図書	その他

話し合いの場

場	内 容	方 法
朝の会	今日のニュース、学級会の議題	班（司会・発表）、学級会係提案
授 業	前日の課題確認、発表、テスト	各教科班長司会、自主学习
20分放課	火-班長会 水-係長会	班会・係会で出た議題を各1程度
給 食	月-班会 火-係会	班・係で議題を出し合う
清 掃	清掃の反省	班で話し合い、清掃班長（輪番）
帰りの会	1日の反省	班で話し合い反省用紙に記録する
授業後	水-学級会計画会	計画用紙・個人メモ・原案用紙作成

4. 実践の結果と考察

(1) 結果

- ア. 子どもたちが明るく、活動的になった。熱意を持って話すようになり、誠実に聞くようになった。自分なりに考え、自分とみんなのために喜びを持って動くようになった。
- イ. 話し合う内容が充実してきた。現在の子どもの話し合いは、生活の中から問題を見つけ、それを自分たちの手で改善していこうとする意欲が感じられる。個人の努力を認め、励ます思いやりが生まれた。実践化へ向けてのパワーを感じさせる。

(2) 考察

ア. 指導計画について

3段階別の指導計画は、各段階ごとに求める児童の姿をより明確にし、次への移行を円滑にするばかりでなく、フィードバックも容易にできることは、これまでの実践で、明らかになった。適切な指導（手だてに対する点検、修正）実践を積み重ねることによって、その効果が増してくることも確かめられた。

特に班・係活動は、学級の創意工夫面が大きい魅力ある活動ではあるが、反面、

過去の経験によって生じる個人差も大きいので、導入段階においては、「明確に伝える（教える）こと」が最も必要であると感じた。

子どもたちに、担任としての学級に対する思い、子どもたちへの願い、その意味（必要性）を、明確に語り、理解させ、そのための方法・手段を模倣させたい。子どもは模倣し、それを繰り返す中で、個性を育み、自主性を培っていく。

個を対象とする基本的な生活（学習）習慣の指導に力を入れたい。未知なる世界の前に立つ導入段階には、効率のよい的確な指導を継続し、子どもたち一人ひとりをできるようにしてやらなくてはならない。そして、みんなでやることの喜びを教えてやらねばならない。「できた。」「面白い。」「楽しい。」こそが、次への意欲となり、形成段階における質の向上へとつながると思う。

集団で取り組むことの喜びを知った子は、そのために力を合わせることでできる子である。

また、児童相互の教育力が生かされる形成段階に注目したい。この段階で増えてくる自主的フォローマンとして活動する児童の姿に、形成段階で、児童が「やってよかった。」「自分たちのやっていることは、価値あることだ。」と実感することによって生まれた高次の喜びこそが、求める学級、個を基盤とする自主的な学級集団を創り上げるエネルギーとなることを強く感じた。

教育は、子ども同士で育て合い育ち合う部分も多く、その部分を児童自身の手でより大きく育て広げていってこそ、本来の自主活動であると思う。教師は常に実態を把握し、目標に沿って活動を点検・修正していく必要がある。

イ. 手だてについて

組織を見直し、活性化のための手だてをうつことによって、活動の省力化ができた。子どもたちの動きやすいシステムになった。整備された組織の中で、誰が何をやるのかが明確になり、活性化の手だてをうつことによって、どのようにやるのかがわかってきたからだと思う。

5. 成果と今後の課題

- (1) 成果 … ア. 活動内容を児童の生活の中から生み出し、児童の手で育てていくことができた。
イ. 組織作りが進んだことによって、児童一人ひとりの活躍の場が広がった。
- (2) 課題 … ア. 発展段階における指導内容の充実・細分化を図る。
イ. 活動内容については、明確な目的意識の下、評価・反省を生かした内容を継続し、質的向上をめざして、精選・充実の方向で、そのための手だてをさらに開発・改善していく。

6. 終わりに

変容する子どもたちの姿に、「子どもを育てることは、子どもが育ち、子どもが育て合うことだ。」と教えられた。「なぜやれないかと問う前に、なぜやらせてやれないかと問うべきだ。」との思いが深まる。生活を共にする仲間として、信頼を寄せられる担任でありたい。子どもたちにとって、誠実な教師でありたいと思う。

第6分科会

学級経営・生徒指導（中学校）

司 会 者	堀田 孝夫（春日井市立鷹来中学校教頭） 加藤 孝史（春日井市立西部中学校教頭）
助 言 者	永井 辰夫（稲沢女子短期大学教授） 石田 裕久（南山大学助教授） 中野 靖彦（愛知教育大学助教授） 越智 昭孝（広島県立広島高等学校教諭） 清水 快雄（瑞浪市立瑞浪小学校長） 松本 重雄（春日井市教育委員会指導主事）
提 案 者	本多 弘尚（土岐市立泉中学校教諭） 古賀 直人（春日井市立鷹来中学校教諭） 武山 春雄（春日井市立中部中学校教諭） 伊藤 富夫（春日井市立中部中学校教諭）
記 録 者	可知 達也（土岐市立泉中学校教諭） 堀場 正美（春日井市立鷹来中学校教諭）

第6分科会 バズを核にした学級作り

岐阜県土岐市泉中学校 本多弘尚

□ 集団作りにおける願い

本校の教育目標	実力のある		民主的実践人	の育成
	豊かな心	}	協同の目標として (目あひ作り)	
	たくましい心身		を身につけることを	自分を生かしながら (自分作り)
	確かな学力			みんなと助けあって (仲間作り)
自分を伸ばし、よいグループ、よい学級、よい学校、よい社会を作る。				

本校生徒の姿の問題点として、学習になかなか適応できなかつたり、掃除をやらなかつたりして、集団生活の中で自分の果たすべき責任や努力をしようとしていない生徒がいる。また、仲間にはたらきかけようとせず、自分本位で打算的な行動しかとれない生徒もいる。さらには、生徒同士の希薄な人間関係の中で、仲間のよくない行動に妥協してしまつたり、同調してしまつたりする生徒さえいる。

私たちは、そのような生徒に対して、ときには生活指導、学習指導的立場から、ときには教育相談的見地から個別指導にあたり、学校生活になんとか適応させようと努力をする。それは生徒を指導するにあたり、有効な手段となり得る場合もいくつか経験してきているし、また生徒に願いを伝え、実行してくれることを信じて行うわけである。

しかし、一人ひとりの生徒に細かく目の届いた指導を行う、あるいは、一人ひとりの個性的な能力を育てるということは、生徒たちを一人ひとりバラバラに切り離して指導することだけでは不十分であると思う。社会的、集団的な存在として生徒をとらえ、社会的、集団的存在の中で、生徒の人格や個性を認め、生かしていく教師の指導、配慮がなければならぬ。それは、生徒一人ひとりの人格や個性が認められ、生かされていく学級集団が作られて

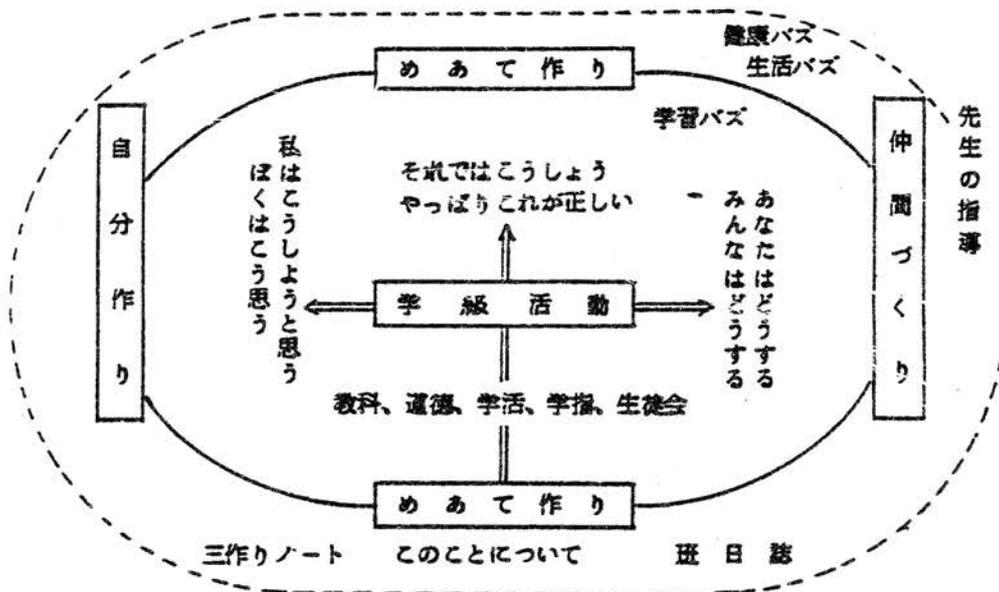
いくことであると思う。集団作りは、そういう「個」と「集団」を統一し、一人ひとりを鍛え、生かすことにより集団が高まり、集団にてこ入れすることにより一人ひとりが高まるものとなるような取り組みであるといえるのではないかと思う。「個」と「集団」のかかわりの中で、一人ひとりを生かし、仲間に認められ、仲間へはたらきかけていく集団作りをめざすことが願いである。

② 集団作りと班

生徒にとって最も身近な集団は、班である。生徒が集団を認識し、自覚するには、具体的な事実がいる。班を作ることにより、班と自分、自分の班と他の班、そして自分の班と学級全体等というように、班という集団とかがわらせながら、具体的事実を通して「個」を育て、集団についての意識を高めることができる。本校ではこれを「三作り」として、

- ① よりよい生き方を創り立していくことについて (目あて作り)
- ② 自分としての考えを持ち (自分作り)
- ③ みんなの意見をきいて、高めていく (仲間作り)

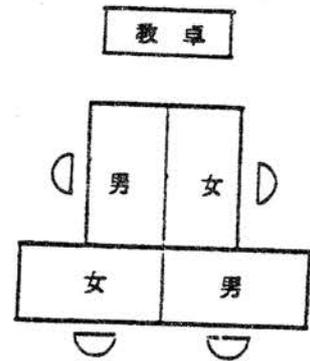
ことを学校生活の場ですすめていくこととし、集団作りの基本的な考え方をしている。



③ 学級作りとバス

(1) 「生徒バス」、「給食時のバス体形」において、バス体形について基本的なことから学ぶ

- ① 机と机を、きちんとつけ、各班員が互いに向かい合えるようにする
- ② 合図から 5つ数えるあいだに全員がバス体形になるようにする。
- ③ (給食前) 4時間目終了のあいさつと同時にバス体形にし、給食ナフキンをいいてから、手を洗いにいく。
- ④ 班員の役割をはっきりさせよう。



班長

MMでの各係の動きを点検
 授業での学しの呼びかけはバ
 給食での健しの行動はバ
 清掃時の空しの働きはバ

◎ 生バスでの班長の働き評価
 ○ 生バスで良く働いたリーダーの評価

学し

授業 一分前着席
 私語注意
 挙手の呼びかけ
 バスの進め方

◎ 黙考音 姿勢
 三作リ十点検

○ 生バス 学しの働き評価

生活し

登下校時、服装・頭髪はバ

◎ 清掃、とりかかり
 頭おおい
 役割のまっとう
 無言

○ 生バス 生活しの働き評価
 日通活動の評価

健し

◎ 配膳 43分着席よひかけ
 50分配膳点検
 15分食事終了

休み時間 校舎内マナー

○ 生バス 健しの働き評価

(2) 「生健バス」を 自分たちの生活を見つめる場として、生健バス
の中にバスを位置付け

流 れ	リ ー ダ ー	メ ン バ ー	メ モ
○開会のことば	○生活部長は前に出て机列をバス体形にして生バス開始を宣言する。	○生活リーダーを中心にすみやかに体形をかえる。	
○班バス	○生活リーダーは班の司会をかね、自分たちの班をよくするという共通の願いの上に立って話し合いをすすめよう。	○きょうのめあてが守れたか。反省項目についてはどうかを互いにきびしく点検しあい、集計しよう。	
○全体バス開始	○日直は前に出てみんなを注目させよう。	○グループ内で出た問題の中でクラス全体に関係したものをだしクラスの向上をめざして討議しよう。	
○点検項目についての反省	○専門部委員や三部長は生活の中からの反省、点検結果を発表し、話題をなげかける。	○今日の反省項目に従って話し合おう。	
○役員からの連絡	○それぞれの会合での決定事項、その他連絡したいことを発表しよう。	○連絡の中でわからないことがあれば質問し、重要なことはしっかりメモしておこう。	
○日直からの点検	○日直として気づいたことを発表しよう。		
○日直への逆点検	○日直としてのつとめをしっかりと果たしたか反省しながら意見を聞こう。	○日直としての勤めが充分でなかったら、理由をただそう。	
○閉会宣言	○日直は閉会を宣言する。 司会者は閉会宣言をしよう。	○起立し、挨拶をかわそう。	

④ 一学期の学級作りと バズ

一学期の重点

グループの活動を核にした学級活動を重点とし、グループの所属感を高め、共存の感情を育てる。



○ 願うグループの姿

- ・1つの活動に対し、共に活動し、共に活動を見つめ、共に考え工夫し、共に高め合えるグループ
- ・形式的な働きかけのみにとどまらず、内面的につなかりか持て互いに深め合えるグループ

○ グループの成長に願う姿

- ・グループを行動する意義を理解し、1人1人が成員である意識が持てる
- ・1つの活動に対し、共に意見を出し合え、活動する中で注意し合え、励まし合え、共に高めようとする
- ・互いの長さに目を止め、互いを理解し合える。

★ グループに対する生徒の意識と活動の流れ

月	活動内容	グループに対する生徒の意識	指導
4月	グループ作り	グループ作りの意義として、 (1) 和をつくるために、前のクラスの子どもとは一掃にならない (2) どのグループも同じように活動できる (3) 授業の時に教え合いができる	グループ作りにおいて、1人1人の思いを確認させる。 ・新学年でグループ作りの意義を正す
	グループのめあて作り (グループのスタート)	グループに対する願い ① 明るさ・楽しさがあり、話し合えるグループ ② 色々な活動や個人の仕事を協力し合えるグループ ③ 教え合いのできるグループ	自分のグループに対する思いをグループに投げかけさせるなか、めあてを作らせる ・学級として各グループの活動を確認させる
	活動作り リーダー決の活動内容の理解	グループに対する期待感、自分としての働きかけの意欲があり、満足も理解行動で取り組むとする	

5月
6月
7月

遠足・班行動
↓
遠足の反省会
↓
修学旅行の班行動計画
↓
修学旅行・常時活動
↓
クラスマッチ
↓
常時活動

(1) 共に最後まで班行動できて良かった。
・～君が指示してくれたり、共に助け合えた
・苦しい時に声をかえ合えた

(2) ～君(特選生徒)が班行動してくれないので、いやだった。(一緒に行動することへの不満)
・いくつかの班かかちまわって、たまたま、男子が別の班の子と行動し、ただ一緒にいたけれど

(特選生徒の自分勝手な行動や、グループ内の男子女子のかかわりあいの薄さが目立った)

・1人1人の意見を受け入れたから、行動の計画を立てる中で、互いの頑張りや意気込みを見られるようになり、グループ内のムードも良くなった

(修学旅行に向けてのグループ行動の意識は高まってきたが、学校生活におけるグループ行動がしかりとできていない事に不満をもつ生徒が出てきた)

↓ 修学旅行

・箱根の班行動が遠足以上の班行動より、活気あるものになり、班内の成員どうしの仲間意識、困った時に助け合うなどの行動化にも発展し、班として、学校としての共存意識が高まった

↓ 学校生活

・清掃活動が面白くない、注意してもらえない、入会
・給食場で重いものは任せにして、楽なものばかり運ぼうとする
・目録活動があるにもかかわらず、しかりとできていない
・生入りの時に、何も意見を出してくれない

★行事面という一面の楽しさにかかわる行動に対しては意識的に励まかけ合え、高まるとは、継続的にやれることとする
常時活動面では、リーダーに対する不満や、仲間に対する不届感が出はじめた

(補) ・グループ内で本当に相手のことを考えた、厳しい注意、励ましができる。
・グループの一員として自分が何かできようかと考えてみる

・遠足に向けて班行動をやりきろうと意識をつける

・遠足の反省会を班行動の問題点や成果を出させ、修学旅行に生かさせる

・バスの機会を利用し、1人1人の班行動の思いや意気込みを出し合わせ、班に対する意識や役割りを考えさせる

・行事面だけでなく、常時活動を見つめさせる

・修学旅行での成果を学校生活に生かすよう意識をつける

・常時活動におけるグループの問題点や不満を出させ、1人1人の分組における自覚と責任や、互いの協力かけ合いの必要を生徒と共に考える

・グループに対する個人のかかわり方を促して意識させる

第6分科会

わかったら、手を挙げてみよう、言ってみよう。
—— 参加度の高い授業へのアプローチ ——

愛知県春日井市立鷹来中学校 古賀直人

はじめに

私のクラスのヒサシ君は宿題や提出物忘れが多い生徒です。わたしも親も注意しますが、うまく行きません。しかし、タカシ君の一言がヒサシ君を変えてしまいました。「あんまり、さぼらんときゃあよ」たった一言だったそうです。そんな素晴らしい力が、もっと学級の中で生かせないものだろうか。わたしは、そういう立場で、バズに接しています。

研究内容

- 1、小集団を基盤とする学級経営（3年前と現在の心境）
 - (1) 3年前、学年全体で強力に取り組んできた。学年会が担任と学級をぐいぐい引っ張っていく。そんな中で一担任として多くの事を期待し、・・・あるべきだと考えていた。

例：・合宿訓練でのバズ学習の練習
意義、話し方、聞き方、司会、班長、班ノート
・STでの生活反省、助け合い学習
・各教科、意図的なバズ学習の導入
・リーダー養成
・学級の公開（ST、係活動、掲示物・・・）
うまくいったもの、そうでなかったもの、いろいろある。

・・・なければならぬの心境

- (2) 現在も、学年としては小集団を取り入れた学級経営を行っているが、学年会が各学級経営の受け皿的な存在となっている。統一事項も少ない。だが情報交換は活発。

こういうこともやれるのではないかの心境

堅苦しさ、上滑りのイメージから抜けきれなかったこと、自分自身の指導力のなさを反省して・・・現在のクラス1の1では、話し方や聞き方などの規則的な指導はほとんど行っていない。小集団を活用している取り組みは、係活動、ST、班ノートだけである。

一人もいいけど、仲間がいてよかったと思うことだってたくさんあるぞ。

気軽に話ができればいいんだよ。

仲間はすごくたくさんの事を教えてくれるよ。

こういうことを感じてくれたらなあ。という気持ちである。これで、いいのだろうか？

2、授業態度を改善しようとする試み

班ノート

ア、気になること

5月の中旬あたりから、気になることが出始めた。

5月17日 リカ（成績：トップクラス）
・・・私は授業でわかっていても、手を挙げないことがほとんどです。だいたい私達のクラスは手を挙げる人が決っています。・・・
・・・先生が質問したたびに挙げる人を、私はいつも勇気があるなあと思っています。あまり大きな勇気ではないけど、出せるといいなあと思います

学年会で

音楽：歌う声が小さくなってきた。

家庭科：間違った発表をばかにする子がいる。

逆に、わざと間違えてうけようとする子がいる。

国語：教科書をみんなの前で声を出して読む子が少ない。

翌日、朝のSTで注意をする。個人的に指導の必要がある生徒は、放課を使って話をする。

資料 a

この間、教科担任から様子を教えてもらう

私の全体的な注意では、この状態を脱することができない。ますます落ち込む。生徒のいらだちも感じられる。

イ、自分達で改善していこうとする試み

6月14日から学級会開始(クラスの諸問題を考えよう)

以後、3回の学級会(資料b)

問題点の絞り込み、できるだけ口出しせずに活動を見ている。自分達の心の中に重くのしかかっていること、みんなの力がないと解決できないものに焦点を絞っていくようアドバイスを与える。

6月17日 アキラ(成績:中程度)

ぼくはこういうことは、とってもよくないことだと思えます。先生によって態度が違うのは、やさしさ、こわさで先生を見ていることです。……

……なおす方法はぼく自身わからんけど、一人一人なおさないかんけど、全員がいっしょになおるといい。……とにかく、じっくりじっくりなおさなあかんと思えました。

a 先生によって態度を変える

b わかっているても手を挙げない

この二つに絞り込まれる。aについてももう少し追求してみる。・授業のあいさつに差がある。

・忘れものの数が違う。

・私語が多い、少ない。

・よく手が挙がる教科とわかっているても手を挙げない教科

結局、授業のあいさつは級長が先頭に立ってがんばる。

忘れものは、記録ノートをしっかり使う。

私語は授業に集中できればなくなっていくだろう

という結論に達し、aにも含まれているbに取り組むことが決定された。

1の1 約束

私たちは、わかったら手を挙げます。

掲示係の手により、前面黒板の上に掲げられた。

学級会後の生徒たちの感想は、資料cのようである。

6月21日 アユミ(成績:中程度)

いま、クラスの約束は「わかったら手を挙げる」これはわたしも賛成だったけど、反面、挙げられるかな?と心配でした。でもなんとかいまは大丈夫です。

小さい目標がクラス全員で守られたら、きっと大きく
すてきなクラスになれるだろうな。・・・・・・・・

帰りのSTでその日の様子を各班で振り返り、発表している。私は、そうか、そうかと聞いているだけ。明日はもっとよくなるといいね。でその日が終る。生徒の様子や班ノートを見ても、決して順調に進んでいるとは思えない。時には、もっと、しっかりせんかい。と言いたくなるが、なんとか生徒たちの中から、良い芽が出てこないだろうかと待っている。

ウ、アンケート調査から（資料d）

二学期に入ってから、今までの取り組みを振り返って見ようということで、アンケートを実施した。

- ・内容 1、小学校6年生の授業態度について
- 2、中学校に入学してからの変化について
- 3、学級会の前後の授業態度について
- 4、つまずきの原因は何か
- 5、態度改善のための個人、班での努力
- 6、挙手することで得た、良い経験

・感想 やはり順調に進んでいるとは言えないようだが、少なくとも取り組みはマイナスの要素とはなっていないように思える。生徒は、多かれ少なかれ挙手し、発言したことによって良い経験をしているようである。しかし、それが発展していかないのは、「つまずきの原因は何か」で見られるように授業がわかりにくいということ、恥しさや失敗に対する不安が大きな原因のようだ。

「気軽に・・・」という私の願いからは程遠いものである。しかし、生徒たちは自分たちの約束をなんとか守ろうとして、小さな勇気や知恵を出し合っているようだ。この輪がどうやったら広がるのだろう。バズとの接点が見えてきたように思える。

今後の指導

同じ心配をしている仲間がいる事を知らせよう。がんばろうとする勇気や知恵が有ることを知らせよう。STを使って復習バズなどで練習を試みよう。ようやく3年前の出発点にたどりついた。

こういうこともやれるのではないかの心境

である。

提案主題 自主性を育てる学級経営

—— 短学活の自主的運営を通して ——

愛知県春日井市立中部中学校 武山春雄

研究内容

1. はじめに

(1) 学級経営の意義とねらい

学級経営は、すべての教育活動の基盤であり、出発点である。したがって、学級経営を充実させることは極めて重要な課題と言える。学習指導要領に示されている特別活動の目標から照らして、次に示す三つの課題が学級経営に求められると考えられる。

- ① 生徒一人ひとりの個性に注目し、それぞれの個性を最大限に伸ばすこと。〔個性化を図る課題〕
- ② 集団における望ましい人間関係の育成と適切な集団活動の展開によって、社会性のある人間に育てること。〔社会化を図る課題〕
- ③ 一人ひとりの生徒が、常に心身を健康にして調和のとれた安定した発達をとげるようにすること。〔安定化を図る課題〕

私たちは、『自主的・自律的な特別活動』の展開を目指している。自主的・自律的とは、他に依存することなく、自己の自由意志によって正しく判断し、行動する能力であると考え。具体的には、研究紀要の「研究の全体構想」の育てたい生徒像にも示したように、自己の考えをしっかりと持ち、他との関わりの中で相互に高め合い、励まし合って、生き生きとした学校生活を送ることができる生徒を育てることを目指している。こうした特別活動のねらいから考えても、自主的・自律的に行動できる生徒を育てる学級経営の展開が重要になってくるのである。

(2) 学級経営における短学活の意義

朝と帰りの短学活は、教育課程の三領域の中の特別活動に位置づけられ、学級の時間との関連も深いものである。

朝の短学活は一日の学習のスタートとして、生徒一人ひとりに「一日の学校生活をしっかり送ろう」という意欲を喚起させる時間である。また、帰りの短学活は一日の生活や学習を反省し、「明日もがんばろう」という意欲を湧きたてる時間である。

短学活を充実させることによって、生徒一人ひとりの自己の個性・能力の伸長を目指し、自己実現を図らせることができ、さらに、集団における望ましい人間関係も育成できると考える。生徒たちによる自主的運営への手だてを講ずることによって、短学活を充実させ、価値あるものとしようとする努力が、自主的・自律的に行動できる生徒を育てる学級経営に迫ることにつながるのではないかと考える。

2. 短学活を充実させるための取り組み

(1) 短学活の時間確保

短学活の時間はどれくらいが適切なのかは、学校全体の時間配当とのかねあいや、短学活に盛り込む内容やねらいなどによって変わってくるので、一概にこうだとは言えない。本校では、朝の短学活には、教師の打合せのための10分間を含めて30分間を当てている。また、帰りの短学活には、従来は15分間であったのを、昭和60年度からは25分間を当てている。帰りの短学活の時間を延長した主な意図は、生活バスと復習バスの導入を行い、短学活の充実を図ることにあつた。

(2) プログラムの設定

現在取り組まれている「短学活のプログラム」は研究紀要に示してある通りである。短学活をプログラム化した最も大きなねらいは、生徒による自主的運営を容易にすることにある。さらに、短学活における個人の行動目標を明らかにし、短学活の限られた時間を有効に使うこともねらつたのである。個人の行動目標として、次のような点をおさえた。

- ① 自分の分担は完全に果たす。
- ② 自分勝手なことをしない。
- ③ よりよい学級にするために自主的に行動する。

生徒の自主的運営といつても、生徒まかせであつては自主性も育たないと考える。教師の指導あつてこそその自主性である。そこで、短学活の開始時（朝は 8時10分、帰りは 3時45分）には、教師が必ず教室にいるようにすることとか、上記の行動目標が守れるようにねばり強く指導することなどを共通理解事項として確認し、指導に当たっている。

(3) 復習バスの導入

ア. 短学活と教科指導

復習バスとは、授業で分からなかったところを教え合つたり、大切なことを確かめ合つたりする相互活動である。復習バスを帰りの短学活に取り入れたのは、

- ① 今日、学習した内容を定着させる。
- ② 学習理解の知的な面と同時に態度的な面、すなわち学習意欲を喚起させる。
- ③ 相互作用により、お互いの理解を深めさせ、望ましい人間関係を育てる。

という三つのねらいからである。

中学校における教科担任制の弊害の一つに、教科指導は教科担任がもつぱら行うものであり、学級担任は関与しないという意識をもたらしやすいという指摘がされている。こうした弊害を少なくするためにも、短学活に復習バスを取り入れることの意味があると考えた。すなわち、復習バスの導入が、学級担任の教科指導への積極的な関与を促すことにつながると考えたのである。ただし、これはどんな学習にも意欲を持って取り組ませるといふ、学習態度の形成という面において教科指導に関与していくということである。短学活中における復習バスは、授業中とは自ずから異なつた学習活動である。すなわち、子どもの自主的な学習活動が、より積極的

に展開できる場であり、時間なのである。学級担任が復習バズの充実のために行う指導は、子どもに意欲的に取り組ませるための工夫と、復習バズの時間を確保するために、短学活の運営を能率よく行う工夫に向けられる必要がある。

イ. 復習バズの進め方

復習バズをとりいれて実践をしていくなかで、復習バズをとり入れるのは難しいとか、他のプログラムに時間をとられがちになるなどの意見があった。こうした意見を検討していくなかで、教師側に復習バズをとにかく難しいもの、高度なものにとらえる傾向があることが明らかになった。そこで、「今日の授業で何を学習したのかを確かめる」というような、できるところからの出発をまず考えたのである。

実践を進めていくなかで、小テストを使って復習バズをうまく定着させた事例がある。右に示したのは、小テストの一例である。この小テストは、学習部の生徒に自作させたものである。これを使って復習バズに取り組み、答え合せや確認の段階でバズを行うのである。このやり方は、課題が明確なので子どもたちも取り組みやすく、また、学習部の生徒の自主活動を助長するという利点もある。

名前()	
・単語を書きましよう。	
(1) 課 _____	(2) ^{やあ} こんには _____
(3) よい _____	(4) あれは _____
(5) あなたの _____	(6) はい _____
(7) いいん _____	(8) うれは _____
・次の文を書きましよう。	
(1) 私の名前は西野雄子です。	

(2) わはよう、マイク。	

(3) これは あなたのペンです。	

(4) これは あなたのペンですか。	

(4) 生活バズの取り組み

ア. 短学活と生活指導

もともと短学活は学校における基本的な生活指導の場として機能してきた。しかし、それは教師からの一方的な説諭や注意のみで終わってしまうことが多く、大部分の生徒は教師からの指摘を自分の問題としてとらえることは少なかった。このことは生徒相互の人間関係の歪みなどから生じることが多い生活上の諸問題を、円滑に解決する機会を少なくしていた。

こうした状況を克服するてだての一つとして、私たちは短学活に生活バズを取り入れたのである。一日の生活をもとにした相互活動を行うことは集団における望ましい人間関係を育て、さらに社会性のある人間に育てることにつながり、それが集団のモラルを高めることにつながるのではないかと考えた。今まで「注意しにくかった」「注意されるとおもしろくなかった」ことから、「注意しやすい」「他人の注意を素直に聞ける」という態度への変容が見られつつある。

イ. 生活バズの進め方

本校の生活バズは、研究紀要に示した短学活記録表をもとにして、帰りの短学活で取り組まれる。その内容は、朝の短学活で決められた班目標が守れたか、ベル着や無駄話をしないなどの学習ルールが守れたか、美化・緑化活動に意欲的に取り組めたかなどを話し合っている。また、日直班による点検を行っている学級では、日直の点検結果と班の反省を関連させながら話し合っている。

(5) 短学活公開の取り組み

ア. 短学活公開のねらい

私たちは、授業公開に基づく授業研究によって指導法の改善を図るように、短学活公開と、それに基づく研究協議により短学活の充実を図ってきた。短学活公開は次のようなねらいを持って行った。

- ① 短学活の意義・役割についての共通理解を図る。
- ② 短学活の中心的なプログラムである復習バス・生活バズの進め方についての経験交流を深める。
- ③ 生徒による自主的運営を促すために生徒も参加させる。

イ. 短学活公開の方法

各学年3～4学級の短学活を公開し、他学級の担任と生徒代表が参観する。参観する生徒は学級担任が任意に4～5名選ぶが、大体は学級委員など学級の核となる生徒をえらぶことが多い。生徒も参観させるのは、こうした相互交流が、生徒による短学活の自主的な運営を促進する一つの手だてとなると考えたからである。

参観する生徒は、短学活参観記録表に、短学活の流れ、自分のクラスでも取り入れたいこと、改善した方がいいと思ったことなどを記入する。この記録表をもとに、自分のクラスで参観結果を発表し、他クラスの短学活の状況を報告する。その後、記録表は参観クラスの学級担任に渡され、短学活の指導改善に役立てている。

このように短学活公開は、短学活の重要性についての共通理解を深めるためのよい機会となっているばかりでなく、教師には指導力量の向上を、生徒には自主的運営への意欲と自信を生みだしている。

3. まとめと今後の課題

私たちの実践は、生徒の自主的な運営の手だてを講じることによって、短学活の充実を図り、さらに、そのことを通して自主的・自律的に行動できる生徒を育てる学級経営の展開を目指してきた。研究を進めるなかで解決しなければならない、いろいろな問題に直面した。そうした問題解決への努力が、教師の資質向上の一助となっているのではないかと考えている。短学活も学級経営も、毎日、絶え間なく継続して行われる営みであるがゆえに、その充実を図ることは大切な課題なのであることを痛感している。

今後は、短学活の中核ともいべき復習バスと生活バズの研究実践をさらに深めることと、計画立案の段階から生徒を主体的に取り組ませる手だてを探り、短学活の自主的運営をさらに進めることを課題として研究の継続・発展を図っていきたい。

短学活参観記録表				参観クラス	年	月	日
この記録を参観した人				年	月	日	後藤 真生
1. 短学活でどんなことをしていたか主なことを記述して下さい。							
3:15							
20. 赤っ子の道徳							
25. 生活記録							
30. 復習バス'プリント (書き出し)							
35. 生活記録							
40							
2. 短学活を参観して、自分のクラスでも参観にしたいと思ったことは?							
* 短学活記録表に記入する時 班員みんなが意見もあうこと。							
* 時間が早くあつたこと。							
* 復習バスの時 学習部がプリントも作り、書き出しもしていたこと。							
3. こういう点を改善したほうがいいと思ったことは?							
みんながいて話すからいいからかもしんないけど、発表する人の声が大きかったこと。							
4. 今日の参観を通して得た感想を書いて下さい。							
全体的に、うちの参観もいろいろと内題だった。							

積極的生徒指導の取り組みをめざして ＝バズ活動による人間関係改善をめざして＝

愛知県春日井市立中部中学校 伊藤 富 男

1. 生徒指導に取り組むにあたって

(1) 本校の概要

本校は全校生徒1612名の大規模校である。創立以来今年で41周年を迎える学校である。いわゆる学校荒廃につながるような大問題は起こっていないが、生徒の問題行動は毎年少なからず起こっている。ことに近年、いじめや登校拒否などの集団における人間関係にかかわる問題がじょじょに増加してきている。これらを解決するため4年前からバズの考え方を取り入れ、人間関係の改善をめざしてそれによって生徒指導上の問題行動を克服していくよう努力している。

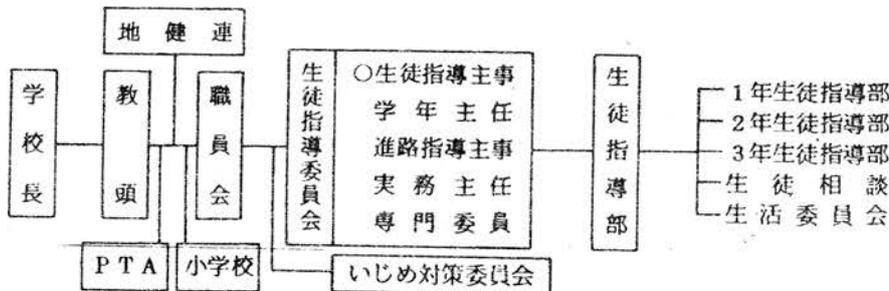
(2) 基本的な考え

これまで本校の生徒指導は、生徒の問題行動の処理に中心がおかれていた。しかし、ここ数年は生徒の自主的な活動を促し問題行動に至る生徒を含み、学校生活における成就感等を育てていく積極的な生徒指導に重点をおくことを心がけている。幸にして本校においては、大きな荒廃の経験を持っていないが、現状に甘んずることなく教育活動に前向きで取り組む必要性を感じている。

生徒の問題行動の背景には、人間関係の問題がある。人間関係を正しく機能させていくなれば生徒指導における問題行動は未然に克服され则认为している。それはバズ学習の考え方に合い共通するものである。したがって、積極的な生徒指導を進めていくためには基本的にバズの取り組みが必要不可欠であると考ええる。

本校の生徒指導体制ならびに積極的生徒指導の取り組みを以下に紹介する。なお本校の研究紀要と重複する部分は項目のみとする。

2. 本校の生徒指導体制



3. 生徒指導の実際

(1) 問題行動に対する生徒指導

ア、厳しさと暖かさの両面からの指導…基本的な指導方式

「いけないことはいかなる理由があろうといけない。」といった厳正な指導方針で臨み、安易な妥協は行わない。しかし、けっして生徒を責めるのではない。問題行動の再発防止はもちろんのことではあるが、生徒自身の心のゆさぶりははかり自立のてだてを構じていくようにする。また、共通理解による相談体制ならびに共通指導体制（各学年・全校）が確立しており教師の指導が進め易くなっている。

イ、生徒理解による指導…生徒個人カードによる生徒理解の資料蓄積。

本来生徒指導の基本は学級経営にある。したがって、学級担任がその学級の個々の生徒を十分理解していくことが必要である。本校では、各学級の生徒一人ひとりの行動や性格等を随時に記録し、学級経営案にはさみ三年間申し送るようになっている。これには生徒の良い面も多く記入するように配慮している。これにより生徒個々の理解をより深め学級経営の基礎的資料とするとともに、主に教育相談に活用している。

ウ、地域の教育力の強化…街頭補導・パトロール

教育を考えるのに地域や保護者の協力や理解がなくては成り立たない。本校では開校以来の卒業生の多くが、この地域の一線で活躍しておられる。そのために本校の生徒の健全育成に対して非常に協力的である。地域の方からの通報や御指摘が数多く寄せられ問題行動の未然防止や早期発見に役だっている。それに地建連（地域生徒健全育成連絡協議会）や地区民生委員による補導連絡会、またPTAの役員や学級委員による街頭補導・パトロールなどの活動が積極的に進められている。

(2) 相互活動による生徒指導…「磨き合せ、響き合せ」

ア、授業等…態度目標

本校ではあらゆる領域でバズ学習が進められており、授業においては班での相互作用（教え合い・助け合い等）によって効果的な学習を進めるとともに、学習に対する孤立感をなくしていこうとしている。ことに問題行動は学習に対する未充足感に起因していることもあり、参加度を高めることによって学習内容の理解をより深めるようにしている。そうすることによって授業妨害、エスケープ等の問題は全く起こっていない。また、態度目標を設定することは、基本的な学習習慣を育てるばかりでなく基本的な生活習慣の確立にも役立っている。教科担任はただ教科のみを教えるのではなく、学級経営にも参加しなければならない。学習規律の確立は学習内容の理解には欠くことができないことであるし、それはすなわち基本的な生活習慣の基礎となることである。授業を通して意図的にルールを育てようとする態度目標の設定は、生徒指導上意義あることである。

イ、生活バス

本校では、班は授業だけでなく清掃・給食当番など学校生活のあらゆる場面で機能している。いわゆる生活バスと呼ばれるものである。班でいろいろなことに取り組むに当たってまず目標を決めて始め、最後に反省をして明日への課題をつくる。途中においても、相互に指摘し合って進めている。(相互批評)このような班活動を通してより良い人間関係を育てるとともに、正しい生活習慣の確立がはかられる。

ウ、短学活…短学活記録表

生活バスを十分に機能させ効果的な相互活動を行っている。(研究紀要参照)

エ、班ノート・記録ノート

本校では生徒の内面に迫るための手段として記録ノート・班ノートを利用している。班での人間関係を円滑にしたり、個人の問題を相互に解決したりするなど効果的に活用させている。

(3) 道徳教育の積極的実践(研究紀要参照)

(4) 自主性を育てる指導

ア、生徒会活動の充実

意欲的な生徒の活動を援助し、自主的な活動を為し遂げたという成就感を与えるように配慮しつつ生徒会活動の充実を図っている。主な活動としては研究紀要に記載されている。

(ア) 校則問題に対する取り組み…生徒による自主的な校則の改正

本年度より校則の改正に向けて進めている。今現在は、生徒全員ならびに保護者に対するアンケートを実施し集計作業と分析を終え、それをふまえて教師による検討会を重ねて、生徒の手で実際に自主的に考えて作り上げさせていく部分を模索しているところである。今後は生徒・保護者代表の意見を聞きながら、生徒会が中心となって学級での話し合いを進めていく予定である。関心の高いことであり、生徒の相互活動を生かしてより質的に高い意見を吸収したいと考えている。

(イ) 委員会活動の充実

a、緑化委員会…緑化表示板

b、生活委員会…あいさつ運動・生活集会

本校では月に一度個々の生徒の生活面での見直しを行っている。教師中心ではなく極力生活委員の手で指摘しあうようにしている。生徒は自己の判断の基準が比較的甘いものである。そこで他の生徒(委員)から指摘し合うことによってより効果的な相互批評がなされている。

イ、クラブ・部活動の充実(研究紀要参照)

ウ、学年・学校行事の充実(研究紀要参照)

4 まとめと今後の課題

問題行動が起こる度に、その事後指導に追われつつ生徒指導の難しさを幾度となく痛感している毎日である。いろいろな分野で全力を尽くして教育活動を行っているにもかかわらず生徒指導上の問題は尽きることがない。しかしながら、人間関係の問題がその主たる要因であると考えるとき、それをいかに改善していくかを考えていけばよい。バズの理論がまさにその改善をねらったものであることを考えるとき、バズ活動を主体的にとり入れ、積極的に日々の教育活動を進めていくことが一層大切であると思うのである。決して、てまえみそなことを言っているのではなく、そこに生徒の理想的な姿を目標として描きながら、普通に取り組んでいけば問題行動に走る生徒の何パーセントかは救えるのではないかと思う。あえていえば、問題行動に追随する生徒は確実に減らせるのではないかと思う。しかし問題は起こるのであってそれを0にすることは難しいことである。おのずと学校の指導の中には限界がある。その点は、保護者・地域・諸機関との連携を取りながら、つねに模索しながら全力を尽くす所存である。